

330
7

(M)

神學叢書

第叁卷

DIVINE COMMANDMENTS

神

の

内

証

DIVINE IMMANENCE

*An Essay on
The Spiritual Significance of Matter*

BY

J. R. ILLINGWORTH, M.A.

Published with the assistance of a grant from
The Society for Promoting Christian Knowledge
And under the direction of the Committee of
The Japan Church Literature Fund.

THE FUKOSHA

1. Ogawamachi, Kanda,
Tokyo

330-17



博士
 イーリング
 オース著
 文學士
 央會
 保譯

の
 内
 住

普
 光
 社
 發
 行



*Published with the kind permission
 of the Author and the English Publishers,
 Messrs. Macmillan & Co.*

神の内住

目次

譯者緒言	一
著者緒言	三
項目	六
第一章 物質と精神	六
第二章 物質界の宗教的感化力	七
第三章 自然に於ける神の内住	九
第四章 人に於ける神の内住	一一
第五章 神子化身説と奇蹟	一二
第六章 神子化身説と聖典	一四
第七章 神子受肉説と三位一體説	一五

第一章 物質と精神……………一

第二章 物質界の宗教的感化力……………二六

第三章 自然界に於ける神の内住……………六一

第四章 人に於ける神の内住……………八七

第五章 神子化身説と奇蹟……………一五

第六章 神子化身説と聖典……………一四三

第七章 神子受肉説と三位一體説……………一七三

附 録

(一) 人格の自同性……………一

(二) 自由意志……………二五

譯者緒言

譯者高等學校大學に在りし頃時代の懷疑思想に感染し、基督教の信仰を動搖せしむる難問を抱きて懊惱せりき。後ち大學を出で聖教社神學校に移り基督教神學の研究に潜心するに當り英の辨證學者イリングウオースの著によりて開發せらるゝ所多かりき。イリングウオースの著述中余が最初に手をせるものは「神の内住」にてありき。而して余が此を譯出せむと企圖せる理由は余の嘗て抱きし如き疑問に悩む者今日猶あらば其疑問の幾分は本書によりて解結せらるべしと思ひたればなり、否な解結の端を開き得べしと思ひたればなり。原文は條理整然文脈流暢議論堂々たるものあり。加ふるに文學的趣味に乏しからず。譯者の不文名玉を化して瓦礫となせるの譏を免れず。只だ譯文によりて直接に原書を繙かむとするの慾望を起すものあらば譯者の望足れり。

本書を譯するに當りて聖教社神學校長今井壽道氏三一神學校教授山縣雄杜三氏の助言と注意とによりて多大の裨益を得たり。而して此を公にするに至れるは

宣教師ライアソン氏の盡力によれり。併せて巻頭に於て三氏に感謝す。

明治四十二年 月

譯者識す

著書緒言

近來英國に於て出版せらるる、哲學書中第一流と稱せらるるものは皆批評的態度のものにして正當なる意義に於て懷疑的と稱するを得べきもののみ。されど批評的の思潮は元來其性質上一時的移像に過ぎざるが故永續すべきものに非ず。そは過去の陳套なる思想を點檢し之を篩に懸くる上に必要なりと雖も其目的とする所は將さに現れむとする積極的思想の準備たるに過ぎず。宇宙は畢竟事實なり。日月星辰は實在なり。男も女も相愛して生存す。而してかく宇宙が存在する以上此に對して何等かの積極的説明なかるべからず。單に消極的言辭を以て説明となすは不可なり。故に近代の批評的傾向は改造再建に到達する迄は其意義を完成し得ざるものなりと知るべし。誠に世人は今や積極的綜合的説明に逢著せむと欲して諸多の方面より摸索探求しつゝあるなり。

本書は嶄新なる創見を以てこれが解結を與へむと期するものにはあらず。只だ綜合を以て主眼となし日常吾人が斷片的に熟知しつゝ而も統一的に此を結合せ

四
 ざる思想を結合せむと企てたるのみ。それ自然と宗教との關係は吾人の最も親
 炙する所なり。自然は不調和に充盈すと雖も而も其内部に愛ありて一切を統一
 す。されば科學者詩人畫伯宗教家實務家何れを問はず又道は異れど自然裡に宿
 る愛の力に捉へられ自然を愛せざるものはあらず。愛は實に不可思議なる課程
 なり。光榮ある力なり。憂苦を癒すべき清涼劑なり。嗚呼人誰れか此に動かされ
 ざるものあらむや。吾人にして自然の面前に立つならば一種の靈感に打たれざ
 るものなからむ。此靈感こそ一切自然宗教の根底に横るものなれ。而して近代
 の如く自然を愛する情の發達し近代の如く此靈感を受け得る能量の増大せるは
 古來未だ曾て有らず。隨て現代の人心に最も強く響くものは自然宗教的思想
 なりとす。されば此思想は今日積極的建設的信仰に到達するに重要な階梯と
 なりぬ。然りと雖も長き歴史を閲したる吾人は到底昔日の如き單純なる自然宗
 教を以て満足する能はず。道德界政治界社界現象に於ても今日既に自然に歸る
 能はざるが如く宗教界に於ても自然に歸り得ざるなり。否な自然そのもの、吾
 人に教ゆる所は生命の原理が進化にあることなり。而して進化とは何事によら

す其形式に於て明劃の度を増進しゆくことなり。然らば宗教も亦他の一切事と
 同様進化の理法に従ひ歲月の推移につれて益明晰の度を加へざるべからず。益
 發展して輪廓を明にせざるべからず。即ちかの天啓たるものは益精確の度を加
 へざるべからず。

本書の主眼は神子受肉説を以て此種の宗教的發展の絶頂たるを示すにあり。吾
 人にして自然宗教を分解すればする程益神子受肉の必要を感せしめ又神子受肉
 の事實は自然宗教を其以前に豫想せざるべからざるを示すにあり。此くの如き
 見界は諸代の神學者等が幾度となく主唱せし所なれば多數の讀者には或は陳腐
 なる説と思はれむ。されど歴史事實以外に此問題を研究せむと欲し、又近代の
 思潮に親みて自然宗教的傾向を帶ぶる人に向つては、自然宗教の完成が基督教
 の信經に存するを指摘するは強ち徒事にはあらず。

本書は拙著「ハイネケ、ヒューマン、エドワーズ、グレイ、人格論」の後篇と見るを得べし。故に同一方向の思想を一
 層深く詳説せる所多し。但し該書に於て絮説せる所を省略し該書に於て略説せ
 る所を必要上一層綿密に論じたる點なきに非ず。殊に附録に於て然りとなす。

項目

第一章 物質と精神

(一) 物質と精神との區別は原始哲學が肉と靈を云爲せし當時に始まる。

物質と精神とは如何に異なるものなりとするも吾人の之を知るは二者結合の狀態に於て知るの外なし。

故に二者何れをも完全に知悉するを得ず。

されど經驗上個別のものとして識別し得べき移像を代表するものと考へ得べし。

蓋し精神は思索欲念愛好するもの、物質は空間中に運動するものと考へ得べし。

(二) 物質は精神に仕ふるも精神は物質に仕ふることなし。

上記の實例。

こは二者の間に目的上の關係あることを暗示す。即ち精神は物質の終局原因なること是なり。

(イ) ベーコンの反對説は終局原因なる文字の誤解に基く。

(ロ) スピノザの反對説は別ち難き宇宙と人とを枉げて別ちたる誤謬より出す。
(三) 人類の判斷力に従へば精神上の強さは物質上の廣さに勝る。
隨て精神は物質を自己に隸屬せしむる權利を有す。

第二章 物質界の宗教的感化力

物質が精神に仕ふる方法中最も價值あるものは其有する宗教的感化力なり。

上記の史的實例。

(一) 太古の文學

埃及の讚美歌、

吠陀經典。

波斯の古典、

希伯來の詩篇。

(二) 希臘羅馬の文學

詩人

哲人

緒 言

(三) 基督教文學

師父

中世紀の著述家。

(四) 文藝復興時代

カムパネラ。

ペトラーク。

(五) 後代の神學者

スーソー。

ツウイングリ、

フェネロン、

ダブルユール、ロー、

(六) 近代の文學

シエレト、

ハイロン、

ウォーグウァース。

以上の引例は無限数の類例を代表せしむる少数に過ぎず。變態多き信經よりも神秘的情緒の方遙かに根本的なるを證明するものなり。

第三章 自然に於ける神の内住

外界自然の宗教的感化力は其解釋よりも普遍的の事實なり。

此事實は事物の背面に靈的實在あるを示證す。もし然らずとせば。

(一) 此觀念を幻覺とするか又は

(二) 此を感得する官能を不信任視せざるべからず。

此を幻覺なりとなすときは「實在とは何ぞや」てう疑問を發せざるを得ず。

實在なる語を熟慮すればそは「空間中の存在」この意にはあらで人格に對する恒常的關係を意味すと知らる。

此標準に従へば感覺の對象も科學的宇宙觀も同等の實在性を有す。二者は吾人の異なる官能に印象を與ふるものなれど一樣に正當なる印象を與ふ。

情緒は理性に比して信頼の價値少しとなすものは情緒理性何れも同一人格の經

驗に於ける同格の要素なるを忘れ、當の感化力が單に情緒にのみ基くものにあ
らで人格の感得せるものなるを忘れたるものなり。

若し當の感化力を無視すべからずとせば吾人は自然界に靈の存在を許容せざる
べからず。靈の自然に對する關係を知らむと欲せば之れが解釋を人格よりの比
論に求めざるべからず。(吾人はその他に知るべき方法なければなり。)

人格は

(一)物質以上に超越する性質と。

(二)物質に内住する性質と

を結合す

故に此比論は

(一)汎神教(内住一方)

(二)自然神教(超越一方)

(三)一元説(自同律一方)

を拒斥すると同時に。

三位一體説と調和す。

第四章 人に於ける神の内住

神若し自然に内住するならば自然の一部たる人類にも内住せざるべからず。

良心に於ける證明。

靈感作用インスピレーションに於ける證明。

此は神子受肉説によらざれば完成するを得ず。

(一)神子受肉を信せんとする傾向ありしは以て神子受肉が事實ならざりしを證明
するものなりとなす説。

されど此説は神子受肉が前立的に蓋然性ありとの假定を確立するに非ずば成
立せず。此假定が成り立たずば却つてかの傾向は反對の證明を導くものな
り。

(二)又神子受肉は奇蹟なるが故に蓋然性なしと考ふるものあり。

されど神子受肉は無假定的に無比の事實なり。故に反對論者の曰ふが如き意
義に於て奇蹟と稱するを得ず。

(三) 神子受肉説の根本的證明は靈的の證明ならざるべからず。何となればその人格の自願なればなり。故にそは奇蹟によりて支持せらるべきものにあらざりて却て奇蹟を支持するものなり。

時間の推移は奇蹟の効果を軽減したれども一大預言の効力を増進せり。

(四) 加之神子受肉は贖罪事業なり。その目的は一度破壊せられたる法則を回復せむとするにありき。

故に此事實は

(一) 處女降誕

(二) 疾病治療の奇蹟

(三) 宇宙的奇蹟

(四) 復活

等の奇蹟に對する吾人の見界に影響を與ふるものなり。

第五章 神子受肉説と奇蹟

奇蹟反對論の根據は主として自然の齊一律に基く。

此に對するモヅレの解答。

されど吾人は今日統一を言ひて齊一を曰はず。

而して統一は靈的思想に屬す。

靈は物質に對して主宰權を有す。

原因結果てう思想を分解するときも亦同様の結論を發見す。

道德律が物理法則に超越すとの點に就きニューマン博士の論。

人格經驗は一切知識の根元なり。

而して人格經驗は道德律の主宰權を以て正當なる權利なりと認む。

絶對者の物質に對する關係に就きロツツエの論。

神子受肉説は人的意義を有するのみならず、又宇宙的意義をも有す。神子受肉

の奇蹟は此思想とよく調和す。

奇蹟が一般に途絶えたる事實はそが現れたると同様に必要なることなり。

但し奇蹟は特種攝理に對する信仰を強めたり。特種攝理は現代にも行はるゝ所

正さに古の奇蹟に比すべきものなり。

物質と宗教とは第一義的の關係の外猶第二義の關係を有す。第二義的の關係とは人心が物質に反應をなすによりて生ず。

蓋し原始人は必須的に

(一) 神を特定場處に結び付け。

(二) 神に仕ふることを特種の儀式に結び付く。

(三) 此れが實例。

而して無所不在なる神が特に認めらるゝ場合には神は特に其處其時に在し給ふ。

物質は全然靈の利益をなすものにして靈に隸屬するものなり。

此原理は基督教の歴史全體に通じて明かに表れたり。

(一) 人體を取り扱ふ上に

(二) 聖典組織の上に

(三) 藝術の上に

凡べて此原理を認め得。

茲に於てか藝術と聖典との宗教的感化力は物質的自然の宗教的感化力と同等に實在なり。藝術と聖典とは自然の感化力を聲明強意せるものに外ならず。

第七章 神子受肉説と三位一體説

神子受肉説は其中に含蓄せらるゝ三位一體説と同様一見哲學の學説の如く思はるれど實は實踐的起源より起れるものなり。

神子受肉の主眼は愛なる神を啓示せむとするものなりき。而して愛なる神は神性中人格の複重性あり其中に愛が行はるゝにあらずば解すべからず。

此天啓の目的は人格を完全に動かし得る唯一の手段即ち愛によりて人生を感化せむとするにありき。

而して愛の行爲は愛の言語以上に感化力を有す。故に此天啓がキリストの生涯によりて始められしは最も妥當なる方法なりしなり。

此キリストの生涯はそが含蓄する形而上學の教義に反射光を投映す。かくて其教義の最強證明は實踐的なるキリストの生涯にありとす。

附 録

- (一) 人格の自同性。
- (二) 自由意志。

神 の 内 住

神學叢書卷の三

物質と精神

第 四 章

物質と精神との關係は餘りに幽幻なる問題なれば一般讀者を益するものにあらずと思ふは否なり。吾人の人生觀藝術觀宗教觀無宗教觀は此關係に對する吾人の見界如何によりて左右せらる。人生を春の野を行く旅路と見むも冬枯れの曠野と見むも其根柢は凡べて此の問題の解釋に縛がる。かくの如く重大なる結果を齎らすものなるが故に能ふべくば此れが解釋の眞を期せむと試むるは當然のことには非ずや。

是問題は人生の實際方面に無關係なるものに非ず。日常の利害と没交渉なることにも非ず。然か思ふは大なる誤謬なり。殊に宗教上の思想及び生活に對して密切なる關係を有するものなるが故に決して等閑に附すべきものに非ず。さればこの問題を解釋する必要は近來諸種の理由諸種の立場より極言聲明せらるゝ

を以て吾人の辯證を待たずして人の認むる所となりぬ。

これが起源を溯れば遠く原始時代の哲學に胚胎し肉體と靈魂の區別を認めたる當時に初まる。故に最も質朴なる人類の間にも猶此問題に關係ある思想を發見す。元より其初めは夢の如く漠然たる區別に過ぎざりしも反省作用の發達と共に諸派の學者の思想によりて醇化せられ闡明せられ益完全にして益包括的なる對比を形成し遂に今日の所謂物質と精神との區別となりて愈分明の度を加へ來りぬ。劈頭第一に注意すべきことは此二者の關係に就き如何様の見界を抱くとも或は二者を全然別種類のものと見るも或は同一物の二面と見るも見方の如何に拘らず吾人の二者を知るは二者の結合せる状態に於て知るの外なしとのことなり。先づ吾人の外部には物質界あり。日月星辰天空海土是れなり。而して物質界には多様な運動の課程と此に涵養する生命と其外觀の美と其音響の妙とあり。此固形の宇宙は吾人の生れざりし以前に存在し吾人の消滅する後も猶存在を繼續す。故に到底其存在が吾人に所依するものとは思はれず。否な動もすればパーケレー一派の主觀說を一笑の下に排斥せむとする傾きあり。然りと雖

も少しく反省をなす人は吾人の宇宙に對する知識が如何に精神構造に影響せられ如何に其色彩に染めらるゝものなるかを知らむ。精神は感官によりて宇宙を知ると雖も感官の與ふる印象は外界の事物と甚しき相違あり。虹及び夕陽は精神に多大なる感興を與ふるにも拘らず單に原子の波動に過ぎず。而して原子は色彩なる屬性を毫も有することなきなり。又吾人は音樂を以て最も精神的のものとなす。されど音樂は單に空氣の震動より流れ來るものに外ならず。此に於てか感官は只だ外界の吾人に及ぼす効果を傳達するに過ぎざるを知るべし。感覺知覺の如き簡單なる心理作用と雖も決して吾人の想像するが如く單純なるものにはあならず。比較配合推測等の諸作用を含む心理現象なり。されば此等の作用は如何に本能的に行はるゝにも拘らず全然睿智の作用なりと思はざるを得ず。更らに複雑なる知覺作用に及べば益其然るを知る。例へば山水畫を眺むるとき吾人は單に點線曲線彩粉カンパス等を見るのみに非ず。吾人は其間の意味を讀破して樹木を認め家屋を認め花卉を認め牛羊鳥類等を認む。是は既得の知識記憶及び思想の加はれる結果なり。吾人はかく眼球に映するものに解釋を與

へ補足作用を行ふ。此作用は習慣によりて自動的の課程を無意識中に行はしむるに至れども其起源を尋ねれば意識的のものなりしや疑を容れず。されば吾人は最初よりして物質そのものを観る能はず。物質が吾人に知らるゝや一方に於ては感官を通じて特殊の影響を受け一方に於ては意識の内部より特殊の影響を受く。科學の力によると雖も此中間に於ける著色を拂拭する能はず。誠や科學の利刀は打ちつけに見る世界の背後に衝き入り横断面の世界圖を示し得べし。眼に映する事物の背景たる機械の構造を曝露し得べし。即ち原子エネルギー、エーテル及び此を支配する諸法則を吾人に示し得べし。而も物質そのものに對する知識に至りては毫も科學によりて加へらるゝことなし。只だそは假説原理觀念等の別天地に吾人を導くのみ。假説や原理や觀念やよし果して眞なりとするも畢竟精神上の所産にして物質そのもの、教ふる所にはあらず。是に於てか吾人の知る物質は如何なる場所如何なる時に於ても精神と結合の状態に非るはなし。蓋し物質を知るとは物質と精神との關係を結ぶの謂なり。而して精神は單に受働的に外物を映す鏡面の如きものにあらず。識野内の對象を構成する要素

として能働的の能定方たり。

精神も又同様にして吾人は此を物質と抽離し此を單獨に知る能はず。造次顛沛に物質と關係し結合したる状態に於て此を知る。知情意何れを問はず其が自覺域に現れ來るときは必ず物質的の感官を所依となす。加之物質的の腦漿なくば思想なく意識なからむ。蓋し思想の變化一切は腦漿の變化を伴ひ決して單獨に起り得るものに非ざればなり。

吾人は腦漿中の運動を自覺し得ざるが故に純精神的の經驗と曰ふが如きものありと思惟す。然りと雖も如何程精神的なる經驗と雖も經驗は凡べて意識の一状態なるが故に意識の必須條件たる腦漿と分離しては起り得ざるなり。

かく物質と精神とは常に結合の状態に於て知らるゝ外なければ吾人は二者の何れに就きても完全なる知識を得る能はず。經驗は常に物質精神の複合せる状態なり。其中何れの要素にても抽象すれば經驗なるもの起らず。是に於てか二者の關係に就き諸種の學説は起りしなり。或人は精神を以て物質が調和の状態にあるものといひ。隨て物質が調和を失はば精神は消滅すと説く。又或人は物質

を以て精神の描出せる夢幻なりと様に主張す。此二説を兩極端となし其中間に無数の異なる學説あり。學説は兎に角直接に吾人が知る所は經驗なり。個人の經驗なり。而して個人の經驗に於ては物質と精神との二要素が相纏綿し相糾合す。故に純物質若くは純精神なるものを云爲する時は經驗を超越し經驗の一要素を故意に抽象しつゝあるなり。かく抽象せる一要素が存在するや否やは精神の外何物も此を知らず。かの自然的二元論者又は自然的實證派の信する如く物質精神の二者は各獨立にして別ち得べき二個の實在なりとなすものあり。此説は何等論理上の不都合あるを見ず。又唯心論者唯物論者の信する如く一は他の顯現様狀に過ぎずとなすものあり。是も論理上不合理にはあらず。又或學者は物質と精神とは一個の實在の二面三様式二作用にして同格なりと爲す。是も亦論理上不可能なるに非ず。而して最後の學説は近來一元論の名によりて復興し來れり。而も是は他の二説に比して毫も嶄新なるものに非ず。三説何れも哲學の生れ出でし初めより在りし説にして等しく臆斷たるを免るゝ能はず。吾人は今姑らく臆斷を排除し吾人の知り得る範圍内に止りて考へむと欲す。上

述の如く物質と精神とは分離し得ざるものなれども。一個全體の經驗中の或移像を物質なる語を以て代表し他の移像を精神なる語を以て代表せしむることは可能なり。かくて二者の究竟的關係の如何に拘らず思想上二個の移像として分離し得べし。かく考ふるべき精神の特質は自己意識あることにして自己を他より區別する識別力あることこれなり。一切の他を以て主觀的自我の對象となし得る力あることなり。同時に精神生命の特徵は自由の選擇と知識情緒及び實踐努力の目的を自己の目的となし且つ意識的に此目的を追求する點に存す。即ち學術語を籍りて曰へば人の行爲は終局原因によりて規定せらる。終局原因とは外部の物理的強請力にあらず。終局目的企圖理想等の形を以て吾人の精神内に現れ吾人は之に従ふも拒むも自由なるが如き原因を謂ふ。此點に人の自己決定力なるものを認め得べし。吾人は自己の精神内に現るゝ對像中自己の有とすべきものを選択し得。而して此選擇を反覆するによりて漸次に自己の性格を塑像し得るが故に或範圍内に於て人は自己を作り自己の原因となり得るなり。かく精神には自己決定力と自己塑像力とあるを以て精神は精神獨特の地位を有す

るものと考へざるを得ず。精神以外のものは悉く外部より規定せられ外力の造るがまゝに造られ自ら作らむと欲する所を選択する力なし。然るに獨り精神は自己の目的を選択し自ら作らむと欲する所を決定し以て自己の貴しとする存在を立し得。凡そ自己にして自己の原因となり得る資格ある者は誠に自家存在の資格あるものといふべし。否な自家の存在を欲念すてう事實そのものによりて自家存在の権利あるものといひ得べし。此點のみを以てするも精神は物質に比して絶對的の價值あるものなり。蓋し物質は自己以外のものと關係するによりて初めて存在の價值を生ず。例せば車輪の齒止、鎖の連環、機械の破片、繪畫の點線等は此を單獨に引き離して存在の意義あるにあらず。其意義あるに至るは全體に關係を結びて初めて然るなり。

かく形而上學の立場より見るも精神には自己意識と自己決定力あるが故に精神固有の存在を許し得べし。更らに倫理的及び情緒的の方面より見るも猶精神を特殊の存在として此を抽象すべき理由あるを認む。蓋し自己決定力は精神をして義務の觀念によりて行動し道德律に服従するを以て善なりと意識せしむ。而

して善の最高形式は自己を犠牲となす愛の生活にあり。故に愛の生活は自己意識あり自由意志あるものにありて初めて可能なり。愛は是れ目的の目的實在の實在にして其存在は何等の説明を須たすして明かなり。

生命は數多のものを與ふ―歡喜、悲哀、希望、恐怖等種はあれど老いたる友よ……そは唯だ偉なる愛を知らせむとの手引に過ぎず。

さなり愛は如何なるものなりしか如何なるものなるか如何なるものとなり得べきかを知らせむとの手引に過ぎず。「ブラウニング、砂漠の死」

次に物質に就きて考ふるに物質に對する吾人の知識如何を問はざるべからず。物質は個々の物體を造る共通原理なりと様に教へらるゝこと多し。然るに怪しきは何れの解剖學も未だ此種の共通原料を發見し得ざることなり。却りて吾人はかの原素なるものは數多きものなりと教へらる。近世化學の研究は益原素の數を増加し毫も此を減じたることなし。而して個々の物體に共通なる物質は此等の原素を悉く包含し物質性若くは空間を填充するの屬性を有すと説かる。然るに空間を填充するものは悉く分子運動又は質量運動をなすものなるが故に空

間を填充するてう屬性は空間中の運動と同意義なり。故に物質とは空間中に運動するものとの意に外ならず。今日の學者は更らに進みて物質は原子より成り原子は夫れ夫れ化學上の特性を有し化學上の特性は機械的配列の如何に基するならむといふ。然れども論じて此に至れば既に臆説の領野に進み入れるものなるが故に吾人は此臆説より一步を進めて他の臆説を立つる能はず。原子の究竟性は何ぞや？こは遂に吾人の知り得ざる範圍に屬す。是に於てか原子を以て假説となすと雖も結局原子は吾人の感覺を以て知り得ざるものなり。隨て物質とは手以て觸るべからず眼以て見るべからざる何者かの顯現なり、假象なり、現象なり、結果なり。物質そのものは畢竟吾人の知り得ざるものなり。然らば精神は思索欲念愛好するもの物質は空間に運動するもの、謂なり。兩者の究竟的關係に就きては吾人の知る所なしと雖も其顯現様狀のかくも著しき差を呈する以上は實際目的のため兩者を二個の異なるものとして取り扱ふも碍げあらし。かくの如き意味に於て精神と物質なる語を採用すれば二者の關係に就き一大原則あるを知る。物質は精神に使役せらるれど精神は物質に使役せらる

ることなしとのことなり。

此原則は意識なる語を以て精神なる語に代用せしむるれば一層一般的の形式となる。物質は意識に使役せられど意識は物質に使役せらるることなしとの形式は最下級の可感的有機體より最高級の存在に至るまでの意識生命一切を包括す。然りと雖も意識生命一切に共通なる原則は無論精神生命に就きても適用し得べく而して吾人が目下必要とするは單に精神生命にあるを以て今は其範圍を限定し廣く意識生命一般に及ばず、只だ精神のみに就きて論せむと欲す。

故に曰く物質は必然的に不斷精神に使役せらるるに反し精神は毫も物質に使役せらるることなし。人は藝術科學の資料として物質を利用し改良し得べし。但し此際注意すべきことは人は物質そのもの、性質を變せしむるを得ず只だ人に對する關係を變せしめ得るのみなることなり。電線を通じて傳達せらるる電氣は何等の變化を受けず。彫像として造られたる大理石は岩石の狀態にありし大理石と毫も異らず。貨幣に鑄られたる黄金も培養せられたる花も吾人に對する關係以外には何等の變化を受けず。人智人工は以て自然物の構造法則を寸毫

も變するに足らざるなり。

然らば物質は精神に如何なる貢献をなすか。人の意識状態はその何れを問はず必ず腦漿を條件となす。従て腦漿を育くむ血液を條件となす。故に血液を構成する化學原素を條件となす。即ち酸素窒素磷素炭素等に依らすんば吾人は思索欲念愛好するを得ざるなり。又思想意志愛情等は必ず自己以外に傳達せられざるべからず。精神は精神と交通せざる能はず。此際に於ても交通傳達の媒介者は物質なり。舌も耳も物質なり。言語は空氣の震動なり。印刷電信等は言語の代用をなすものにして是れ亦物質なり。機械石炭蒸汽鐵等は意志の活動範圍を擴大ならしむるものにして疑もなく物質なり。又かの藝術なるものを考ふるに人の精神は頑強なる地上の原料を摺み來りて此を自己の好むが如く變形せしめて自己を其中に呼入す。希臘の彫刻ゴシックの大伽藍中世の繪畫近代の音樂等は凡べて物質に精神的意義を宿したるものなり。精神は物質によりて形式を保つにあらすんば浮きては消ゆる泡沫の如く且つ現れ且つ沈みて何等の永續性を持し得ざるなり。

加之精神を外界物質中に投出するは精神の充實性を加ふる所以にして之を實現せしむる手段なり。此に於てか物質は精神傳達の言語なると同時に精神實現の媒介者なりといひ得べし。思想も活字の中に組まるゝ迄は只だ漠然たる状態の下に意識内に浮動する流の如く學説は實驗上の檢證を閱する迄は甚だ不確實なる抽象に過ぎず。善なる意志も外界の抵抗に面迫し此を拆伏して道徳行爲となる迄は有る甲斐も無き徒事に外ならず。愛情も優しき思ひと犠牲の行爲を幾千回となく反覆して其強烈を證明する迄は永久に安住し得ざるなり。されば精神は如何なる場合に於ても物質と提携せすんば自家を確立する能はず。物質と提携して精神の纖維は初めて剛健となり朦朧なりしもの明らかなる輪廓を形作り混亂の状態にありしもの明漸精確となり懷疑は決斷に躊躇は斷行に變質す。かく精神をして具體化し現實化し實在化せしむる必至媒介者は物質なり。而して物質の精神を益するの道は此に止らず。更らに進むて人の品性と行爲とに感化力を與ふるの益をなす。

「飛びゆく雲は其敏捷を乙女に傳へ。」

たわなる柳はなよびを彼に與ふ。

嵐の狂ひの中にすら不言の同情をもて

乙女の姿を造るべき美ぞ潜む。

眞夜中の星屑は彼に貴きもの

又小濠の小走るほとりの樹陰に

彼は耳を倚て、せゝらぎのさゝやきを

聞く間に彼の姿と面とは

徐ろに美しくかたざられゆくなり。」

是は唯だ詩人の空想とのみ思ふべからず。日毎に萬人の實驗する所なれど多くは無意識の間に觀過す。而も事實上吾人の思想感情表情顔面素振等は自然界に於ける微妙なる感化力により刻々に塑像せられゆくなり。這般の消息はプラトニによりて初めて唱導せられたるが故にプラトニツクの思想と呼ばるれど今日に至るまで大思想家一人として此に注目せざるはなかりき。而して最も著しく之を聲明したるものはブラウニングなりとす。

「わが心いとも靜かなる時その時ぞ、

入日の聲を聞き鈴蘭の思を思ふ。」

かの分解的の推理作用は此境に入りて無功を嘆せすばあらず。又二人の戀人の靈と靈とが融けて流れて一となりし時を歌ひて曰く。

「げに森こそかくはなしたれ。

二人森の中にありしとき

森の力の躍動するよと見る間に

二の靈は溶けて一となりぬ。

森こそかくはなしにしたれ、此よきわざを。」

又二人相思の間柄にありしもの好事魔多くして災禍至り易く破鏡の嘆聲徒らに滋くして暗雲天地を蔽ひ昔日の歡樂を失へり。詩人歌ひて曰く

「海は何のためにありや。

物淋しげの會堂どうらぶれの太陽と

十字架と墳墓と燕の呼聲とは何のためにありや。

世には嬉しきものゝ如何なれば一もなきか、
此幽囚の時を横断して悲みの人の子を

永却の界に解き放つべき晴業は世になきが

牢獄の如き大地に天上の俤を映すべき光りもあらざるか。」

而して此くの如きは異常例外の事にあらず却つて日常普通の出来事なり。原始人が初めて曉の曙光を仰ぎ見し以來断間なく反覆せられたる事實なり。如何なる時代如何なる地にありても自然は常に精神生命の進路を導き之を感化しつゝあり。

以上の事實によりて吾人は下の結論を下し得。精神と物質とが共在する處に於ては精神は必ず物質の奉仕を受けつゝあり。複雑にして精巧なる方法裡に其奉仕を受けつゝあり。然るに物質が精神より奉仕を受くるが如き例は全然悉無なり。換言すれば精神は物質より益を受くれども物質は精神より何等の益を受く。故に物質は其複雑なる配合と巧妙なる装置とを合せて凡べて精神を益せむがための目的を以て存在すと考へらる。物質の吾人に對する關係は極めて密切

なるもの吾人は此に依らずんば一時も生息する能はず。されば吾人に與ふる物質の貢獻を以て單に偶然的なりとは考ふる能はず。しか考ふるには精神と物質との相關作用融合状態が餘りに親密に過ぐ、明らかに物質は精神と同一系のものならざるべからず。精神も物質も共に同一系統の要素にして且部分ならざるべからず。故に精神の究竟目的たる終局原因は同時に物質をも支配せざるべからず。

「靈の中より價值が生るゝならば、

凡べてのもの靈のためならぬはなからむ。

美！と靈の呼ぶそのときまでは

凡べてのもの空なり虚なり。

ありてありあるべきものは皆變り

萬物皆意味もなき渾沌なるに

靈により初めて意味あるに至るなり。」

吾人をして以上の眞理を再説せしめよ。吾人が精神に絶對價值と威嚴とを附着

一八
 する所以は正しくそれが目的を有する故なり。目的ある思想と目的ある行爲と目的ある愛情とを有するが故なり。蓋し目的は價値の標準なり、必至の標準なり。目的に價値を歸するは人の精神構造の然らしむる所理性本然の聲に従ふもの外ならず。但し此に目的といふは直接に吾人を益する甲の目的又は乙の目的といふが如きものに非らず。不見の終局を實現するの自由能定力たる目的そのもの謂なり。猶ほ又吾人は單に目的あるものを目的なきものに勝れりとなすのみならず目的を以て存在を解釋するの必然自明なる論鍵となす。即ち吾人が世界を觀察する思想の形式至高の範疇となす。夫れ目的によりて完成せらるゝ系統は其全課程を通じて目的に向ひて進行するものならざるべからず。全課程は目的そのものゝ性質によりて著色せられざるを得ず。此に於てか怪しきまでに精神の益をなしつゝある物質秩序は精神の益をなさむとの目的を以て造られたるものと結論せざるべからず。茲に於てか精神を以て物質秩序の目的なりと斷せざるべからず。

思想家中終局目的なる思想を嫌惡するものあり。ベーコンは終局目的の宇宙に

實在すといふを好まず。かくいふは擬人的の思想に外ならずと曰へり、又スピノザは此を以て、吾人の頭腦が拈出せる虚構に外ならずと曰へり。然りと雖も少しく熱慮すれば彼等の批評も亦一種の目的觀より發生せるものなるを知るべし。彼等は皮相なる目的觀に累せられて終局的因果律の代りに物理的因果律を採用したるものなり。彼等は粗笨妄信の上に立てる臆斷的目的觀に甘んじ僅かに物質の目的の一部を解して以て物質全部に就き完全なる智識を得たりとなせり。此態度は人心に大なる悪果を齎らし物質に關する更深更遠の研究心を碍げかくて物理学に對する興味を殺滅せり。然りと雖もベーコン自身と雖も或場合に於ては「終局原因なる思想も強ち棄て果つべきものにはあらず」といひて以上の態度と矛盾するが如き立言をなせり。此點に關しベーコンの思想は吾人の觀過すべからざるものなれば全文を掲げて引用するの必要ありと信す。曠儒彼の如き者今猶學者の典據とする所なるを思へば愈引照の必要ありと信す。曰く。「眼蓋の毛は視覺を圍繞する生垣なり籬なり。生物の硬き肌と皮膚とは烈寒酷熱の防禦具なり。生物の骨組は軀幹を架する柱なり棟梁なり。樹葉は果實を

疵護するため雲は地を濡すため地の固きは生物の居宅となり休憩處たらむがためなり。此くの如きは他に猶多くの類例を有する事實なり。されど此種の研究は形而上學の問題に屬し物理學に於て蒐集するの必要な材料たり物理學に無關係なる事實なり。………そは終局原因は眞理を傳へざるが故にあらず只物理學の取り扱はざる事實なればなり。終局原因は別に此を研究する適當の分野あり、此を物理原因の領土に混入せしむるときは其結果物理學は茫漠として捕捉し難く又統一の困難を生せん。然りと雖も人若し二者の何れかに留り各他を以て相撞著し相排外し相容れ難きものと思はゞそは極めて大なる誤謬なり。………誠に二者共に眞にして共に他を容れ得べし。一は意匠そのものを説き他は其結果を説くのみ。結果に就きての研究は神の攝理てう思想を排除するものに非ず却りて此を確立し此れが意義を高からしむるものなり。政治上他人を以て自己の意志目的の器となし而も其然るを悟らせざる政治家の偉大なるが如く全能なる神は自己の使用する事物に自己の意義を割與すと雖も而も明らさまに此を知らせずして此を實現せしむ。神は個々の

受造物に個々の攝理を知らしめ以て明らかに自己の意志を傳ふと曰はむよりは受造物に甲の事を意志せしめて而も神の意志なる乙の事を實現せしむと曰はむ方遙かに神の知の大なるを證する所以なり。スピノザの反對説はヘーコンのそれに比して一層徹底的なり。而も彼は不離なる人と宇宙とを故意に全然分離して出發點となす點に於て誤れり。蓋し宇宙と此を解釋する人の精神とを分離し宇宙と人の精神とを對立せしむるならば宇宙は唇氣樓とならむ、思考し得ざるもの不可知なるもの全然無意義なる抽象とならむ。吾人が宇宙を知るや精神を以て知るの外なき以上宇宙も精神の法則に従ふものと考へざるべからず。随つて精神の法則たる終局原因に従ふものと考へざるべからず。故にスピノザが宇宙を以て人心の拈出せる架空の幻影となす説は哲學上不可立の説なり。而も此説は前二世紀の間の思潮を支配せりき。蓋し科學時代の餘毒を受けて物質を莊大視し人類を無價値視せし彼の説は時好に適應するものなりしなり。されど今日吾人は聲を大にして物質の大を知りて精神の偉なるを無視する此説の非を鳴らさざるべからず。吾人にして物質と精神との

三三
關係に就き正當なる見界を得むと欲せば地球上の事實に留まらざるべからず。何となれば地球上に於てこそ精神の存在を知り得と雖も星界に於て精神の在りやなしやは吾人の檢證し得べき限りにあらざればなり。元より比論に従へば星界にも精神的存在者あらむとの結論を得べし。而も星界の精神的存在者は如何なる性質なりや如何に多きか等に就き吾人は何事をも知らず。隨て何等の結論を築くことも能はざるなり。

今吾人の思想を地球上のことに限らば、地球は人類に比して遙かに偉大なるもの人類種族が全然消滅する后まで永續するものと思ふ者あらむ。されど價値は外延によりて決定すべきものに非らず實に内包を以て其標準度量とせざるべからず。内包より見れば一個人は物質的宇宙全部よりも勝れり。故に地上幾千萬人の内包上の價値を總括すればそが物質に勝ること果して幾何ぞ。既に逝きたる吾人の祖先將さに來らむとする吾人の子孫此れ等一切の内包上の價値を悉く算加しなば外延のみ大なる物質的宇宙の價値の如きは殆んど零細に均しき觀あり。加之精神にして吾人の信するが如く不滅なるものならば其價値の和は更ら

に更らに驚くべきものに非ずや。假りに地球に永續性ありとするも必滅の物質界の永續なる以上精神の永續に比して劣ること果して幾何ぞ、そは只だ幻影のみ、泡沫のみ。今吾人は再び元に歸りて物質は精神のために存すとの原則に就きて述べむか。誠に如是の思想は普通一般の人心に暗々裡に鏤刻せられあるものなるに、吾人が特にかく聲明する所以はそが形上學の根底を有する常識なり確信なるを證せむがためなりき。懷疑的人又は形而上學を好まざる人に對しては此信念が強き蓋然性を有するものなるを曰はゞ足りなむ。而して物質は精神のために存在すといへるは極めて概括的に曰へるのみ。吾人は個々の物質現象凡べに就き其精神的意義を知り得べしと曰はず。又物質現象は凡べて吾人類のためなりとも曰はず。只だ吾人の經驗し知り得る範圍に於ては物質と精神との關係に不變なる順序あり此順序の逆は吾人の經驗せざる所と曰ふのみ。人は物質を使用して自己の精神に有益なるを檢證すと雖も人の精神は物質を造りしものにあらず。又其全課程を悉く支配するの力なし。故に物質は完全なる意志と能力とを具備する靈的存在者によりて支配指導せらるゝものと斷せざる

べからず。

以上は讀者の認むるが如く終局觀又は意匠觀に立つの議論にはあらず。蓋し終局觀的論法は物質界の應化作用を逐次的に列擧するにあり。而して應化作用より論證する立場は近來失敗史の廢墟なりと様に目せらる。此攻撃の無根據なるは既に識者の認定する所なりと雖も吾人は今此れに論及せずして吾人は只だ物質界全體の秩序を論じ無限複雜の裡に一貫する原理あるを説けり。換言すれば物質的秩序は此れと別異にして而も一段高級なる秩序に隸屬すれど其逆は眞ならず。高級の秩序は毫も下級の秩序に隸屬することなし。以上此二點より綜合して宇宙に意匠と計畫の存するを説くは極めて條理あることなり。故に吾人の論法の根帯は全然物質の精神に隸屬する範圍と變化とに歸著し得べく就して高等終局論と曰ふべき性質のものなり。而して此論法は一方に於て物質秩序そのもの、中に意匠ありとの蓋然性を極りなく高むると同時に他方に於ては物質的方面よりの反論によりて毫も動搖を感せず。只だ此論を破する唯一の根據は人の精神作用の價值を疑ふにあり。然るに精神作用の價值を疑ふは全然思索を放

棄することなり。加之人文史の曙光以來人は「如何にして」と尋ねること共に「何故ぞや」と尋ねるを常とせり。「如何にして」我及び世界は存在するに至りしかを問ふと同時に「何故に」我は存在するか「何故に」宇宙は存在するかと問ひ來りぬ。此「何故に」との疑問に満足なる知的解釋を與へられざるときは吾人は直下常識に立ち歸ることを常とせり。而して解釋を得ると得ざるとに拘らず常に終局原因を信せざりしことはあらざりき。或人は曰ふコペルニカスの宇宙觀は思想上の革命を傳へて唯物的思想を鼓吹せりと。されど論者の言は餘りに誇大の辭を弄する者なり。彼の宇宙觀は決して革命を來さざりき。精神上の價值を以て評價の標準となすものにおいて地動説が現はるゝも天動説が行はるゝも全く痛痒を感せざるなり。誠にコペルニカスが空間に於ける發見は元より偉なりと雖も近代科學の時間に於ける發見は更らに驚くべきものあり。人類の精神發達史の如きは彼の居宅たる物質界の進化及此れがために要せし時間に比すればものゝ數にもあらず。然りと雖も畢竟精神は物質よりも偉大なり。精神は思索愛好行動するものなるに物質は只だ空間に運動するものに外ならず。精神の

二六
 價値は物質のそれに比し依然として限りなく大なり。物質の究竟性がよし如何なるものにもせよ此眞理は依然として動かす。蓋し物質の性質を知るは精神によるの外に道なきが故に物質は精神の原則に従はざるべからざるが故なり。茲に於てか吾人の立論は最も誇大なる近代の物質觀を採用するも若くは又最も實證的なる物質觀を取るも毫も異なる所なきなり。

第二章 物質界の宗教的感化力

前章に説ける如く物質の精神を益する道は渺きにあらずと雖も其最も著しきは宗教上に及ぼす感化なるべし。自然の外觀若くは外觀よりの推理は宗教的の思想を覺醒し且つ助長する上に多大の力ありしなりき。

太陽神話星辰神話颶風神話山川樹木等の神話が初代宗教の根元たりしは何人も知る所ならむ。其後反省作用の發達につれて此等の神話は批評の燈火に照らされ批評の篩に懸けられて醇化し來れりとは曰へ猶自然界の美調和莊嚴巧妙なる機械組織生命の不思議力精巧なる應化作用中に神の存在と特性を發見するを止めざりき。這般の論法は古來攻撃の鵠となれること屢なりしも何れの時代に於

ても重きを置かるゝ思想なりしこの事實に至りては遂に蔽ふべからず。近代思想の進歩を以てするも其根底は微塵の變動を受けず。顧みれば近代人が神話時代を脱却せるや既に久し。又一方に於ては吾人は薄弱なる論理學に安住するを欲せず。而も自然界に宗教的感化力ありとなす一事に至りては古來其軌を一にす。否な或過去の時期に比して近代の方遙かに強く此を認むるが如き觀あり、蓋し當の感化力は知的といはむよりは寧ろ情的のものにして何等かの方法により神と接近交通すとの觀念より成るもの、此觀念は知的分解を容さず、又理論の形式に翻譯するを得ずと雖も其背景には實驗上の事實なりとの證明を伴ふ。此證明は意想外の價値あり、又意想外の勢力あり。此れが正當なる評價をなさむと欲せば先づそが如何に廣き範圍に延長しあるかを想見せざるべからず。古代の文書諸種の時代諸種の文明諸種の信條に徴して物質的自然の外觀及び其課程の與ふる感化力が如何に宗教上の主要要素なるかを察せざるべからず。下に吾人の例證として引用する所は汗牛充棟の中より選出せる五六の例に過ぎざるが故に一大樓閣の模型なりと曰ひて一塊の煉瓦を示すが如き觀なきを得ず。

最初に埃及古學者の示せる世界最古の詩を掲げむ。「死者の巻」十五章に日出日没を詠へる讚美あり。

二八

「自ら存す神なる「ラ」に幸あれ。

榮光あるかな爾地平線に昇るとき。

天地共に爾の光明に輝き

萬の神も天の王なる爾を仰ぎて喜び……………

萬民は爾のくすしき進軍を望みて喜ぶ。

爾の光耀は比儔なく。

アラビヤの美しき色を悉く藏めたり。

國と都と殿とに祝福を與へ

香しき滋味と食物とを齎らす

爾よ爾に永久に幸あれ。

幸あれ主なる神「ラ」らよ。

爾は裝を新にし冕を載き

全能の威稜を輝かして家路に急ぐ。」

猶後代の讚美歌にも同様の思想あるを見る。此に後代と曰ふもモーセの時代以後にはあらず。曰く。

「アメンラに榮光あれ。

凡べての活物凡べての美しき家畜に

生命を與ふる

善き愛すべき神に榮光あれ……………。

人を造り獸を造りし主、果實滋き樹木の造り主

綠草を造り家畜を育むものよ……………。

地上天上の萬物を造り

地を照らし

静寂の裡に天驅けるものよ……………。

爾の旨に従ひてナイルは溢るゝなり。

いとも愛すべき慈仁の主よ、

爾來るとき人は活かされ

萬物の眼は開かる。
爾蒼穹より現れ給ふとき
光明と觀樂と地に遍し……………。
爾の愛は地に充盈つ……………。
家畜のために嫩草を、
人のために果實滋き樹を造り、
魚を産みて河中に住はせ、
鳥を産みて空にさわならしめ、
卵の中に伊息を吹き入れ、
飛びかける鳥、梢に棲む鳥、
匍匐ふ者、翔る者を
等しく育みて餌を與へ、
窟に栖む鼠に糧を與へ
樹に飛ぶ萬物を養ふ神よ、
是等すべてのものゝ故に主を讃めまつる。

萬物よ聲を合せて爾に仕へ
凡べての活物よ諸共に爾をたゞへ
萬國の民よ主の前に頭を垂れよ。
天の高きより地の廣き海洋の深きに至るまで
神々も聲を合せ
歡喜をもて爾の脚下にひれ伏し
爾の造れる諸の靈も
諸共に爾の稜威仰ぎて
爾を讃め爾をたゞへよ。
爾は萬神の父の父
天を高きに扛げ地を固く据ゑ給へるものなり。」
次に吾人は埃及を去りて印度に至り彼處の思想に此を徵せむと欲す。埃及と印度とは人種を異にし隔離せる地點に位すと雖も猶埃及のそれと同一調を帯ぶる思想を發見し得べし。而も印度歐羅巴民族が最古の文學として誇るヴェダの中

に此を發見し得べし。由來印度神學は多くは汎神教にてありき時として萬有神教に移りしことありしと雖も此を一貫する思想は自然の外觀に顯れたる能力美慈愛等を以て宗教の根帶となすことにありき。ヴェダに曰く。

「天よ地よ、われ等の聲を聞け、

水よ、諸の星を率ゐる日よ、濶き蒼穹よ、

ミトラよ、アヂチよ、ヴァルナよ、海よ、

地よ、天よ、われ等に歡喜を與へよ。

ミトラ及び財豊かなるヴァルナの母アヂチよ、

われ等の禍害防ぎわれ等を禦れ。

アヂチは空なり。アヂチは氣なり。……

アヂチは神々を統べ治むる神なり。」

「雷神インドラの力は天と空と地の凡ての力に勝る。

インドラは空に諸の光を蒔きて之を固く据ゑたり。

固く据ゑたるものを彼は動かすことなし。

彼は太初に其力を揮ひて山を置き、

水の動きを低きに向はせ、

凡べてを育ぐむ地に支柱を置き、

妙なる技術を以て空の隕つるを防げり。

大空の娘なるウシヤスよ、

東天と共に降りてわれ等に繁榮を與へよ、

恩惠のさわなる赫奕の女神ウシヤスよ、

爾出御し給はし

敏脚の活物眼を醒し諸島は空に向ひて飛びゆかむ。

糧を齎らすものよ、爾東天を呼び醒さば飛ぶ鳥は再び愁はず。

活ける女神よ、凡べての活物の生命と伊息とは曉の光と共に汝より流れ出づ

るなり。

あはれウシヤスよ爾は舞子の如く華やげる装を纏ひて、母の被飾らせたる美しき乙女の如く……又沐浴より立ち上がる水ざわ立てる美女の如し。

三十四
ウシヤス朝の光を放てば萬物の魂已れに歸り。美しき其姿を望みながら萬の活物眼を睜まして心を爽かにす。

萬の神の母、アチチの化身、祭物を促す者、力あるウシヤスよ、照り映へよ。願くは起ち上り、われ等の祈禱に笑顔を向けよ。

ミトラ、グアルナ、アチチ、海、地、空よ、朝曦の光りと共に卓勝れて好ましきものを祭物と讃美を捧ぐるものに與へよ。

オ、スウリヤよ、爾は光を造りて蒼穹を隈なく照らす。……………

オ、スウリヤよ。爾は潤き蒼天に光りを流して萬物の面を輝かせ、この日かの日を敷へしむ。

黄金の髪を載ける朗ら眼の神よ、

七頭の牡馬は駟輪車に爾を載せて駛る。」

「颯風の神マルツよ電光の尾を曳き駟車に跨りて疾く來れ。

爾の紅の牡馬を速かに車に撃ぎ栗毛の牝馬を車に撃げ……………

われ今爾の萬軍を招がむと欲す、駟車に駕し堂々として恐るべく仰ぐべき爾

の萬軍を招がむと欲す、

恐るべき神よ、爾を恐るゝが故に森はひれ伏し地は震ひ、山も雲も戦く……………

水を擔へる爾の僕をも共に今日伴ひ來れ、

雨を喚び起すマルツよ萬軍を率ひて來れ、

爾が現るゝとき水は迸り森は崩れむ。」

「今われはヴァータの駟車の偉なるさまを歌はむ、

萬物を碎きながら走りゆくときの轟聲は

段雷の聲の如し、

その進むときは天空を摩し赤き布を曳き

或は地の塵を跳らし、

その天路を馳せゆくや一日も憩ふことなし、

あゝ萬水の友にして壘き長子たるヴァータは何處に生れ何處より來りしや、

あゝ神々の伊息世界の芽、行かむと欲する所にゆきわれ等其聲を聞けど其姿を見得ざるヴァータは偉いなるかな、

われ等ヴァーダに祭物を供へむ。」

轉じてアヴェスタの宗教に就きて考察するに一層倫理的の根調を加へ又創造主と受造物との區別一層明瞭に現れたりと雖も而も以上の思想に酷似せる點あるは争ふべからず。

否な却つて受造物中に創造主の俤を讀破する傾向の著しく發達せるを見る。曰く。

「われは讚美を謠ひながら尊く聖く永遠に在す二神に近づかむことを切望す。

われは讚美を謠ひながら星月及び日……………に近づかむことを切望す、

われは讚美を謠ひながら榮光溢るゝが如き嚴聖なる諸の山に近づかむと切望す。」

「わが祭物を捧ぐる神はアフラ、ミトラの聖き二神、スペンタマイニウの造れる星、光りの裡に家畜の精を宿せる月、脚速の馬に駕して走る赫奕の日、町々、郷々、泉ある邸、水、陸、草、樹、この地、かの天、聖き風、自ら行く道を定め自ら無始の軌道を作れる星、及びスペンタマイニウの造れる聖き活

物と……………なり。」

「われ等オアフラマツダの子なる火をたゝへむ。われ等マツダの造れる聖く且つ好き水をたゝへむ。マツダの造れる聖き凡べての水をたゝへむ。マツダの造れる聖き凡べての草と木をたゝへむ。

われ等かくアフラマツダの造れる牝牛と……………水と無毒なる草木と星と地と凡べての善きものとをたゝふ。誠にわれ等はマツダの主宰力と偉大と慈仁とをたゝふ。われ等はアフラマツダとその妻の産める此地をたゝふ。われ等は雨となりて降る水と泉及び桶の中に湛へらるゝ水をたたふ。水はアフラより産れたる女性のアフラにして好き淺瀬を作り淺瀬はさわやかに流れ沐浴するによし。

われ等水の源、河の淀、大路の衢、小路の辻に祭物を捧げむ。

われ等洪水の中に漂へる小山と水の漲れる湖と美田を蔽へる穀物とに祭物を捧げむ、われ等保護者にして創造主、ザラトウストラにして主なる神に祭物を捧げむ。

われ等地と天とマツダの造れる颶風と高さハラチの嶺と陸と凡べての好き物に祭物を捧げむ。」

波斯を棄て、パルスタインに向は、吾人は純乎無雜なる宗教的氣層中に没入す。而も後代に顯れしが如き旗色鮮明なる唯一神教と高尚なる道念を思へば太古に顯れし敬虔文學中自然的要素のしかく顯著なりしは益驚くべき事實なるを知る。

「諸の天は神の榮光をあらはし穹蒼は其手のわざをしめす。」

「主はもろくの星の數をがぞへ凡てこれに名を與へたまふ。」

「主は海の水をあつめて堆くし深き淵を庫に收めたまふ。」

神は大能ををびその權力によりて諸の山を堅く立しめ給ふ。」

主は地のはてより霧をのぼらせ雨のために電光をつくりその庫より風をいだしたまふ。」

主の聖聲は水のうへにあり榮光の神雷をといろかせ主大水の上に轟かせたまふ。

主の聖聲はちからあり主の聖聲は威稜あり。」

斯て主はケルズに乗りてとび風のつばさにてかけり給へり。」

主は間をおほひとなし水のくらさとその密雲を其まはりの幕となし給へり。」

主は雪を羊の毛のごとくふらせ霜を灰のごとくに蒔たまふ

主は氷を土塊のごとくに擲ちたまふ。たれかその寒冷に堪ふることを得むや。

主みことばを下して此を融かし
 その風を吹かしめ給へばもろくの水はながる。」
 日よ月よ主をほめたへよ
 ひかりの星よみな主を頌めたへよ。
 もろくの天よ主をほめたへよ
 天の上なる水よ主をほめたへよ……………
 火よ霞よ雪よ霧よ
 聖言にしたがふ狂風よ
 もろくの山もろくの丘よ
 實を結ぶ樹すべての香柏よ、
 獣ともろくの牲畜よ
 はふものと翼ある鳥よ……
 「なんち光を衣のごとくにまとひ
 天を幕のごとくに張りたまふ。」

「なんちの大道は海のなかにあり
 汝の徑は大水の中にあり汝の蹤跡はたづねがたかりき。」
 「なんち朝夕のいづるを喜びうたはしめ給ふ」
 轉じて希臘羅馬の文學を見るに汎神論及び萬有神教の臭味を著しく帯ぶると雖
 も自然の威化力を謠歌するの點は何れに於ても異なる所なし、エスキュラス曰く。
 「ヂウスは空なり、ヂウスは地なり、天なり、
 又萬物なり、萬物の上にあるものなり。」
 ザアデル曰く
 「蜂の本能より推し倒りて人は神の心を分有し天の伊息を胸に宿すと自ら信せ
 り。」
 「蓋し神は遍き地と潤き海とに滲透せざる所なければなり。」
 又曰く
 「一の靈地と天と海と輝く月と巨なる星とに内在し、其肢體に充盈ら其偉いな
 る軀幹を動かす。」

ルカン曰く

四二

「汝が見る物の凡べて汝が行く處の何れの場處もすべてデョーグならざるはなし」

以上は萬有神教の根調を帯ぶるものにして其類例を列擧すれば枚擧に違あらし。然りと雖も一層汎神的色彩あるものに至りては更らに其例の夥しきがため吾人は何れを選ぶべきかに苦ますんばあるべからず。故に此には只だ一例を掲げて足れりとすべし。そは有名なるプロメシウスのプロメシウスの稱呼なり。

「聖き天よ、翼ある諸の風よ、

水の源よ、海波の限りなき笑聲よ

萬物の母なる地よ、一切を見る太陽の眼よ

われ汝を喚びて證人とせむ。」

文華虚飾を事とする時代ならば此等の語は詩的空想なり無意義なりと思はれもやせむ。されど古代の希臘人にありては真理の發表として此文を成せること斯々乎として疑ふべからず。或人曰く。古代の異教徒間にありては道義哲學者は

やがて宗教の教師なりしなりと、誠に然り。

希臘哲學の如き茫々無際限なる大問題を捉へて一般的概論をなすは元より容易のことにあらず。されど第二流の一派を除き諸派の一切の思想一切の發達上に共通なる點は自然の裡に理性を認識することにある。といふ程の立言をなすは決して極言にあらざるなり。初代の思想家の語に「神は萬物に充盈てり」「精神が之を整理するに至る迄一切の事物は渾沌の状態にありき」「思想と存在とは元來一なり」などあるは何れも意味深長ならざるはなし。ソクラテス、プラトリア、ストアテレス等が合理的因果律を固執しストア派新プラトリア派等が物質界の活畫其秩序其美其調和を感じて或は上より或は内より來る神の指導なりとなせるが如きは大に注目すべきことなり。プラトリアは世界殊に世界の美を以て世界以上の實在たる神の觀念の顯現なりと思へり。アリストテレスも物質界を以て神の觀念の顯現と感じたり。但だ彼は神の觀念は物質によりて具體化せらるゝにあらずば純抽象となりて不完全となるを免れずと思ひぬ。前者は新プラトリア派に至りて超越神の教義を形成し。後者はストア派に至りて内住神の教義を作れり。

而して二者に共通なる點は物質に宗教的意義ありとの思想なり。シセロー曰く「自然を冥想するはやがて精神の糧たり。人の精神が高踏飛翔して人事以上に超絶し自己を眼下に瞰下し得るに至るは只だ只だ高天の壯大を思ふによるのみ」と。

セチカ曰く「神と神の理性が世界及び世界の肢體に内住するものこれ即ち自然なり。此外に自然なし。」又曰く。「何をか神といふ。吾人が見得る一切、吾人が見得ざる一切の總和に非ずや。」
 基督教は三位一體の教義と受肉神の教義とを相關不離のものとなすが故に超越神と内住神とを一樣に聲明す。此を學術語を籍りて言へば神の主宰權と神の遍滿性を駢行して説くものなり、故に新プラトニ派とストア派とを合せ採りて活用したるものなり。而も自然を一層靈妙に翫味する點に至りては基督教獨特の産なり。オリヂンは系統神學の嚆矢をなせるものなるが彼の出發點は宇宙の聖き經濟高き聖き美しき姿の研究にありきと稱せらる。近代の讀書界は動もすれば諸代の師父を以て圖書館の塵埃中に遺却せられたる廢物なりと様に思惟す

れど諸師父等が如何に自然の光景靈樂を翫味することの深かりしを思はゞ決して輕々に觀過すべきものにあらざるを知らむ。

聖シリル曰く。「受造物に對する冥想深ければ深き丈け吾人の神觀も亦莊大の度を加へむ。」

聖パシル曰く。「地、天、空、水、日、夜等は凡べて吾人に慈仁深き神の何者なるかを教ふ」「宇宙の基礎となり支柱となる法則を洞察すること深ければ深き程神の榮光を知るの度も亦益高くならむ。」

又曰く。「明夜蒼天を仰ぐとき綺羅を布き連ねたるが如き星屑を造れる創造主を思へ。輝きの花を天に撒き散らしたるは誰ぞ。其美によりて萬物に大なる益を與ふる者は誰ぞ。又白日皇天の下見ゆる物を見て見えざる物の不思議に思を潜めよ。さらば基督教の眞理を聞くの準備をなし得べし。」

ニツサのグレゴリーはオリヂンの同胞にして協力者なり。彼れも亦オリヂンと酷似せる思想を抱くものなりき。彼曰く。

「穀物の穂と草木の芽と熟したる葡萄の房と初秋の果實と美しき花を見よ。又

かの山を見よ。其麓に人の手の植るざりし緑草の茂れるを見よ。其嶺は天に摩して碧空を劈くに非ずや。又かの泉を見よ。孕める腹の形したる坂路を下り、溪の間を潜りて河に注ぎ、遂に萬水を容れて縁を踏さるる大海に没入す。海は廣く深く浪濤は山を成せども岸邊に遮ぎられて其水は溢るることなし。此を看るもの誰れか理性の眼を開きて不変不動の眞理を認めざるものあらむや」
 蓋し物質には自ら婉麗の美備はり。全部を通じて美の反響を認め得。吾人は此美の源を尋ね溯りて其源頭に逢著せざるを得ず。
 而して此思想は希臘師父等の獨尊にはあらず。
 オーガスチンも曰く。

「自然の諸相諸課程は諸種の様式を以て創造主を表彰すること恰も舌を以て言説するものに異らず。」

聖ヒラリー曰く。

「誰れか自然を眺めて神を見ざるものあらむや」
 又大グレゴリー曰く。

「思を潜めて外界の物象を熟視する者誰れか内部の靈的存在者を認めざらむや。眼に映する受造物の驚異すべき點はすべて創造主の足跡にあらざるはなし。吾人は創造主そのものを知り得ず。然れども受造物を讚美するは創造主の聖顔を拜せむとして進む路の途上にあるものなり。蓋し受造物は主の御手に印せられたるものなるが故に結局吾人を主に導かずば止まざるものなり。」
 此種の文字は師父の書の何れよりも集め得べし。加之、煩瑣學派の嚴格なる用語に於てすら猶此思想の反映を認め得べし。否な、天啓默示を録す所の謹嚴なる書物中に於てすら處々に此思想の閃めきを見る。庵僧が修道院の地位を選定し隠者が祈禱の聖地を卜する記事聖き人と動物との優なる交り及び同情等を描出する文字には此種の思想を無數に認め得べし。ケルチツクの諸聖徒にありては殊に自然を主題とする詩多し。その最も美しきはアシスの聖フランシスがもつせる讚美なるべし。

「讚むべきかな、わが主なる神、すべて造られしもの殊にわれ等の兄弟なる太陽はわれ等に日を照らし光りをそゞぐ。其大なる赫奕の映はいと麗はし。オー、

主よ。彼は汝を表彰すものなり。
 讀むべきかな。わが主。主の造りたまへるわれ等の姉妹、月と星とは天にありて明かに且つ美はし。
 讀むべきかな。わが主。われ等の兄弟、風と空と雲と静穩と曇晴とはすべての活物の生命を維ぐ。
 讀むべきかな。わが主。われ等の姉妹、水はわれ等に仕へ控目にして貴く且つ潔し。讀むべきかな。わが主。われ等の兄弟火は闇の中に光明を興へ。樂しげに照りはえて強く且つ壯なり。
 讀むべきかな。わが主。われ等の母なる地はわれ等を支へわれ等を保ち種々の果實と色よき草と花とを興ふ。
 轉じて文藝復興期及び宗教改革の時代に移れば無數の學者此種 of 思想を發表したるが故に吾人は其中の何れを選ぶべきかに苦む。當時哲學者詩人説教家美術家等凡べての部門に於て人は自然に歸らむと努めぬ。此際或人は唯物説に陥りたるものありしと雖も多くは物質の裡に心靈を認め得たり。例せば伊太利の自然

哲學者の如き多くはペーコンの研究法に満足せず。更らに深遠徹底的なる研究を開始して自然科学火の革命を起しぬ。ギオルダノーブルノーの詩的萬有神教は人のよく知る所ならむ。而して此と類似せる思想を有神論的に發表せるものは同時代の學者カムパチラなり。
 カムパチラは磁力の發見に觸發せられて自ら植物に雌雄あるを唱導するに至りぬ。曰く。

「萬物皆感情を有す。然らずば世界は渾沌たるべし。物質は反對を排け類似を結合して自家の永續を保ち得と知る。然らずんば火は上に向ふことなく石は地を慕ふことなく水は海に走ることなからむ。それ神は最初能力最初知慧最初愛にして萬物に存在性と知慧と愛を興へ攝理を以て一切を支配し萬物をして存在せしめむと欲する限り之を存在せしめ給ふ。神宣はく萬物はわが本性に模倣するの必然性を有するが故に多少に拘らず感情を有せしめよ。彼等をして其生息する處に生くることを愛せしめよ。然らずんばわが創造は無に歸せむと。かくて空も星もいと鋭き感愛性を享けたり。彼等は相思の情を光の交通によりて傳

達し。其感情は歡樂に充ち溢てり。」と。
 或人は之を以て架空の詩に過ぎずとなさむ。されどその詩人の思想に似たるも同時に哲學者の思想に酷似するは争ふべからず。
 次に掲ぐべきものはペトラークよりの引例なり。
 ペトラークは近代叙景文の開祖にして其文は自然を愛するの情に充てり。彼れ自然の靈的感化力を論じて曰く。「洞底岩下の細地點は何物にも勝りて高遠の思想を鼓吹し鈍き心をも高擧して玄妙の思に耽らしむ。あゝ顧みればわれは幾度眞夜中に外野を彷徨ひたる。夏の夜無言の中に床を離れ月光を浴びつゝ野と山とを彷徨ひ幾度かキリストに祈禱を捧げたる。」
 單に文學者のみならず猶又偉大なる畫家の作物には之と同様の精神を發見し得。彼等は打ち笑める牧場嵐に裂かれたる巖石等を繪き精巧なる背景を置き以て靈的の意義を其裡に聯想せしむ。これ蓋し近代山水畫の濫觴なりとす。
 神學は他の點に於ては文藝復興期の時代精神と背馳すること多しと雖も獨り自然に對する態度は全く美術文學と其軌を一にす。下に獨り乙の神秘論者スウツ

ウの一節を掲げむか。

「夏の朝太陽は如何に晴れやかに心地よくうるはしく東天するぞ、如何に下なる地を祝福するぞ、見よ、如何に嬉しげに葉と草とは芽を出すか、如何に美しき花は莞爾み、森とヒースと牧場とナンチンゲールと他の小鳥とは如何に樂しく歌ひさめくか、冬の間封ぢ込めてのみありし獸等は如何に嬉しげに現れ出で耦をなして歩むか。老いたるも若きも如何にはれやかに歡樂の語を交はすか。あはれ慈仁の神よ。爾の愛造物がかくも麗しからば爾自らは如何に麗しく且愛に富めるか。かの地水火風の四元素を見ずや。四元素の中に栖める萬物を見ずや。人獸鳥魚の様を見ずや。海底の不可思議を想はずや。一切は神の無量無限を讚美し神を拜み神を呼び神を明かに告白す。あゝ主よ、此を護るものは誰ぞ此を育くむものは誰ぞ。大なるも小なるも富めるも貧しきも各其則に従ひて此を護り給ふ者は主なり。主なる神よ。主こそかくなせ。主よ。主こそ誠に神なれ」ルーターも亦宗教的に自然を愛せしは有名なることなり。されどフウイングリーに至りて此情の更らに切なるを見る。彼曰く。

「萬物の存在を得たるは噴水より泉の迸るが如く、又原形（此語を用ひるを許せ）より物の産るゝが如し。萬物の存在し生存し活動するには神によれり。神は何處にも在して萬物は其中にあり。神は宇宙の本質存在の生命にして萬物は其雛形なり。人のみ神より出しにあらず。愛造物一切は神より出でたり。或者は勝れて氣高く威嚴ありと雖も一切は神より出で神の中に在るが故に多少に拘らず其度に従ひて神の能力と榮光とを表さざるはなし。……無生物の中にも人に於けるが如く其生存し存在し活動する所以の神力を認め得べし。神は星の中にあり。星は神より出で神の中に在る外には自己の本質も能力も活動もあらず。一切は神のものなり。一切は神の能力の働く器に過ぎず。而して神が萬物を存在せしめたる所以は人周圍の外物を眺め愛造物相互の利益を考ふる時何物の中にも殊に自己の中に神の活力の現在を認めさせむがためなり。」

舊教新教は他の點に於て根本的に相異なる處ありと雖も自然を見る立場に至りては相一致す。次に擧ぐるフエネロンの一節は十七世紀に於ける舊教思想家の代表となすを得べし。そはツウイングリーの思想に酷似す。誠に上掲の引照の後

半かと疑はるゝ程なり。曰く。

「余は萬物中に神を見る。又は神の中に萬物を見る……萬物の存在するは神の無窮存在を配つが故なり。智ある者の知を有するは神の無上理性を分有するが故なり。活動するものゝ活動力は神の無上活動の衝動より此を分有するが故なり。萬物の中にありて萬事をなすものは神なり。各瞬時に於ける心臓の鼓動四肢の運動眼光の閃火精神の動き靈の靈は神なり。人の中に在る生命も活動も思想も意志も神の永遠の能力生命思想意志より出でざるものなし。」

吾人は更らに十八世紀の一英人の語を掲げむと欲す。十八世紀の思想は以上の精神と氷炭相容れず。只だウィリアム、ロウあり晩年ヤコブ、ペーメの感化を受け吾人の思想史を維ぐ一連鎖となりぬ。彼の著述中には次の節に類するもの尠からず。

「自然の高さ深さ及び其活動力を通觀せよ。自然の目的は次の思想を暗示するにあり。曰く窺ひ知り難き神の隠れたる實見えざる能力潜伏せる祝福榮光愛等が自然に據り自然の中に於て可見可感的となり顯明せられんがためなり。」

「受造物の變態を悉く通觀せよ。かくも變態のある所以は次の一目的を達せがためのみ。曰く。變化程度能量の無限なる受造物は自然の能力と富とを表彰するの比喩なり、形式なり、愛の神に榮光讚美感謝を捧ぐる音聲なり、音響なり、説教師なり、喇叭なり。蓋し神は一切自然受造物に生命を與ふる者なればなり。而して墮落以前の受造物一切は神の愛と幸福と善とを分有し自然の無量の高さど深さの中に溢るゝ喜びを湛へ神の性質を闡明し表彰するを以て目的とせりき。」

神學を棄て、再び文學に向へばルソー及びゲーテは漠然たりと雖も自然の宗教的感化力を認めたるものなり。されど目下の目的上引用すべき好個の例はバロン及びシエレーなるべし。誠に自然の力によらずんば彼等は無宗教の人となりしやも測られず。彼等は自然の宗教的感化力を最も單純に告白しそが吾人の心を影響するがまゝに委ね何等の宗教教義の光明を籍りて此れを解釋せむとは助めざりき。否彼等が既成宗教に對する反情は遂に彼等をして反對の方面を偏重するに至らしめぬ。而も自然の景物が與ふる靈的の感化力は彼等の詞藻を

して神祕的情緒を満載せしめたりき。
例せばシエレーがアラスタアの巻頭を見よ。

「地、海、空、わが愛する兄弟よ。

若しわれ等の大なる母われ等の靈に

僅かにても汝等を愛する自らなる敬虔魂を興へ

汝等の贈物に報いるにわれ等の贈物を以てするを得なば。

もし露滋き朝、香はしき午と夕と

夕陽と彩れる其光と

嚴かなる真夜中の有聲の暗黙と

若し秋の禿げ山の虚なる吐息と

深き雪と星の如き氷の冠とをもて

縁草と裸の木枝とを装ふかの冬と

若し春の淫りがわしき喘ぎと

最初の接吻と、さなりもし

此等のものをわれ愛し得なば。
若し樂しげの鳥と爬蟲と柔しき獸と
此等の兄弟をわれ常に愛し
知りながら彼等を傷めたることなかりしならば
さらば赦せ、兄弟よ、わが誇りを赦せ。
而してなが贈物いつもながらの贈物を
拒む勿れ。
測り知れぬ大なる此世の母よ、
嚴かなるわが歌を受けよ、
われは常に汝を愛し汝のみを愛せり。」
更らに又パイロンのチャイルドハロルドを見よ。
「巖の頭に座して水と澤とに思を潜め
又は人の伊息に汚れざる
足跡絶えし森の樹陰を靜かに歩み

人も訪はずわれも見しことなき山を攀ぢ
柵の臭を知らぬ野の羊と共に
われ獨り壘を攀ぢ登り
泡沫散る瀑布を越えて憩は
其時ぞわれは孤獨にあらず
自然の能力と語らひ
開きたることもなき自然の寶庫を
われぞ初めてかいまみ得べき。」
「その時よ無限の感は湧き出づれ
われ只だ獨り獨り寂寞の中にあるとき
眞の我は小なる我より淨められ
溶けて流れて顯はれ來り
靈樂の妙音の如き神韻躍動し
われは初めて永劫の調和を知らむ」

「われ人を愛するの少きにはあらず
只だ自然を愛するの大なるなり。
昔今此後ありてありあり得べき我れより
潜かに免れ出で、
宇宙と交らひ語らふときの思を
われは言ひ得ず、われは包み得ず。」
されど引照は既に讀者の倦厭を買ひたるならむ。されば余はウーヅウースの詩
より一節を掲げて此に一先づ局を結ばむと欲す。こは有名なるチンターン中の
一節にして此種の文學中古典と稱し得べきものなり。
「われは一物の顯在に資縁はられ
わが思は高く擧げられて歡樂に盈ちぬ。
一物とは崇高の靈にして
深く深く萬象の裡に編み込まれ
夕陽の光、圓き海洋の波濤、

生ける伊息、碧き空、人の心とを
邸宅とする一の力一の靈。
そは思ある者、思の目途たる者を
後へより押し動かし
萬物の中を潜りて
轉輾しゆくなり。さればこそわれは
牧場と森と山と芝生と
此緑りの野に立ちて見渡すすべての物を戀するなれ、
眼と耳とに入り来る大なる世界を戀するなれ。
此世界の半ばは耳と目に造られ
半ばは外より入り込めばわが最純なる思の錨
わが心靈の保護者、指導者、乳母、
わが道念の港をば
自然と感覺の世に

われは認め得るなり。」

終に注意すべきことは以上の引照が歴史の全部より抜き来れること、個人的實驗の發表なることとなり。實に此思想は太古より今日に至るまで詩篇作家詩人或派の哲學者等に共通なりし思想にして人文史を一貫し有ゆる人の最奥感情を動かせるものなりき。故に音響と風景との物質界たる自然が萬世を通じて萬人の思想感情に宗教的感化を與ふるものなるを知るべし。元よりルクレシヤスの如く唯物論者として此れが除外例たりしものなきにはあらざりき。然れども彼等は自發的の聲を聞くの耳なく徒らに反省と批評とを事とせるものなりき。加之習慣的の一般思想に反對なるパラドックス式の除外例あるは却りて定則の眞理を強むるものと曰ふべし。次に注目すべきことは此宗教的感化力が特定の神學と無關係なることなり。そは一神教の專有物にもあらず汎神教の獨占にもあらず萬有神教の專賣にもあらざるなり。信條の一形式にはあらで人心の根元に生じたる神祕的情緒靈性發育の根本義永劫普遍に人心を貫徹する力たりしなり。回顧すれば歴史の發端よりして物質が宗教の發達を裨益せる功は蓋不尠。吾人にして今宗教

の何たるかを考へ宗教が人類に貢獻せし所如何に多きかを思はば物質の人類に與へたる利益中宗教上の利益を以て最大なりと斷ずるも決して過言にはあらず。

第三章 自然界に於ける神の内住

外界自然に宗教的感化力あるは人の實驗する處、普通の人の普通に實驗する處、異常の事柄にも除外例にもあらざるなり。却りて萬世に通じ全世界に遍く亘りて人の經驗する處、此立論の價值ある所以は誠に此點にありとす。故に解釋法の如何によりて此經驗の價值は動かさるゝことなし。解釋法は時代精神に著色せられ文化又は信條の影響を受くるが故に元より一様なる能はず。されど解釋は人類が本能的に最初の印象を翻譯して哲學神學の信仰と結び付けたるものなるが故に既に最初の印象にはあらず。世人動もすれば此印象と解釋とを混じて前提の許さざる結論を作り以て全課程を破壊することあり。或人は自然界に愛の創造主を認め或人は二元を認め或人は複多なる靈の存在者を認め或人は遍滿する一個の靈を認む。何れも自家の信仰に立ちて直接經驗を解釋したるものなれど

も其間兩立し難き要素を含むが故に直接経験そのものも亦餘りに普遍なるものにはあらずと思はしむ。然れども解釋の背後に在る直接経験そのものは一切に通じて同一なり。そは自然の前に立てるとき靈物を感じせりとの感にして新プラトニー派の所謂物質界と同族親近なりとの感物質の内部背後に靈物を認識せりとの感なり。此感情は此を限定するに難く又此に伴ふ情緒すら人によりて一様ならず。かくの如く此感情は定義を絶すと雖も而も萬人萬世に共通し最も猛烈なるものなるは争ふべからず。

人若し如是の経験を疑はざるならば物質の背後に靈の實在あるを認めざるべからず。而して疑ひて幻覺と呼ぶ者あるか又は此を感ずる官能を信せずと曰ふ者あらば先づ其疑ふ所以信せざる理由を提出せざるべからず。何となれば此経験は人類共通の経験なればなり。

これを幻覺と呼ぶ者は本能の聲を迷となし知識の發達はその誤れる點を明らかにしたりと説くものなり。誠に今日の科學者が築き上げし世界觀は感覺の認むる世界觀と著しき相違あり。而して科學者は自己の世界觀を信じ原子エネルギー

「エーテルを光線と光線の運動の投射する影よりも眞なりと爲す。故に感覺によりて起る情緒には外界の反映なし、感覺は不完全なる傳達器なるが故に傳へられたるものも亦空ならざるを得ず決して實在するものを傳へずと。

此に於てか吾人は「實在とは何ぞや？」と問はざるべからず。此問や發するに易く答ふるに難し。或は曰ふ存在するものは實在なり、實在とは實際存在するものなりと。されど此解答は疑問を一步後ろに押し退けたるものなり。只だ實在なる語の代りに存在なる語を以てしたるものなり。吾人の疑問は毫も解結の歩武を進めず。而して單に存在といはば夢も幻影も愛情も外界もすべて存在ならぬはなし。而も此等存在の中に種類と程度の差あるは何人も認むる所ならむ。只だ存在とのみいひて以て實在の唯一標準となすは餘りに漠然たり。此に通俗哲學の解答あり。實在を以て空間に存するものとすこと是れなり。此定義に従へば大さ形ち等所謂第一義の物の性質は温、色、香等所謂第二義の物の性質よりも高度の實在性を有すと。然りと雖もかゝる區別は全然無意義なり。こは根據なき區別にして隨てかゝる見方の實在觀も亦根據なく今日は既に陳腐の説

として顧みる者もなきに至りぬ。蓋し感覺は吾人の肉體機關に對する反應なりと同時に外界空間中にも存在す。恰も林檎の圓形なると紅色なるとが外界に存在すると同様に存在す。又感覺が知覺又は觀念概念等となるためには推理悟性等の精神作用を籍らざるべからず。故に外界の存在又は客觀の存在等を以て實在の標準とする能はず。何となれば内界外界といふも主觀客觀といふも共に抽象にして事實に於ては兩者相融合相挿入して相分離し得ざるが故なり。

故に實在を定義するに人格的存在と曰ふは最上の定義ならむ。人格てう語の精義は姑らく曰はず。實踐上吾人の疑はざるは自己の人格の實在なり。そは人格の存在が最確實なるが故にはあらで其内容が最豊富なるが故なり。プラウニンが曰く。

「無知と無知との中間に只だ一物の知るべきものあり、そはわが自意識なり。」

吾人は本能的に自家人格の實在に對する確信を移して他の人格に及ぼす。吾人は他の人格を以て非人格的のものよりも高度の實在性を有すとす。茲に於てか

吾人は意識的若くは無意識的に人格を以て實在の標準となすを知る。而して人格以外のものが實在性を具備するの度はそが人格と關係する程度に比例す。友人隣人財産書籍科學行爲等が實在性を有するの度はそが自己の感覺筋肉等に抵抗したる度に比例す。現在わが眼に反射しつゝある星は未見世界全部に比して高度の實在性を有す。約言すれば自己の人格に反應し自己の一部となれるものは自己に取りて争ふべからざる實在なり。就中最も拗拗強烈なる反應を呈するものは最も高度の實在性を有す。而して自己は他の人格の實在觀も自己のそれと同様なりと考ふ。但し或物は或人に對してのみ反應を呈するが故に此は主觀的相對的の實在を有すと稱し得べく、或物は萬人に同等の反應を呈するものなるが故に萬人に共通なる實在を有すと稱し得べし。後者は是れ普遍的客觀的實在と稱するものなり。主觀的の實在觀を客觀的實在觀によりて訂正すとは外界空間上の存在を標準とするの意にあらず。萬人の人格に共通なる反應を呈するものを標準とするの意なり。アリストテレス曰く「萬人に現るゝもの此を存在と謂ふ」と眞に然り。而して萬人に現るゝものは結局外界空間中に現るゝものなり。思

想の如きものすら萬人に現れむがためには此を書籍中に投出せざるべからず。故に空間は實在の媒介者たり。然れども空間は實在の構成要素にはあらず。實在の内容を堅實ならしむる媒介なり。言語は思想よりも行爲は言語よりも高度の實在を有す。何となれば後者は全人格を含蓄するの度多ければなり。思想を言語若くは行爲に發表するに當りて吾人は勇氣なかるべからず。吾人の所信に意志を投入せずんば思想を明白ならしむることを得ず。此意味に於て言語行爲は思想以上の實在を有するものなると同時に發言又は肉體表情の媒介によりて思想を他人に傳達し且つ思想の範圍を擴大ならしむ。人書を著はし立像を刻み繪畫をものすれば自己の思想を實現したりといふ。言は實在性の度を高めたりとの謂なり。何故に實在性を高めたるやと曰はば自己の意志を投入したるが故なり、外界に投出したるが故にはあらず想像の産物を全人格の産物と化したるが故なり。同時に自己の思想を公衆に示して多數人の精神及び感情中に再生せしめたるが故なり。實在に程度ありと説くは屢反對を受けたる立場なり。されど此立場は哲學上の典據なきものにあらず。實在を以て存在するものを含むとせ

ば勢程度上の差を許さざるべからず。而して人格は最高の存在形式なり。故に人格と最親密最恒久の關係あるものは吾人に取りて實在性の高きものなり。實在性の高低は吾人と無關係なる度に比例せず吾人と關係する度に比例す。空間に運動するものが高度の實在性を有すと稱せらるゝ所以は多數の人格と關係する可能性多きが故なり。此意義に於て科學者の原子は果して高度の實在を有するか。普通人の有する感覺以上の實在を有するか。曰く然らず。原子は小數者の人格に知らるゝ機械的原因なり。感覺は萬人の強烈に經驗し且實踐上の行動を引き起すものなり。されば原子よりは感覺現象が高度の實在を有するは斷々手として疑ふべからず。

今吾人は夕陽を以て例證せむと欲す。夕陽は科學者の説明によるにエーテルの震動の連続只だ機械的原因を有するものなるが故に吾人の視覺に映するが如きものにあらず、而して全體として此を観るときは錯覺を引き起し地球は動かすして太陽が動く様に思ふ。故に此際的感覺は眞ならずと。然れども吾人之を仰望しつゝある間に吾人の人格の最奥部まで此に動かさるゝが如く感ず。青年

ならば理想の猛火に燃やされ老人ならば平和と希望の慰籍を與へられ聖徒は祈りつゝ天の扉の開くを思ひ罪人は良心の咎を感じ哀悼する者も慰安を得られたる者も安息を得美術家は靈感に觸れ戀人の思は融和し俗物も仰望する間に心の淨化と平和とを覺ゆ。思へ、半時間の後此機械的の課程は終局を告げ黄金の色は灰色に化せむ。而も此束の間に無數の靈は遠き夕の空より大なる祝福を受け平和慰安を受けて其心高擧せられ、進むでは明日の進路を夕陽によりて變化せられ塑像せらるゝ人もあらむ。

又音樂に就きて曰はむに。琴絃一曲の靈音は聽衆に取りて音響學の法則よりも高度の實在を有す。要するに科學者の世界を以て感覺世界以上の實在ありとなすは非なり。二者一樣に連續せる一個統體の兩面なり。此に於てか吾人は結論して曰く宗教の感化力は物質の機械現象を所依として吾人に顯る。故に自然の感化力は機械的現象に比し決して低級の實在にはあらず。二者が吾人に反應するや異なる官能を通じて來ると雖も印象の正確なる度に至りては二者毫も異らず。

此に第二の反對説起る。第一のそれを別の立場より論じたるものにて情緒の信賴に價せざるを説くものなり。元來人は動もすれば容知と情緒とを對立せしめ情緒は眞理を教へずと説く。若しくは情緒を不合理なりとまで極言せざるも情緒に依るは信仰の件に屬するが故に證明を要す。然るにかの自然の與ふる感化力は情緒の對象たり。而して情緒は自家の解釋者たる能はず。隨て靈物と果して接觸したりや否やは檢證の方法なし、故に情緒は自家の存在を知る外何等の知識をも吾人に與ふるを得ずと説く。然れども感情と悟性、情緒と睿智との間に嚴正なる境界線を劃するは不自然なるのみならず。事實に忠なる所以にあらず。知識の基點は純知にもあらず純情にもあらず。二者は何れも抽象なり何れもに全人格の經驗にして思ひ且つ感する人格の經驗なり。其統一中には思想感情が不離の状態をなして混淆す。「精神が感するとき感情と呼ばれ同一精神が理解するとき理知と呼ぶ」と遠き昔に喝破せるアルキユームの言の如し。經驗は感覺に始まる。是れやがて感情なり。然れども感覺が認識せらるゝや即ち思想の解釋を伴ふ。批評家兼解釋家たる思想は感情を俱有する存在者の思想なり。

多少に拘らず感情は精神の一切課程に伴はざることなし。元より排外的注意作用の補助により人格経験中の一部を抽象し之を研究の對象たらしめ得べし。されどかくする以上は勢制限若くは抽象の課程を経ざるべからず、而して制限若くは抽象は完全に近づけば近く程真理の統體より遠かる。茶人又はピアノの樂手が自己の注意を特定の感覺に監禁し、純數學者が純抽象思想に踞踏するが如きは是れなり。又美術家の使用する官能は軍人の使用する官能と異り、軍人の使用する官能は裁判官の使用する官能と異なる。かく特種の官能に限定せらるゝ人は偏狭となり不完全となり一面的破片的の人格となり終らむ。ウォーヅウオースの描出せる哲學者を見よ。

「彼は母の墳墓をあばきて、
植物を研究する學者なり

滑りに靡り磨がれし彼の心には

大小何れの形ちをも刻み得ず

塵ほどの情をも留め得ず

推理すれば足れりとなす、
全身知の人、いな、
人ならず機械なり。」

此種の専門家を見る毎に吾人の常識は常に一種嫌惡の情を生ず。是れ吾人は畢竟人格にして機械に非るを教ふる本能の聲なり。吾人は人格なるが故に周圍の一部のみに注目せず全體に注意す。自然社界及び(神を信する人は)神の全部面に注意す。即ち吾人は周圍の統體に反應するものなり。是は哲學者のみの態度にはあらず常識ある人の凡べてが有し又有せざるを得ざる態度なり。周圍の統體に對しては人格の統體を以て接せざるべからず。個々別々の諸官能を結束せるが如き人格を以て之に接せず、統一ある全人格を以て之に接せざるべからず。即ち外界を解するには知情意の全部を具備する全自我全人格を以てせざるべからず。而して全人格の要素として恒常的の情緒が重大なるは恒常的觀念の重大なるに比して毫も劣る點なし。

元より吾人が世界を解釋せむと試むるときは常に理性の活動に依らざるべから

す。此は世界が結局可知的にして其究竟性は理解し得べきものなりとの信念に立つものなり。而して此中より不合理なるもの理性と兩立せざるものを拒斥するは可。されど不合理又は矛盾にはあらざるも而も吾人が理解し得ざる故を以て不可知なりと斷じ得べきものあらむ。否な世界は此意義に於て不可知なるものに充滿せり。其本質に就きては零細の知識なれども其實在は斷じて疑ひ得ざるものに充滿せり。而して此を説明することの如何に困難なるにも拘らず合理的の人は猶豫なく此を受け入る。日常の生活に於て吾人が刻々になしつつある態度は概ね是類なり。科學の説明し得ざる自己の理解し得ざる事實を吾人は常に採用し活用しつゝあり。常人は概ね自己に飢渴温熱等の感覺あるを解せず。而も彼は此事實を活用して自己の營養被服の道を講じつゝあり。此點に於て動物生命の全課程を理解し得る生理學者と異らず。此真理は以て當面の問題に適用し得べし。時間空間運動生命及び其他の經驗は最後の解剖に至りて吾人の理解に絶し不可説明の件ならざるはなし。是點に至れば吾人は何等の理解をもなし得ざれど單に事實として採用するの外なし。又如何に推理作用を究盡するも

如何にしてそれが事實となれるかを説明し得ざる點もあるべし。是點に於て理性は遂に不可知の輿料を取り扱ふの外なき境地に達せるものと曰ふべし。故に理性の作用には制限あり。發見家は自己の發見せるものゝ存在を主張し得れど自己の未だ發見し得ざりしものゝ存在を否定する能はず。故に人格經驗の如何なる部分を取り扱ふにせよ。最初に起すべき問題は合理か否かといふに非ずして事實か否かにあり。若し事實にして存在し實際在ることならば理性は目下此を説明し得ざるの故を以て拒斥する能はず。而して當面の問題の如きは正に此種の事實なり。こは有史以來の大事實にして人類の常態自然的の經驗なり。今そが情緒の對象にして説明し得ざるが故に此を實在ならずと速斷せばそは大なる不合理なり。況んや此經驗は情緒的なるに止らで人格的なるをや。こは誠に人格の他の要素と孤立したる抽象的感情の上に及ばず感化力にはあらず。他と生々地の關係を保つ感情に對する自然の感化力なり。故に吾人は理性に對すると同様の信用を此感情に置きて可なり。蓋し何れにありても吾人の信頼を置く所は背景にある人格なり。理性を信ずるは複雑なる人格の一官能なるが故に信するな

り。即ち一定の活動力として顯れたる人格を信するなり。今例を以て此を證せむか。理性によりて推測したる新たなる惑星を實際上發見せりとせば其程度までわが理性の信じ得べきを證明したるなり。わが人格は其點までは眞理に忠實なる活動をなせるを證明したるなり。此に於て猶他の點に於ても理性は信頼し得べしと思ふも不可なからむ。否な人格の他の官能他の活動方面をも信頼し得べし。其證明を受け入れて可ならむ。蓋し理性として顯るゝも感情として顯るゝも結局同一人格の異なる方面に過ぎざればなり。元より全人格を以て信するに足らずとなすことを得べし。かくすれば懷疑説の立場を取るものなり。されど一度人格の一部を信する以上は是れ懷疑の態度を拒斥したるものなり。隨て他の人格要素をも信せざるべからず。一を信せば他を信せざるべからず。蓋し其一成立せば他も成立し其一倒れば他も倒るべきものなればなり。今如上の議論を自然の宗教的感化の件に適用せむか。自然の感化は色彩音響等の感覺を通じて來るものなるが故に錯覺なり假象なり幻影なりと曰ふは非なり。

そが吾人に及ぼす効果だけにも實在の証充分なり。抑もそが實在たる所以は正しく吾人に現るゝが故なり吾人に現れて強き反應を呈するが故なり。かの理性に訴へずして情緒に訴ふるが故に信するに足らずとなすが如きは愚論なり。是れ人格の一要素を他の要素よりも偏重することなるに吾人は全人格を以て合理性の宿る所とせざるべからず。人格の一要素を他の要素より重すべき理由は毛頭なきなり。如上の理論が眞理なる以上、吾人の經驗が蔽ふべからざる事實なる以上、物質界を以て靈の顯現なりと主張し得る理由は極めて強固となれり。古來當の問題に就きて學者の利用したる論法は純理性よりの推理にてありき。即ち美の推論原因の必要、意匠の形跡等にてありき。此等論法は何れも推理の背面前景にある靈の感化力を閉却せり。解釋と經驗とを混同したる議論なり。解釋と經驗とを峻列して初めて經驗の普遍なるを言明し得べし。蓋し如何様の解釋を以てするも此を感得したりとの經驗そのものは不動なればなり。人は曰く。自然の一瞥觀は唯物論に導くと。されど吾人を以てすればそは甚し

く事實に違かれるものなり。一瞥観は却りて靈物に對する信念を強固ならしむるものなり。唯物論に導くものは一瞥観にはあらで現象の背面に立ち入り其機關の内部の構造を分解する態度なり。然りと雖も此態度は全體を棄て、部分に趨れるものなり。一瞥観は全人格が全自然と交接して得たる判断なれば吾人の全自我が與りたる判断なり。之に反し分解的科學的の觀念は破片的なるが故に重大なる要素を閉却したるものなり。是れは特定目的のために特定の性質を抽離し他の性質を閉却したるものなり。誠に物理學は更らに抽象的なる數學に比すれば具體的なりと稱することを得べし。されど現象の物理的關係のみを見道德的情緒的關係を閉却する點に於て抽象的なり。此種の抽象が思想の發達に貢獻する所あるは實踐方面に於て勞力の分業が生命の發達を益するが如し。社會の進歩は各員特定の官能を發揮せむために自我を制限するによりて初めて可能なり。知識の發達も世界の各部を分割し特定の科學に分擔せしむるによりて可能とならむ。されど勞力の分擔にあれ科學の専門にあれ分業そのものは目的にあらず。圓滿なる人性を解せむとせば社會團體の特種階級に注意を限るは不可なり。

り。軍人政治家商人思想家美術職工の何にも偏すべからず。破片的生命を包含し補足し矯正し内容を豊富ならしめ之れが統一體を形成する全世界を觀察せざるべからず。物質界を完全に解せむとするに當りても同様なり。破片的分解的の物質觀を棄て、物質全體の吾人に及ぼす効果を考へざるべからず。機械的の構造化學的の性質有機的の發達美的顯現等を個別に調査する態度を抛ち此等一切を統合したる實際上の合成果を研究せざるべからず。人格に呈出せらるゝ活ける結合體を觀察せざるべからず。然らば抽象破片の裡に發見し得ざりし靈的特性を具象統一體の自然中に發見し得べし。例へば「あわせゑ」の個々の部分は此を結合し組み合する迄は何の繪なるかを想像し得ず。又一綴字を單獨に引き離して讀めば全文の意義を知るに苦むが如し。かくの如く自然が靈的なりとの眞理は經驗に根するものにして解釋法の如何によりて左右せらるゝものに非らず。此點を聲明せむため吾人は解釋法の種々相に就き故ら何等の云爲をもなさざりしなり。蓋し宇宙に對する學說の差異は曰はず、等閑過し得ざる或存在者ありとは萬人の均しく一致する所なればなり。故に學說の多きは却りて當の

經驗の實在を強むるの證明なり。然りと雖も既に此點を明らかにしたる以上は其解釋法に就きて論ずるも敢て不可なからむ。物質界がかくも靈物を強く暗示するものならば靈と物質との關係は如何？經驗そのものに關する限り歴史に現れたる學說の何れにも調和せしめ得べしと思はる。然れども更らに吟味するときは諸多の學說中また優劣なき能はず。

例せば汎神説と二元説とは今日此れが解釋として成立し得ず。蓋し宇宙は明白に一なるものと思はるゝが故なり。宇宙の構造と發達とに統一ありとは前代に於ても屢主唱せられたることなれど近代科學の發達は此思想の遂に疑ふべからざるを證明し新たなる光明を以て此を照らしぬ。而して今日統一あるものは其發端に矛盾せる要素ありしと考ふる能はず。物質の系統が靈力に指導せらるゝならばその靈力は一ならざるべからず。如是の理論に關し靈と物質との關係に根據ある知識を得むとせば知識の根帶たる自我に行かざるべからず。吾人は自我に就きて知る所多からずと雖も吾人が直接に内部より知り得るものは自我の人格の外なければ一切の知識の根底を此に置かざるべからず、人格は靈と物質と

を結合せるもの此二者を完全に引き離して人格を解する能はず。されば人格は吾人の知識を照らす甚だ臙ろなる燈火なりと雖も真理探究の途上吾人が手に提げたる唯一の燈火なれば吾人は此に頼るの外に道なきなり。

反省によるに吾人の精神なるものは肉體の機關を超越し或度まで肉體と無關係なるを知る。是作用ありてこそ初めて精神は全く肉體に隸屬し了らざるを得るなれ。此を形而上學的に言表すれば精神の精神たるは自意識あるに依る。主體たる自我を客體たる自我より分離し得る能力あるによる。この能力は物質の作用として考へ得ざるが故に此點に於て吾人は非物質的存在界に没入す。而して形而上系の思想家は近代哲學の説明によりて此論の確立を確信すと雖も元來形而上學の分解は一般の分解の檢閲に外ならざるが故吾人は目下の目的上一層卑近なる道德界に此を徵せむと欲す。

道德上吾人は吾人の行爲に責任を感ず。狂人ならぬ人は何人も政治上社界上の一切生活が此假定の上に立つものなるを疑はず。否理論上は兎も角實踐上此假定を蹂躪するものあれば法律は彼に干渉して彼れの主義を懲戒す。人若し過失

に陥るときは此假定を否まむと切望するに拘らず自己の否定の明らかに背理なること自ら意識す。蓋し此假定は人類の有する確信中最も強固なる確信なり。而して此確信を事實とせば吾人の理論は成立せむ。何となればそは自我の自由を意味するものなればなり。人は生れてより肉體上の物質は悉く變化しゆくに人格の單位は常に同一不變なり。又物質は外部より規定せらるゝに吾人は自ら自己を規定する能力を有す。此問題は人の既に評論せる所なれば今更ら再言するの要なし。唯だ吾人は此際此事實より次のことを言明すれば足れり。曰く人は物質を所依とするものなれど物質を超越し物質以上の平面に活動し或程度まで物質の主宰たるを得と。此れ上掲の議論より生ずる當然の結論なり。これ自己人格の内部に於て吾人が知り得る物心關係の一面なり。人格の外部に出で科學の發明藝術の作品等に思を廻らせば精神が物質を自己の利益のために變化塑像しゆくことの愈明白となるが故その超越的主宰的關係は益疑ふべからざるに至る。精神が物質に内住するは猶他の立場より立證し得べし。精神は神経系統腦漿を通じて活動す。隨て機關の全部に自己の特性を吹き込み此を活かし此を靈化する。

故に眼の表情、音調、手の動かし方、無意識的本能的の姿勢、身振、步調によりて人の特性を知り得。否な人の性格は自家肉體の城廓中に監禁せられず。自己の關係する事々物々家屋衣服什器手工精神作物等の中に人は自己の性格を押し印す。これ第二義の人格實現なり。故に人の精神が其作物によりて不朽となるとは比喩にはあらず、人死して後も作物によりて彼は後昆を感化するを止めず。ラファエルの繪畫を見ベートルーベンの音樂を聞きダンテの詩又はプラトリーの哲學を読むとき吾人彼等の偉大なる精神に動かさるゝこと恰も彼等の面前にあるが如し。彼等の精神は色彩の中に活字の中にありて不朽となれるなり。以上を綜合するに、人格經驗より知らるゝ物質と精神との關係は二重なり、超越的と内住的とこれなり。但し論理上かく分離したるものゝ實は一事實の二面に過ぎず。一個人格の單一動作を異れる二個の立場より觀察すればかくなるといふまでなり。自意識自己決定力等は物質の法則を超越する特性を有するものながら此特性を實現し知覺する手段は物質を藉りて此を動作に表す外なし。然るに物質は精神を自己の使役に供するを得ず。故に精神とそが顯現の手段たる

物質とは別物なりと認定するにあらずんば吾人の肉體も吾人の作物も精神の表
彰具なりと思ふを得ず。

此に問題あり、絶對精神の物質的宇宙に對する關係は如何？此問題の解結は比
論による外なし。然らずば解結の方法もなきなり。故に此際全然不解結として
不問に附することも不可能にはあらず。されど兎にも角にも解結を試みるなら
ば吾人の有する自己の經驗より出發せざるべからず。超越と内住の結合せる自
己の經驗より出發せざるべからず。

此態度は萬有神教と兩立せず。萬有神教は多數の自然崇拜家に取りて強き引力
を有すと雖もそれは思想の法則に反す。精神にして誠に物質中に内住し且此を超
越することなくば全然精神と稱する價值なし。それは自同性をも自由をも有せざ
る物質の一面のみ。故に萬有神教と唯物説とは差別なし。唯物論に情緒を加味
したるもの此れ萬有神教なり。而も實は萬有神教と呼ぶ價值なきなり。

論理上萬有神教の反極は自然神教にして超越神のみを信ず。此れと吾人の比論
とは兩立し難し。吾人は精神を全然物質と分離して考ふる能はず。故に自然神

教の宇宙觀を解するを得ず。但し自然神教は昔日大勢力を有したる宗教なるも
今日は既に陳套に歸したれば此に論するの要なし。それは近代の如く科學思想の
旺盛なる世に行はるゝものに非ず。形而上學の流行せし時代に於て初めて人の
傾聽を促し得べき性質のものなり。

既に汎神説二元説萬有神教自然神教を評したれば殘るは只だ一元説のみ。一元
説に曰く。運動せる物質は精神と同一にして外部より見れば物質、内部より見
れば精神なりと。こは一見唯物論の別名なるが如く思はる、又歴史上一元説な
る語はヘツケルが科學上の唯物説と同意語なりと明言して用ひたる術語なり。
然りと雖も有神論の意義を加味して用ひたる學者なきにあらず。この用法によ
れば存在上精神と物質とは同格なれど其合著上より見れば精神の方物質よりも
勝れりとなす。こはスピノザの立場に酷似するものにして其強點は二元説の難
關を切り抜け得るによる、而も畢竟臆見たるを免るゝ能はず。曰く。「精神と物
體、主體と客體との對立そのものも現象的假象的にして絶對的實在的にあらず」
と假定すれば即ち足ると、是れ其根底なり。人格經驗上不解結の秘義たる二元

八四

説に達著するとき此を以て幻覺に過ぎずと断定せば直ちに知的満足を得べし。然れども此は唯物論も攝る所る態度にして唯物論はしかなすが故に非難せらる。吾人が意識の根本事實を否定し得ざるや、そが物質を利用するためにも不可なるが如く精神を利用するためにも亦不可なり。唯物的にせよ唯心的にせよ、一元説は吾人の自己の内部にて知る所を以て根底とせず、却りて此種の知識の確實を疑ふものなり。故に懷疑的の立場にして何等積極的の結論に到達し得ざるなり。更らに注目すべきことは上掲の引用文中精神と物質を主體と客體と同意語なりとやうに取り扱へるとなり。こは明白に誤謬なり、而も此學説に避くべからざる誤謬なり。何となれば物體と精神とを駢行の同格物と見得るは精神を物質の主觀狀態又は心理狀態の連續と見て初めて可能なることなればなり。然るに人格經驗上吾人の知り得る精神に於て其特點とする所は客體となり得ると同時に主體となり得ることに存す。實に精神は自己を客體となしわれはわれなりと呼ぶを得。此自己意識自己能定方あるが故に精神は物質に超越し得るなり、物質に比儔なき力は此れなり。然るに一元論は元來思想の條件たる大腦を基礎とし

て出發したるものなり。物理的の分解より出發したるものなり。故に此を形而上に移して比論を行はむとするは其性質上不可立なるを免れず。然らば如何？残る所は只だ人格經驗を基礎となし此より比論を行ふの外なきに非ずや。故に神は自然に超越すると同時に自然に内住するものならざるべからず。此關係は如何に思想するに難しとするもそが經驗に根據を置くものなるや疑を容れず。然らば此れより比論をやるに何の不可あらむ。故に神は靈的の神にして物質秩序に超越すること無限なると同時に物質中に内住し此を支持するものならざるべからず。吾人は神が如何に自然を超越し如何に自然に内住するかを充分に知り得ず。只だ此經驗の二要素中何れの方面をも無視する能はず。而して内住の方面に於て經驗の效ふる限り二種の様式あり。第一義の内住と第二義の内住とこれなり。第一義の内住とは肉體中に精神の宿ることにしてこは屢人格と稱せらるゝものなり。第二義の内住とは比較的偶然のことにして自己を有意的無意的に作物中に内住せしむることなり。此内住の何れより比論して神の性質と思惟すべきかは次の問題なり。神の宇宙に對する關係は第一義の意

味なりや第二義の意味なりや、宇宙は神の體なるか作物なるか。此疑問に就き諸種の思想家諸種の解答を與へたれど畢竟何れも臆見ならざるなし。基督教の神觀基督教獨特の立場は三位一體論にして最も大なる知的満足を與ふるものなり。そは第一義及び第二義の内住を合せ取り兩者を調和するが故なり。三位一體説に従へば三位中の第二位は第一位の實現なり顯現なり、充足且永劫の實現なり。「神の人格のあらわなる姿」「神性の充實が肉の中に宿れるもの」なりと同時に「萬物は彼に造られたり」となすが故なり。隨て基督教の神觀には二重の内住あり。一は父が子に完全なる内住をなせりとの思想なり。此は吾人の精神が吾人の肉體に宿るを以て不完全ながら其模寫と觀するを得べし。第二に神は受造物中に内住するの思想にして吾人の精神を作物中に内住せしむるに相似たり。但し吾人の内住と神の内住とは明らかに區別するを得。吾人は死して逝かざるべからざるが故に死したる後は吾人の人格は只だ非人格的の作物中に宿り得るのみ。然るに神は宇宙を永劫に支配し此を活動せしめつゝあり。故に宇宙は活ける神の顯現なり。決して書籍繪畫の如く死せる内住にはあらず。

故に神は常に呼べば應へ給ふなり。

第四章 人に於ける神の内住

神自然に内住すとの思想は神學者の専有に非ず。今日の科學者哲學者は何れも自家の立場より此思想に入り得べし。而して神若し自然に内住するならば自然の一部なる人類にも内住せざるべからず。人類に神の内住なくば自然界に於ける神の内住を信するは空しく、人類に内住あらば自然に内住することも愈確實となるべし。

人に就きて觀るに最初に吾人の注意を引くものは良心の實在なり。良心は人の屬性中最も神秘的なるものなり。今日良心といへば極めて複雑なるもの無數の經緯を以て編み込まれたる組絲の如く思はる。然り、其裏面には長き歴史と無限の發達とあれど原始人の良心は決して今日に於けるが如く知的のものに非ざりき。又其内容も明かならざりき。否今日と雖も全人種の良心が一樣なりと曰ふに非ず。唯だ今日最高の形式なりと目せらるゝものも其發端に於ける萌芽中暗

八八

々裡に包蔵せられありしは事實なり。萌芽とは何ぞやと曰へば自我の奥底に宿り正義を嘉しとする「われならぬ或者」が存在すとの感なり。其源を神の外に歸し得ざる無上命令絶対權威の聲あることなり。こは良心の宗教的説明なれどこれにて説明は盡きたるに非ず。否な古來暗示せられたる學説の何れを以てするも眞に無上權威の出所を説明し得るものあらず。されど只過去に溯りて其萌芽の何處より來れるかを研究するは餘りに重大なることに非ず。現在の事實を説明し得なば足れり。現今吾人が有する無上法、無制限無條件の絶対命令は何ぞや。こは吾人の熟知する所なり。良心の命令を下すや無制限無條件絶対的なことは吾人の親炙する所なり。誠に良心は詩人の曰へる如く。

「靈に於ける神の最も親しき係
世界に於ける神の最も完備姿」

而して良心の聲に服従するの度に從つて品性は益聖き高き度を加ふ。史上聖且つ善なる性格と讃へられし人は何れも良心の命令に従ひ良心を以て神の聲と認

めたる人なり。聖書に「神は彼等の中に働きて其善旨を念ひ且つ行はしむ」とあり。又スピノザが「われ等の神を愛する愛の最も高きものすら神の自己を愛する無限愛の一小部分に過ぎず」と曰へる。何れも此意味に外ならず。人動もすれば這般の作用を以て自我の作用自家の所爲に過ぎずといひ、神の協力作用と思ふは誤解なりと説く。然りと雖も多數幾萬の人が失敗せるにわれ獨り成功せるならば成效せる所以の力を以て人間以上の力となすに何の不合理か此れ有らむ。思ふに此種の経験は少數の聖徒に限られず。又品性行爲の拔群なる選人に限られず。有史以來無數の人類が幾度となく實驗せる所なり。内部奮闘靈的生活に於て神の干涉と神の協力を實驗したりと信する人は何れの地何れの時代にありき。而して奮闘上成效を得る毎に此確信は強固を加ふるに至りぬ。但し此種の経験は神學の語を以て表白し得ず心理學の術語に翻譯すること能はず。而も古今に亘り世界を通じて人類の靈的實驗上日に確證を得たることなるが故に吾人は此事實に眼を蔽はむとするも得ざるなり。

此れ所謂人類に於ける神の内住なり。而して神の内住はまたインスピレーション

シとなりて顯るゝことあり。由來靈性は自家實現の器たる物質に反應す。腦漿神経系統を塑像し遂に肉體の全機關をして漸次自己に同化せしむ。されば面貌音調態度素振等は凡べて内部の靈性を愈ほ分明に顯はすに至り、内部の神聖は眼に見ゆる物となり、神が吾人の靈性に及ぼす作用は吾人の肉體中に歷々として其痕跡を認め得るに至る。かく神が漸次に物質中に自顯するの消息を解するに従つて此作用が神子受肉として其絶頂に達し宇宙に於ける神の内住を完成したりとの大事實に面接するの準備成らむ。

此に忘るべからざるは基督教攻撃の一點が正しく此事實に根據を置くことなり。即ち神子受肉説が人類の思想と契合するが故に攻撃することなり。批評の盛ならざる時代に於て人は自ら神子受肉を信じ易き傾向あり。受肉神の思想は人類に共通なる形式なり。生れながらにして人は此を受け入るゝの心構へあり。醫師祭司國王預言者其他有ゆる種類の非凡人を以て受肉神と崇めたるは歴史の證する所なり。此に於て論者は曰く基督の受肉説も亦此等陳套なる舊思想の遺物に過ぎず。此種の無根據なる信仰に類似するはやがてそも亦無根據なりとの理

由となすべし、と。此攻撃に對し基督教の辨證論者は多くは歴史に趨り、基督の受肉と他の受肉との相違を外部的並びに内部的證明法によりて論ずるを常とす。然れども歴史事實を取り扱ふに先ちて人は先入見を擁き其先入見によりて事實を判斷すること多きが故に史的證明法に入るの準備として論理的證明を提出するは當然のことなるべし。

元來受肉神を信せんとする心構の中には二個の要素あり。一は其蓋然性を信することにして他は其史的事實なるを信することなり。前者はそが何れの日にも起り得べしとの信仰にして後者は某時某處にそが起りたるを信することなり。一は思想の一般原理に屬し他は特定事實に對する判斷なり。後者の判斷に幾回誤謬を生じたりとて毫も新事實の眞を破するものにはあらず。九十九回まで或事變が起らざりしとて百回目にもそが起り得ざる理由とはならず。かの何人も知るならむ子供と狼との昔噺は此種の態度を破し得て餘りあるべし。されば受肉説に蓋然性ありとの一般眞理を論ずるに當りては此態度を以てするは不當なり。又一事を預期することが人心一般の傾向なりとて強ち其傾向の妄なるを

九二
 證明する理由とはならず。何となれば此思想を赤裸々に言表すれば次の如くなるべし。曰く「人々は此を豫期しつゝありき。故に此事變は起りし筈なし」と。あゝ何の皆理か此に如かむや。論者は又曰はむ。「人々は此を豫期しつゝありき。故に此を拈造せしなり」との意なりと。されど豫期せしが故に拙造せしなりとの立言に論理的可能性を含ましむる唯一の理由は其事實が不可能事なりとの根底の外はあらず。然り此事實が不可能事なりや否や是れ本問題の死活を決する點なり。多くの人は神子受肉の説を不能事なりと断定し此先入見に累せられて問題を眞面目に討議することなく、直ちに吾人の所信を評して人心の豫期を迎合したる拈造説なりと曰ふ。されど此態度は論理學者の所謂竊取論點の論法なり。人心に受肉説を信せんとする傾向ありしとて直ちに特殊の受肉が事實ならざりしとの理由とはならず。かの人類一般の傾向そのものが全然虚偽の上に立つものと證するに非ずんば此結論は生じ來らず。抑も此の傾向は人性の根本事實なり。論者は此根本事實を無視し專斷的に此を否定して而も何等の理由を提供せず。此を大胆に且赤裸々に發表すれば「受肉説は不可能事なり。何となれば人

類は有史以來常にかく信じたるが故なり」となる。嗚呼何の不合理か此に如かむや。而もかゝる不合理の專斷も歸納法的の假面を著るとき幾分の理あるが如く見ゆ。而も論理的効力の全然缺如たるを如何せむ。
 されど吾人は此かる消極的の結論を掲げ來りて満足するものに非ず。吾人にして若し公平の態度を以て如是人性の傾向を解釋するならばそが不合理ならざるを認むるのみならず猶又眞理來臨の先驅者たるを知るに至らむ。蓋し此傾向は神自ら人類に接近するを以て神の快とする所なるを人類一般に感得すと證するものなり。故にかの神人接近感の一部たり要素たり、二者相分離すべからざるものなり。而して神若は神々の存在を人類が習慣的本能的に信じたりとの一事が自然宗教の根底として動かすべからざるものならば如上の傾向の人類一般に普遍なりとの事實は神子受肉の有り得べきを暗示するに力あるものと斷ずるも敢て不可なきに非ずや。神と人とが接近しつゝありとの信仰は更らに一歩を進めて神は人と交り人に來格するとの信仰に移るも敢て其間矛盾の存するを認めず。否な、二者の信仰は不離の關係にあるが如く思はる。但し宗教本能は其最

初階梯に於て誤り解釋せられぬ。木石日月星辰鳥獸魚類を以て神そのものと思はしめぬ。而もこれ解釋法の誤謬にして本能そのもの、眞は毫もこれがために傷けられず。猶又人類の神觀が不合理の分子を擺脫することの遅かりし故を以て現在の神觀の誤れる理由とはなすべからず。誤れるものは素朴的哲學にありて宗教本能にはあらざればなり。此言は直ちに如上の人心の傾向に適用し得べし。古來人は神が人類と交通するを欲し給ふと信じたりき。此本能的の信仰はインスピレーションを受けたる人を通じて神は人に語り給ふとの信仰を容易ならしめたると同時に人の形ちを取りて神が自顯し給へりとの信仰をも容易ならしめぬ。而して後者の信仰が如何に多くの誤謬を産みしとするも其背後にある本能そのもの、眞を破り得ず。民話若くは神話中には非科學的非靈的不道德的なる受肉神を想像せしこと限りなし。其等の受肉神が合理的批評の法則に合はざるは曰ふまでもなく常識上の自明理にすら抵觸する要素を含めり。されど一方より考ふるときはかくも不條理なる架空談がかくも無數に起りしは如何に強く人の本能が受肉神を要求せしかを示すに足らむ。而して最後に基督の降誕あり。

彼れの靈的威嚴と古今無比なる感化力とは信するものをして人類の永く期待せし希望の實現なりと思はしめぬ。古來狂熱的に憧憬せし受肉神の預期は遂に事實となり、預言的の心靈が預想せし信念は遂に果を結べりと信せしめぬ。此に又一個の反對説あり。基督化神説も取るに足らぬ古譚より産れ出でしものなればこは神の尊嚴を損ふものなり。創造主たる神は如何にして自然の秩序を破壊し奇蹟的の干渉を敢てすべき。その吾人の科學思想を動搖するは恰も古代思想の神觀が吾人の道德感を傷くるが如しと。是反對説は吾人が屢受くる所にして多くの人は甚だ有力なる議論なりと思へり。然れども精察するに當りては多くの難點ある假定に立つものなるを認め得べし。第一に最も明白なる難點は自然と人とを全然對立せしむることにあり。論者は曰はむ「宇宙の大秩序を如何にして虫の如き人間の利益のために變更するを得べき」と。されど既に曰へる如く人と自然とは一統體中の要素にして二者分離し得べきものに非らず。而して人の屬性中最高なる所は自己の靈的價値を尊重する點にあり。一切の非人格物に比するも猶自己の人格が絶對的に價値あるを

信する點にあり。而して此は人間の本能に根したる事實にして哲學上辨護し得べきものなりと雖も、信仰のために生命を屬して意とせざる殉教者の生涯に於て最も強固なる證明を見る。蓋し殉教は靈性の貞操を賣るを絶對的に拒斥する行為なるが故に靈性の威嚴を宇宙の一切物質にも勝れりとなし、有ゆる價値を拂ひて自家を立し自己に背かざらむと勗め人格に無上の價値あるを證するものなり。如是の確信が人性の奥底に固著し宇宙の他の實在に勝ることも劣らざる實在性を有し宇宙の一要素一部分一事實なるを知らしむるものなり。元よりかく曰へばとて、一方に自然の秩序あり、一方に人類の利害あり、兩者相對峙すとの謂にはあらず。却つて兩者が單一系統の要素たるを主張せむがためなり。此系統中には精神秩序も含まれあり自然の秩序と結合の状態にあれど人は前者を以て後者より遙かに勝れるものとなす。何となれば吾人が外界自然を研究するには精神による外に道もなければ精神は此際しか確信せざるを得ざるが故なり。物質を知るてう作用そのもの、中に既に吾人は物質を以て精神に隸屬するものと判斷す。而して物質そのものは判斷の際腦漿の形ちに於て判斷の作用を助く。故に

自然の秩序は人のために變更せらるべきものに非すと曰ふは、物質は精神の利益のために變更せらるべきものに非すといふに同じく、兩者の相對價値に關する人の根本思想と兩立せず。されば道德上の蓋然性なしとの理由を以て奇蹟を否まんとする議論は成立せざるなり。

更らに又基督化神説が攻撃を受くる時、吾人は化神の事實とその様狀即ち化神の事實に伴隨せる境遇結果とを峻別するを要す。少しく反省すれば明白となるが如く、化神の事實を普通の奇蹟と混同するは不可なり。奇蹟なる語は普通事變の慣例若くは秩序を侵害せる出來事の意に解せらる。同種類中の他の何れの事變とも異なる出來事の意に解せらる。例へば死人の復活し水の葡萄酒に變じたるが如し。然れども無比無假定單獨唯一なる出來事ならば此れと撞著すべき類例を有せず。此種の出來事は其内部の性質上不合理ならざる限り此を否定すべき前立預定なるものを有せず。元よりそは不可思議驚異仰天等の感を引きしむべきも普通の意義に於ける奇蹟と稱すべきものにあらず。而して自然課程上人類史上に起りし如何なる事蹟も一として基督の化神と對比し類例となり得べき

ものなし。故に基督化神の事實には何等の假定なし、隨て吾人は何等の先入見をも抱かずして端的に此事實に接せざるべからず。唯だ其内部の性質が合理なりや否やを検すれば足れり。

或者は化神の事實と結果とを峻別するの不可なるを説く者あらむ。蓋し普通の事變に於ては事實と結果とが不離の要素を成し、二者何れを否とするも他を拒斥するの理由として充分なればなり。されど此論法を直ちに基督化神説に應用すること能はず。何となれば論理學の必然關係上事實は結果に先立つ故に事實を結果よりも前に考へざるべからず。化神の事實を其事實に伴ふ奇蹟よりも前に考へざるべからず。イエスキリストにして果して神にして、人の生死を支配し給ふものとせば病人を癒やし死者を蘇らすが如き奇蹟をなし得ざる理なく又此を欲せざる理なし。元よりそは單獨に此を見なば不可能なりと思はれむ。されどそが受肉神の所業なりとせば有り得べきことなるのみならず當然のことと思はれむ。されば化神の事實が眞ならば奇蹟の結果は毫も不合理にあらず。故に基督の奇蹟に就きては「かくの如きことは起り得べきか」との間を止めて「キリス

トが神ならばかくの如きことは起り得べきか」との間を發すべきなり。故に奇蹟の故を以て福音を拒斥するは豫めキリストの神性を拒斥することとなる。然れどもキリストの神性を拒斥する理理は何れにありや。只だ先天的に化神説は何の蓋然性もなしと臆斷せるが故のみ。故に吾人は此種の先天的臆斷が何等の根底に基くものに非るを明にせざるべからず。健全なる理性を以てすれば到底容し得ざる一種の先入見に據るを明にせざるべからず。願へ。人生は抑も如何なるものぞ。生命は何處より來り何處にゆくや。イードウインの講堂に於て基督教の教師に傾聽すべき理由として説かれたる比喻の如く、人生は夜の闇より現れ出で再び夜の闇に消えゆく鳥に似たり。吾人は其何處より來り何處にゆくかを知らずと、かくの如く生命の起源歸趣の不可解なるは太古蒙時の時代に於ても科學の發達せる今日に於ても毫も異なる所なし。人は何故に存在し如何にして存在の目的を最もよく遂げ得るか、抑も亦人の真相は如何なるものなりや。此等の疑問に就き今日の科學が教ゆる所は一種の卵は鷹を孵すべく一種の櫛子は椀の木を生ずべしと曰ふが如き皮相なる解答に過ぎず。人に對するの知識既に然り

況んや神に對する知識をや。吾人は天啓を離れては神に就き何事をも知らざるなり。若し夫れ神の根本性に至りては、吾人は絶對的に無知なり。否な人の根本性すら全然無知なり。果して然らば神が人となるを得ずと如何にして断定し得べき。否な神が人を造れることが真ならば神が人となりしことも同様真なるに非ずや。一神學者の曰へるが如く神子受肉は創造の必然的後果にはあらざるか。さらば化神説に蓋然性なしとの臆見は合理なる確信にはあらず却て不合理なる偏見なるに非ずや。そは事實が大秘義なるが故に蹟きをなすと雖も秘義は日常の經驗にも強ちなきにはあらず。只日常の經驗に於ては習慣の摩靡力によりて此を感ぜざるに至りたれど實は一切の究竟的實在は皆神秘なり。暫らく胸に手を當て、存在生命感覺思想愛意志神の何たるかを思へ。煩瑣學徒の曰へる如く凡べて存在するものに一として神秘ならぬはなし。されば唯だ大秘義なるが故にその事實が起り得ざりしとの理由とは毫もならざるなり。

論者猶曰はむ。反證の缺乏は決して化神説を肯定する理由とはならず。此を肯定するためには積極的に強固なる理由なかるべからず。元より信する人の判斷

に従へば強固なる證明あらむ。而も其證明は主として奇蹟に根據を置くが故に薄弱なるを免れず。今日奇蹟は他の事實を證明する根據とはならず。却りて此を記載する書籍の價值を疑はしむるが如き反對の結果を齎らすと。此の點に就きて批評すべきことあれど茲に緊説せず。只だ基督敎會が古來化神説を支持する理由として提出せるものは奇蹟を以て眼目とせずと曰は、足りなむ。蓋し化神説は明々地に靈的事實に屬す、されば物質的證明法が如何に變遷するも以て化神説そのものを動搖せしむるに足らず。靈のことは靈を以て判斷せざるべからず。イエスキリストの人格そのものが第一の證明なり。彼れが神の子たるを證せむと欲せば彼の人格にゆかざるべからず。曰く「汝等の中誰れかわれを罪に定むる者あるや」又曰く「われ眞理を語るに汝等何故われを信せざるか」と。罪なき人は眞理を語らざるを得ず隨て自家の告白する所のものならざるを得ず。キリストは眞理を傳へむと欲して先づ聽衆をして自己の人格を仰がしめ言實一致するを知らしめぬ。かくの如きは聽衆の洞察力に訴へたるものにして洞察力の存在する處に於てのみ成効し得べき言辭なり。されば善きことを見て而も之

を悟らず善き動機を悪様に解釋し道徳上靈性上の盲者にして而も自家満足の群集中にありては彼は常に拒まれたり。されど忠信なる彼の徒弟、日毎に彼に接近し彼の慈眼より新生命を吹き込まれ彼の靈語によりて活力を得たる人々は彼を仰ぎ彼の語を聞きゆく間に愛の力に引きつけられて、自家の洞察力を明かにし彼を歡び迎ふるを得たり。されば彼を信じ彼を解し最後に彼を世に宣傳したるものはキリストより直接の訓練を受けたる内部團體の證人なりき。

故に基督化神説の第一證明法最初の舉證は人格と人格との間に起りしものなり。換言すれば基督人格の自顯がやがて證明なりしなり。次に來るべき證明は基督の超人的事業にして陰府より復活することによりて冠成せられぬ。此第二の證明たる奇蹟の故に福音を拒まば大なる難問に接せざるを得ず。そは世界歴史より基督の人格及び事業を驅逐するは不可能なり。吾人にして其影響を無視せむと勗むれば勗むる程吾人の精神は此事實に把住せられ、遁れむと欲して遁れ得ざる底の魔力を感ず。

然るに化神説を事實なりとしイエスを以て自家の告白せるが如きものなりとせ

ば奇蹟は單に虚偽ならざるのみか極めて當然のことゝならむ。蓋し基督既に神ならば此等の奇蹟を行ふは元より自然のことなるに非ずや。加ふるに基督が行へりと證さるゝ奇蹟は彼が正さになすならむと思はるゝことのみ。そは彼の性格と一致し人の身體靈性上に慈悲と愛憐とを加へたるものなると同時に靈的真理の象徴たりしものなりき。福音書中に描寫せられたる基督の性格は奇蹟を以て不離の要素となすものなり、彼の性格は奇蹟なくば全然無意義とならむ。彼は明かに人性を備へしと雖も而も造次顛沛に二個の世界に跨りて生息せる人なり。奇蹟が自然に此人格より迸出するは理の當然なり。加之此力を所有したる彼は此を誤用せむとの誘惑を受けたりと録さる。かの誘惑の條を讀むもの誰れかそが奇蹟の眞實性と關係あるを思はむや。而も此記事あるが故に却りて奇蹟の眞實性が益大なるを證するものに非ずや。奇蹟力が誘惑の原因たりしことを偶然記載せる程奇蹟力の實有なりしを強く暗示することはあらず。進むでは彼が奇蹟力を用ひ得る場合に於て之を抑制し之を利用せざることの多かりしを證明するものに非ずや。而して此誘惑の記事は福音書全體の奇蹟に大なる餘波を與ふ

るものなり。ニュウマン博士の曰へる如く奇蹟中の一二は其威嚴上爾餘のものに劣るが故に又多少不確實なるが故にアボクリアより紛れ込みたるものに非ずやとの疑を起さしむ。されど同博士が「此等の奇蹟は爾餘のものと同系統に屬し其位置は全體の系統より定めらるべきものなり。こは一般規定の除外をなす多數中の少數のみ。否な恐らくは吾人の想像するが如き除外例にもあらざるやも知れず」といへるは或は正鵠を得たる批評ならむか。兎に角疑へば疑はるゝ一二の例外を除けば基督がなせるものとして録さるゝ奇蹟には皆威嚴と美と能力の制約と使用上の拘束と靈的含蓄の深さを具備し吾人をしてそが基督の全人格と調和し且つ基督の人格の必要要素たるを思はしむ。蓋し吾人は彼の驚異すべき生涯及び教訓と彼の驚異すべき所業とを分離する能はず。前者と後者とは相纏綿し相豫定し不可別の結合體となりて調和ある一幅の活畫を作る。此に陳腐ながらあらがひ難き古のデレムマを繰り返せば此活畫は如何なる巧言を以てするも單純なる人の姿と思はしむるを得ず。只だ只だ受肉神の最完全なる肖像と見る外はあらず。又吾人の想像力が獨力にて繪き出せる受肉神にもあらず。

而して正さに此理由によりてそは純正なる描寫ならざるを得ず。かくて受肉神たる證明の根底は靈的素養あるものに基督が自己の人格を自顧したる點にありき。但し基督の人格中には奇蹟力が不離の要素たりしを忘るべからず。故にキリストの與へたる印象全體中には此力の開展も加はり居りしは疑を容れず。又奇蹟力はキリストの資格の證明とはならざりしもキリストの資格を既に認めたる人々の信念を確立せしや明かなり。奇蹟は今日の人心に昔日の如き効力を與へず。然れども奇蹟の効力を殺滅したる時代の推移は一方に於て別様の證明の効力を増殖せり。過去の奇蹟の効果は一世紀毎に輕じ來りたれど過去の預言の不可思議力は一世紀毎に實現の途に進みぬ。由來福音書は預言に満てり。其第一に掲ぐべきは絶對の權威を以て世に臨みたる基督が神國建設事業の永却に繼續すべきを確信したることなり。曰く。「陰府の門は之に勝べからず」「天地は頽らむ。されどわが語は頽らじ」「見よ、われは世の終末まで汝等と共に居らむ」と。是等及び是れが類例語は遠き將來に對するキリストの立場を明示したるもの之を語りし彼の態度は無條件の確信に立ち疑惑の片影をも留め

ざりき。誠に彼れの世に來れるや人類靈性の内部に革命刷新を起さむがためにして其事業は世の終末まで續繼すべきものなり。而して此預言が當初如何の人に傳へられしかを思はゞ吾人は其大膽なるに驚かずんはあらず。何となれば彼の語を聞きたるものは猶太の漁夫にして殆んど其師を解する知なかりし輩なりしを以てなり。而もかくも大膽なる預言は遂に眞理なりしなり。全世界は彼の預言せるが如く基督教に征服せられぬ今日と雖も方に征服せられつゝあり。此事實の驚くべきは古の奇蹟の驚くべきに比して何の遜色なきに非ずや。今日も猶古今獨一の人格は古の如く「汝等のうち誰れかわれを罪に定むるものありや？」「われ眞理を曰ふに爾曹何故われを信せざるか」と吾等を詰りつゝあり。但し此古き語は今日に於て新意義を加へ來りぬ。蓋し彼の預言は既に十九世紀の間實現せられつゝあればなり。故にキリストの奇蹟を以て吾人は更に遠き昔のことゝみ思ふべからず。今日の世界に躍動しつゝある活ける系統の一要素として、現實の不思議力により過去の起源の不思議を證明しつゝあるなり。猶此に記憶すべきことは基督教の見界に従へば神子受肉の事が贖罪的の意義を

有することなり。そは和解事業なりき。罪又は道德上の惡は人類全體の經驗と離れざるが故に哲學も此事實を觀過する能はず。元來意志に基きたる罪は全人類の肉體機關に傳染し道德の墮落と肉體の墮落と相混淆し相反應し遂に其結果は「此死の體」と叫ばしむるに至りぬ。即ち靈的要素と機關及び組織の病態と官能の故障とは個人及び祖先の罪によりて一個不可離の複雑なる全體を形式したり。

以上は畢竟世界の一部に法則の破棄せられたる處ありとの意となる。星の運行は數學的に精確なり、植物生命は年々一廻期をなし、動物は人を除くの外皆其本能に従ふ。唯だ人に至りては則ち然らず。人の本能及び慾情は他の動物と同様個體種族の保存を維持するに適するに拘らず人は此を誤用して自個と全體の發達を妨ぐ。人の理性は同族の向上を計り得る力を有するに拘らず人は之を利己的非社會的の用にのみ供す。彼の意志は道德律を意識するにも拘らず彼は此に服従せず。かくて靈肉共に種族の自然法適宜法を破棄したるがために一個複雑なる病器と成り了んぬ。新約聖書中には此状態を律法なきことゝ録さる。意は

宇宙の秩序を侵害せる謂にして悪義の奇蹟なるなり。人類が此状態にありといふは哲學上の假定にもあらず神學上の獨斷にもあらず日常の經驗上吾人が親炙せる事實なり。而も吾人が餘りによく親炙せる日常事なるが故平素此を觀遇すること多しと雖も一度此に想着するときには誠に心膽を寒からしむる畏怖の念に襲はれざるを得ず。これ人生最確實の事實にしてまた最も驚倒に値する事實なり。而して基督教の信仰によるに神子受肉の第一義は此無法則の状態を救劑し秩序なき人類を秩序ある昔に恢復せむとするにありき。此企圖や單に空花に終らずして歴史上の事實として顯れぬ。何れの時代を問はず眞の基督教徒たるものは古の秩序ある状態に恢復せらるゝを實驗せるのみならず猶又世人にかくと認められぬ。さればキリストの事業は自然律を破棄せむがためにあらで既に破棄せられたる状態を救劑せむとするものなりき。即ち奇蹟の解毒劑たりしなり。

此思想が所謂奇蹟なるものゝ物理的可能性を否するものに非るは狂人ならぬ人の何人も認むる所なるべし。否な却りてその先天的蓋然性を著しく高むるもの

なり。(而して先天的蓋然性は多くの場合當問題の争點となるものなり。)何となれば吾人は今「神は己れの造れる法則に干渉し給ふや」と問ふ代りに「既に侵害せられたる法則を神は恢復せむと欲せざるか」と問はざるべからず。神の法則を人類が侵害せるは吾人が日常目撃する事實にしてその恐るべき結果は吾人の内部にもあり周圍にもあり。然りと雖も遂にそは宇宙の變則たるを免れず。此事實なくんば宇宙が如何に美しく調和ある秩序となるべきかを思はゞそれが畢竟宇宙終局の目的にあらざるを感せむ。故に神の干渉なかるべからずとの蓋然性は此點に想達して絶頂に達せりと感せずばならず。而して神若し罪を宇宙より拂拭せしめむとするならば何等かの方法を以て罪なき人性を現出せしめざるべからず。宇宙の秩序と圓滿に調和せる人格を降さざるべからず。而して人類の立場より見るときは吾人が宇宙の秩序と不調和なるの度に正比例して罪なき人格は益大なる奇蹟なりと思はる。否實際奇蹟なるなり。蓋し如是の人格と比較すべき標準を有せざるが故なり。隨て此種の人格が存在するに至る條件及び其權力の程度に就きては毫も批評する資格なきなり。

以上の議論は福音書中の奇蹟全體に對して重大なる關係を有す。而して其最初に現れて同時に最大なるものは處女降誕のそれなり。而して眞に此を否定すべき理由は先天的反對論にして内實上の蓋然性なしといふにあらむ。又實際諸種の神話的批評的反對論はすべて此種類に屬す。されど以上の所論を考へなば果して此に内實的蓋然性なきか。初代教會に於ては處女降誕によらずんば罪の五臟を洗滌し得ずと説けり。こは靈肉の關係の密切なるを今日の如く知悉し得ざりし時代の解釋たれど之を今日の知識に照らさば二者の相關作用の結果肉より生れたるものは罪の汚點に染まざるを得ざるを知るべし。否處女降誕によるも猶且全然罪なき人格を生ずることの難きにあらずやとさへ思はる。されど後者の想像は眞を穿てるものにあらず。何となれば尋常の出産が罪の子を生ずることとは普遍的事實なれば疑ふ點もなければ處女降誕は全然吾人の經驗以外にあるが故その結果が果して如何様にや吾人は何等積極的の知識を有せず。此際吾人は只だ臆測をなし得るのみ。而して尋常遺傳的の出産にあらざる處女降誕に遺傳的の汚點を伴はずと臆測するは決して無理なる臆測にはあらじ。

然らば基督教の傳説及び歴史が處女降誕の事實なるを保證する以上吾人は此を破るべき理由を發見し得ざるなり。又尋常一樣の人を生せしむとの目的ならば處女降誕は可能ならじ。されど全く罪なき人格を世に出さんとの目的に基く神子受肉の場合にありては汚點なき肉體と汚點なき聖靈とを必要とするが故に處女降誕は極めて適當なる手段と思はれ其蓋然性も亦甚だ高度のものとなる。唯だ此を否定し得べき理由ありとすればそは先天的の理由なるべし。而して先天的理由とは他にあらず。人性に罪あるを以て其常態となすことなり。されど人性に罪あるは既に曰へるが如く寧ろ變則にして宇宙の秩序を破りたる結果なり。かく考ふるときはかの先天的反對論なるものには何等の根據もなく隨て歴史的傳説は此に復活し來れるものと曰ふべし。かの神子受肉の根底は罪の遺傳を全然打破するにありき。而して神子受肉の手段として歴史の傳ふる處女降誕説も亦精密に同一理由に基くものなり。

次に福音書中顯著なる地位を保てる奇蹟は病氣治療のそれなり。此奇蹟は唯理論者の説明を容れ得るの故を以て多くの人は他に比して信じ得べきものなりと

思ふ。されど此種の想像を如何に逞うするも吾人は到底問題の根底に立ち入るを得ず。キリストの聲明せるは罪惡と病氣との關係なり。病氣と罪惡とは秩序を犯せる一人格の二面なりと言へり。されば彼は赦罪と治療とを同一贖罪の二面なりとなせり。キリストは非凡の伎倆を有する慈仁ある醫師としてのみ現れず。世界の罪を救済し罪の結果たる病氣をも根絶する救世主として現る。彼は地上に於ける罪の支配權を撲滅せむがために來れりと主張し事實上又罪の巢窟なる靈の故障を打破せり。元來靈性の罪惡が肉體中に受胎せるものなるが故に單に愛憐を以て病氣を治療するを以て満足せず全人格に革命を齎らさずば止まざりき。是れ彼の使命なりしなり。即ち肉體上の治療は靈性の治療に比すれば第二次的のものなりしなり。如何なる場合にも彼が病氣を療すとき此態度に出でざることばなかりき。されど病氣を癒やせることも決して偶然的の事業にはあらずりき。彼の事業全體と離るべからざる關係を有せしなりき。彼は靈界の主宰者なれど同時に物質界の主宰者なりき。彼は人の靈性上に絶對の權威を有せしと同時に肉體上にも絶對の權威を有したりき。而して彼は此資格を人々の

腦裡に縷刻せむとの用意を常に忘るゝことなかりき。

更らに進みて宇宙的奇蹟とも稱すべきものに移るも猶同一原理を認め得べし。宇宙的奇蹟とは宇宙一般の物質課程に關する奇蹟にして死者を復活せしめたるものゝ如き是なり。此種の奇蹟はキリストに超人的權力あるを示すものなれば合理的範圍に止り一定の度を越えず。彼は一私人の意を迎へ無信仰の好奇心を満足させむために此を用ふことは斷々乎として拒斥せり。此力を使用するや常に優情慈仁を以て靈の目的を考へ且つ日常の常軌を顛覆せむことを恐れ既に一度奇蹟をなし終るや直ちに日常の常軌と連絡せしめぬ。食物の量を倍重せしむるや直ちに其殘餘を經濟的に使用せよと命するを忘れず。死者を復活せしむるや其友をして此に食を與へ墳墓の壽衣を釋かしむるの注意を怠らす。かくて一瞬時も無益に非實際的に不思議世界に逡巡せしむるを許さず即時に人生の常軌を兩攝せしめたり。吾人にして如是の活畫圖を熟視せば太古の英勇に於て見るが如き前後に無頓着なる、横暴怪異なる行爲とは全然趣を異にするを知らむ。誠に基督にありては超人的權力を有しつゝも、極度の拘束を以て此を使用し自

一四

已は超人的人格なり自己の事業は超人的事業なるを知らしむれば足れりとの態度明白にして疑ふべからず。最後に掲ぐべき奇蹟は復活なり。これ凡べての奇蹟を完成するものにして又初代教會の最も重視せる所なり。或人は曰ふ吾人の信仰に必要なは基督の存在が今日も猶繼續すとの事實にして其肉體の復活にはあらずと。されど此種の立場はそが前立問題たる「イエスキリストは如何なる人なりしか」「彼は吾人の説ける如き有様に罪惡と疾病とを連結し且つ彼の意志は物質を支配し得たりしか」「彼れが罪と死に對して絶對的の主權を有するを宣言し且其宣言を實現せむと契りしは彼の資格上必須の要件なりしや否や」「吾人の知れる人格に於て物質は人格と離すべからざるや否や」等の疑問を忘れたるものなり。若し此等の問題に對し然りと答へ得るならば肉體の復活も極めて重大なる信仰問題となる。猶又基督がその汚點なき肉體を再攝し肉體の能量を無限に増大ならしめ得ざる理由なし。若し此理由として掲ぐべきものありとせばそは全人類の肉體が墳墓に葬られたる後悉く腐爛し塵土に歸るとの事實にあるべし。然れども萬人の肉體

は罪惡によりて腐蝕せられたるものなり。而して基督の肉體は無假定無條件に罪の片影を止めず。吾人は萬人を通じて靈性が肉體を變質せしむるものなるを認め。されど一點の罪なき靈性は否な神の人格は如何なる度まで如何なる有様に肉體を變形せしめ得るやを知らず。但し罪の肉體より罪の斑點を除去せんとするには肉體を分解する外なし。蓋し肉體の改造は只だ肉體の破解による外になかるべければなり。されど全然罪なき肉體に於ては然らず。そはさながらにして靈を再攝し得べきものなり。而して基督が物質に對する態度を通觀するに此種の再攝は最至當最當然なるもの彼の全生涯を完成する唯一の方法たるを思はざるべからず。何となれば復活は人格が罪の統體に對する窮極の勝利にしてその結果たりその原因たるもの全人類の人格を本來の秩序に恢復したる證左なるを以てなり。

第五章 神子受肉説と奇蹟

吾人が前章に於て基督教傳説の一般的辨護を試みたる時論じて曰く福音書の

奇蹟は全文と不離の關係にあるのみならず猶全體として化神説と嚴密なる調和をなす。然るに今日の思想家中には或意義に於て化神説を信じながら奇蹟を非認する傾向あり。彼等は基督教傳説の代りに奇蹟なき基督教を説き以て時代精神に一層よく調和せしめたりと思へり。されど此際記憶すべきことは奇蹟反對説は今日初めて起りしことに非ず基督教の發生以來諸種の形を變へて信經を攻撃したれど信經は毫も此れがために害はるゝことなく此を脱却して今猶儼乎として存在することなり。此に於て今日の反對論も畢竟究局的のそれにはあらで一時的反動の一種、否な既に業に其効力を失ひつゝあるものに非ずやとの疑起る。現代の反對論は主としてスピノザ及びヒュームに起源を發す。彼等は反對論者の有力なる代表者にして過去現在に涉り未だかくの如きものは現れざりき。此に加ふるに近代思想の齊一律を過重する結果は遂に今日反對論の復興を促せり。曰く思想の根本範疇は齊一律にあり、曰く論理學の根底は齊一律にあり。曰く地質學上の根本原則は齊一律にありとかく牽強附會をも顧みず齊一律を有ゆる方面に適用したる結果、自然淘汰の行はれたる時期を無限劫の長

きに引き延ばし、目前の現象を以て無雜作にも過去の標準として充全なるものとなさざるを得ざるに至りぬ。かくの如く俗的論理學者が自然の齊一律を過重し自然の齊一律は證明を要せずまた竊取論點に陥るも妨げあらずとまで極言せるときモゾレー博士は同一立場より奇蹟の可能なるを論證せり。曰く。人が自然の秩序を信する信仰は何等の理由あるにあらざる以上自然の秩序を侵害することは不合理と稱するを得ず。そは吾人の豫期と衝突することあるべきも理性と衝突するものにはあらず。博士の論は有功なる感情論法なり。自然の齊一律を盾として奇蹟を拒斥する論法と對當の効力を有するものなり。元來齊一律なるものは皮相の見にして、そが如何程の眞理を含むかは疑はしきものなり。見よ自然界に於て精密に同一なる二物はなきにあらずや。されば今日に於ては齊一律の價値を疑ふもの多し。此法則中には強いて物事を簡潔になさむとする思想を藏するが故に今日の科學的進歩によりて訂正せらるべき點あり。科學の進歩は未知の範圍の如何に大なるかを知らしめ「天と地との間に哲學の夢想せざるもの」あるを明かにしたれば、齊一に重きを置くことを止めて統一を思想

の根本と考へしむるに至りぬ。宇宙なる語そのもの、中に既に統一の意義を含めり。全體と部分、部分と全體との間に親密なる相關作用ありとの意義を藏せり。そは屢引用せらるゝテニソンの小詩「破堤の花」の中にも含まるゝ思想なり。曰く。

「小さき花よ、もしわれ汝の根と葉と

汝の凡べてを悉く知り得んには

人と神をもわれは知り得なむ」

と。されど統一てう思想は却つて奇蹟の困難を加ふるものゝ如し。何となれば宇宙に統一ありとすれば奇蹟の及ぼす「變更」及び「干涉」の餘波は限りなく大なるものとなるべければなり。されど事實は然らず。そは齊一律は純機械的事實なるに反し統一は本來精神的の思想なればなり。ローヤードコーリヤ曰く「自然界に於て直接に知らるゝ統一は唯だ自我あるのみ。感覺の經驗に於て吾人は統一なるものに接せず。されど精神自家の中には統一あり。精神は比喩によりて此を外界に投出す。」と。此言の眞を認むるは難きに非ず。吾人の經驗中物

質の要素と精神的の要素とを分離する抽象作用は既に統一を豫想するものなり。精神の統一作用を離れたる世界は自他無關係なる流轉現象の連續のみ。新事變新要素が舊事變舊要素を拂拭しゆくは洪水中の波浪の如く又夢裡の幻影の如し。誠に古の懷疑論者が曰へる如く「事々物々は間斷なく變遷し何等恒常なるものあるなき」なり。されば統一は只だ精神の中において外界になし。但し實際生活に於て吾人は此抽象をなさず。習慣的に自家精神中の統一を投出して外界諸變態の複多裡に此を讀入す。感覺に映する諸種の印象音色香味觸の如く相異れるものを連絡し前と後と過去と現在とを結合す。若し然らずば世に過去といふが如きものなからむ。又隔離せる空間に分布せる諸現象を自家の心鏡裡に蒐集し包含して以て比較をなし、元來無聯絡無連帶の諸要素を糾合して統一ある系統中に編み込む。但しかくなせばとて自家獨有の世界を創造するものにはあらず。自家以外に既存せる世界を自家のために改造するのみ。外部に只だ物質のみありとすればそは渾沌たる流動體に過ぎざるべし。されど實は外界にも大精神あり。物質は此によりて秩序ある一系統を作す。原子の結合するや數學的比

例により、星の軌道を駛するや機械的法則を守り、植物界動物界の有機的生命中には幽幻なる目的あり、人類は道德法に指導せられて發達す。かくの如く宇宙は秩序ある一個の組織體にして其要素中には親密なる連絡あり全體は各部に各部は全體に相使役し相使役せらる。而して各部と全體とを結合する連鎖は吾人の精神中に發見するものと相似なる以上其統一が精神の作用に基くは極めて明白なることなり。否な自然の統一てう語そのもの、中に既に精神的意義あり。吾人の知る限り統一なるものは精神の外になきが故物質が統一を作ると考ふること能はず。故に科學が自然界の統一を吾人に教ふることなければ多き程自然界の精神に根し精神に動かさるゝことを確め得べし。而して精神は既に絮說せる如く自家目的の絶對權あるを自覺し自家の主宰權を固執し決して物質に願使せらるゝを肯せず。隨て精神は物質を自家の目的に利用すれど物質は精神を利用すること能はず。若し然らずして精神が物質的動物的の目的を追求しつゝある場合には精神は其本性を失墜し精神にして精神たる能はざるに至る、不正不義なるもの此に於てか生ず。

然らば一方に於ては自然界全體は精神に根し精神に動かされ、一方に於ては精神の第一義が絶對的自家確立に存することの明瞭になれる以上吾人は奇蹟の蓋然性の高調に達せるを認め得べし。かの自然神教の流行せる當時に於ては自然界を以て一度据ゑ附けられて放置せられたる一個の機械の如く思ひたるが故其常軌に干渉するが如きことは殆んど不可能事とせられぬ。誠に齊一律を過重するの弊は此時代よりの遺産に外ならず。されど若し自然界と精神とが最親密の關係にあり精神の特性が上述の如きものなりとせば精神の適當なる目的のために自然課程の變更を受くるは敢て怪しむに足らず。古來奇蹟反對論中には多少に拘らず自然課程を完全に知悉せりとの思想に染まざるものはなかりき。故に奇蹟を容るゝの餘地なかりしなり。然れども自然界に精神的協力者あり自然は精神に指導せらるゝの事實明白となるに従つて此思想の根底は破壊せらる。何となれば一切の因果律は表面如何程機械的なりとするも其基點は結局精神的氣層中に没入するを以て窮極の目的は精神的のそれなればなり。そはヒュームが因果律の解剖をなせる以來益確實となれる真理なり。即ち吾人の本能又は理性の要求する

が如き原因なるものは決して物質的原因にあらず。物理的原因は因果を傳達する前立となり後果となり得べきも因果律の原因そのものとはなり得ざるなり。原因てう觀念は全く自家内部より派生したるも思想なり。吾人は自意識の存在者として自己決定力を有し。自己の理想を作り自己の計畫を案出し又暗示せられたる諸動機を選択して何れを自己のものとするべきかを決定す。此等の作用に於て自己は決して外部より強請せらるることなし。進むで自己の理想を外部に實現し自己の計畫を外界に遂行し自己の目的を外界に追求する時も然り。此際意志はすべての事變の起源となり説明となり「如何にして」と「何故に」との解結者なるが故全課程の基點出發點は意志にあり。故に意志は自ら自己の活動理由を規定するもの隨て自ら自己を説明する能働者なり。日常吾人は一事變の起源に溯りて人間の意志の干渉に逢著すれば直ちに満足す。説明は既に充分なるなり。如何にして其事變が起りしか何故に其事變が発生したるかの絶對的出發點を探り獲たるなり。これ原因なる思想の起源にして又原因なる語の真意義なり。換言すれば原因とは外部の強請力に依らずして自ら事變の基點となり

内部の本質より發生して自己を決定し自己を意識するものならざるべからず。故に原因は精神的なるもの、以外に之を求むべからず。而して宇宙に原因ありといふときは此意義に於ける原因なるが故に宇宙に精神的存在者なるべからず。即ち自己の法則を作り自己の説明をなす意志が存在せざるべからず。中世の用語を籍りて曰へば意志と睿智との同一なる存在者なかるべからず。如上の要項を措き初めて吾人は第二義の原因即ち自然的原因に就きて云爲するを得べし。第二義の原因とは第一義の原因より生じたる因果連鎖全體の一部を構成し聯絡によりて全體の特徴隨て精神的意義の特徴を分有するものなり。されど單獨に此を引離して見るときは因果關係の傳道者媒介者たるに過ぎず。近代の物理學者曰く「吾人は一結果を生せしめし條件の全群を究盡する能はず。抽象的の選擇による所謂原因と稱するものは決して此を生せしむるを得ず又生せしめ得ざりき。吾人が特に指摘し得ざる條件の猶存在するは疑ふべからず。只だ此條件の存在は現象の常態なるが故通例は特に言明せざるのみ」と。如是の條件中最初に掲ぐべきは宇宙が各瞬時に第一原因と連結せられあることなり。

此思想は既に曰へる如く宇宙の統一なる語中に含蓄せられあり。宇宙の存在は神によりて支持せらる。所謂自然的原因の根底たる機械的法則はロツツエの曰へる如く神の行動を律する法則にあらず。各瞬時に神の動作によりて作らるるものなり。機械的法則は神より以前に存在し神が自己を之に應化したるが如き法典にはあらず。神の活動様式の吾人に顯はるゝ詮表形式なり。曰く

「神の雷を轟かすは法則によるなれど
法則は常に神の御聲に外ならず」

と。

ヒュームが因果律に對して否定的批評を企てたるは無意識的に因果律の思想を此意義に轉廻せしむるの媒介たりき。彼の懷疑的結論に止りて安住するは全然不可能事なり。此に安住せば科學と哲學と等しく其根底を失墜せむ。故にカントの一聲は此れが難關を切り抜けむと努力したる結果遂に因果律の核子の結局精神的なるを發見するに至りぬ。されど此思想はカント以前にもありき。否なヒューム以前にマルプランシユは既に驚くべき明晰の言辭を以て因果律の兩面

を道破せりき。曰く

「自然的原因は實は正當なる原因と稱すべきものに非ず。そは只だ偶爾的原因に過ぎずして神の意志の力と働因とによるにあらずんば全然活動し得ざるなり。」

自然的原因の道程はかくの如く神の協力に基き神の勢力の一面は造次顛沛にも活動しつゝありとせば上掲の斷定は愈強固となれり。何となれば吾人は物理課程の全部を到底知悉するを得ず。吾人の眼に映するものは其一部其假象に過ぎざるに、精神は各瞬時に自然現象を發生し機會あり適當なる目的を發見する毎に物理課程を變更せしめ得と考へらるゝが故なり。隨て今日はモヅレーの感情論法を籍り來りて自然の齊一律を信することの不合理なるを説明する要なし。若し其必要ありとせばそは唯だ陳腐なる齊一律の廢墟に立て籠る舊思想の聲に對してのみ有功なるべし。吾人は自然の統一を真理なりと信す。而して各部の間因果關係あるを信す。而も此思想は遂に吾人を導きて精神的氣層中に埋沒せしめざるを得ず。此に於てか不斷習慣的に物質を支配しつゝある精神は時

として異常の方法によりて其主宰權を發耀すと考へざるを得ず。吾人の知れる最高の比喩は人的比喩なるにそは全然此言の眞を保證するものなり。偉大なる人物の日常生活は主義一貫し規矩に遵するが故彼の行爲は測定するに難からず又彼の性格は堅實不拔なりと雖も危機偶發するに及んでは一大刷新を行ひ意表外の動作に出づるの餘裕あり。小器の凡人にありては如何なる場合にも常軌に虜はれて此れを超越すること難く習慣が彼を奴隸使するは痼疾の如し。偉人と雖も自己撞著の行爲をなすものに非ず新目的のために新能力を覺醒するのみ。爾餘の件に於ては規則的秩序的の逕路を履みて違はざること依然として舊の如し。唯彼の有する習慣は毫も彼の自由を累せざるなり。此を自然界に應用するも眞理は變らず。自然界に常軌あればこそ吾人は生活を繼續し知識を拾集し得るなれ。然れども自然界並びに精神界が共に一個の目的に指導せられ其目的は嚴密の意義に於て超自然的ならば自然界の常軌を横斷する精神界の閃光の時々迸發すべきは理の當然に非ずや。

故に過去の經驗にのみ訴へ雜白無雜作の態度を以て奇蹟の蓋然性を否定するは

不當なり。通常普通の經驗に接するの態度を以て奇蹟に接するは不當なり。博士ニユーマンの極力言明せる點も此にあり。吾人は博士の論文の一節を此に掲載する必要ありと信す。

「聰明なる人士が奇蹟反對説として提出する前立的故障を綜合するに多くは道徳法の存在を忘却するものに似たり。彼等は物質的法則を完成せむとする熱心の餘り非哲學的にも最莊重なる一系統を觀過するは惜しむべし。この一系統こそ實に神の意志の存する所を明にするものなるを知らず。さればヒュームは曰く「奇蹟を行へる者が果して全能者なりとするも毫も此れがために奇蹟の蓋然性は増し來らず。何となれば此くの如き存在者の屬性及び活動に就きては自然界の常軌に表れたる彼の活動の結果を経験によりて學ぶ外に何の知識をも得る能はざるが故に吾人は過去の觀察に基き人々の保證する眞理破棄の事例と奇蹟によれる自然律破棄の事例とを比較し以て何れか眞に近きかを判定せざるべからざればなり」と。是議論は奇蹟と全然調和せしめ得べき神の道徳的支配を無視したるものなり。……………近代の著述家中には妖婆妖怪に關する虛構談と

基督教の奇蹟とを同一視し法曹家流の苛酷なる原理を以て奇蹟を吟味し世俗的見解より宗教論を排斥する偏狹皮相なる思想あり。此種の議論家は奇蹟の説明として神力の存在を云爲すれば此を以て非論理的となし未知の原因を掲ぐるもの有名無實の證人を召喚するもの俗間の迷信に左袒するものとなす。若くは有名無實の證據とは思はざるも猶ほ物質的受造物の知識より論じては非論理的なりとなす。要するに彼等は宗教を以て人類の弱點又は知的奇癖に基くもの思ひ道德界に現れたる神の支配の眞解釋なるを悟らず」

かく曰へばとて物質界と道德界とが相矛盾し相對立するものなりと曰ふ意には非ず。物質界も道德界も同一系統中の缺くべからざる要素なるは疑ふべからず。但し此系統を外部より観察し表面に顯はれたる物質的方面のみを考ふる近眼者流に吾人は與せず。更らに其内部に徹底して物相の中心に衝き入り眞相を深く観察せよといふにあり。而してかくするは即ち自家人格の内部状態を深く反省することに外ならず。ブラウニング曰く。

「われは如何なるものを自ら知らず。

されどわれあることのみは明かなり、
われあるが故にわれに快きもの、
快からざるもの、何なるかをわれは知る、
このことのみは確かなり、他は只だ推量のみ、……………
さなり只だ推量のみ、されどわがみの経験は——
再び曰はむ、あゝこれのみぞわれは知る。」

而して唯一の直接知識たる人格経験の根底には道德律宿れり。而してこの道德律は萬物を自己に隷屬せしめむとの無上權を有す。即ち最確實最根本的の經驗事實とは無上の主宰權を有する道德律の外なし。故に物質上の秩序が此道德律の要求に降服するものと思ふは當然のことにあらずや。ブラウニング又曰く。

「奇蹟なくば信仰の路も斷たれぬべき代に
奇蹟の行はれたるは誠に宜ならずや、
世界の表に變化が起れりとするも
之を見る人の心に變化が起れりとするも

何れは問はず只だ神の御旨が
變化を欲したりと知らば足りなむ。」

約言するに同一條件の下には同一結果を生ずといふ意義に於て齊一律を解せば吾人は齊一律を採用するに吝ならざるなり。されど一步を進めて今日起らざる事變は過去にも起り得ざりきと極言するに至りては斷々乎として齊一律なるものを容るゝ能はず。否な、今日起りつゝある事變の條件すら吾人は悉く知るを得ず。況んや幾世紀以前に起れる事變に於てをや。由來事變の條件中には精神あり。否な精神こそ條件の存在と活動とを可能ならしむる力なれ。而して精神は精神なるが故に合理的なると同時に自由なり。されば如何なる基點に於ても變化の原因となり得。此に變化といふは自然と背馳するものゝ意に非ず唯だ吾人の經驗せる自然に反すとの意に外ならず。そはオーガステンが遠き古に「變化は吾人の眼には不自然なれど神には自然なり。」といへるが如し。かくの如く絶対精神が因果連鎖の何れの地點にも存在し活動しつゝあることに就きてロツツエの曰へ所は精密に吾人の所説と符合す。曰く「絶対者を心眼に

描寫するとき外界氣層中の遠隔地に鎮座し受造物界と離れたる一角に靜臥し受造物に來格せむがためには遠地を出發して長路の旅をなさざるべからざるものゝ様に想像すべからず。絶対者は不離の統一性を備へ隨處に遍滿し此空間をも彼空間をも共に填充するものなり。……眼に見ゆる空間中一個の有機的萌芽の形成せらるゝことあらむか、絶対者は其地點に在りて萌芽形成の原因となれるなり。猶又……此種の事實のみが絶対者の活動を假定せしむる原因にはあらず。萬物が生命と精神とを具備するに至れる課程は元より異常異例の事に屬すと雖も、而も此課程をして可能ならしむるに必要な絶対者の力は二原子間の瑣細なる相關作用に於ても均しく必須的に存在す。吾人にして絶対者の存在を考ふるるとき一切空間(殊に地球)に滲透する齊一の氣氣の如く想像すべからず。或は奇怪なる學説の如く物質を諸種の形式となして活化すといふ微妙無形純一なるエーテルなりと様に思惟すべからず。此地球上に於て絶対者は見えざる形ちに於て自然の寶庫全體の内部に遍滿し自己の規定せる活動法則を遵奉し、自家の連續活動に外ならぬ諸要素の交接點に附加物を貼附す。諸要素の

一三二

交接が單純なる場合には單純なる附加物を交接が複雑なる場合には廣大にして價值ある附加物を點綴す。隨處に吾人は絕對者の結果を認め得べきも結果は絕對者が全體中の特殊點に於て實現せむと企てたる前提より生ずるの效果に外ならず。基督教の立場を以てすれば神子受肉は絕對者の活動中最高の事例にして、萬物の背後に潜みたりし彼はかの際其表面に躍出し、受肉課程上の必須要件として世界に對する絕對權威を曝露せるものなり。吾人が神子受肉説を信する第一の理由は道徳的並びに靈的の理由にありき。されど一度此を信する以上は物質的宇宙に對する吾人の態度全體を一變せしむるものなり。蓋し神子受肉は單に人類に對して意義あるのみならず猶又宇宙に對する意義をも有す。そは人類の歴史上に於ける一事たるに止らず、少くも此地球に關する限り物質の歴史に於ける一事變なり。生命の起源、人格の起源に似て而も遙かに高級なる一大事實にして、存在の新秩序が世界に顯現せるものに外ならず。プラウニング曰く。

「人一度此を悟らば、ときわに、
神の存在を一切無生物中に認めむ。」

また曰く、

「なが理性、神をキリストの中に認めなば
地球上地球以外の有ゆる疑問は
そこに解結の鍵を得しなり。」

換言すれば神子受肉を信する人は此を以て哲學上の中心眞理と認めざるを得ず。コペルニカスの天文學又は進化論が宇宙に對する見界を擴大し變化したると同様に神子受肉説を一度攝取すれば全世界を照らす新光明を得たるものなり。神子受肉説は一方に於ては純唯心説に反對して物質は精神の目的を遂行する能因なりと説くが故に物質の價值と意義とを高擧し、一方に於ては純唯物説に反對して物質の價值と意義とが唯だ精神の目的に資し得る能量に存すと説く。故に唯物説と唯心説の排外的否定的要素を驅除すると同時に兩者の肯定的要素を確立するものなり。即ち二者の缺點を補足して長處を一個具象的全體に於て結合するものは神子受肉なりとす。

此見界を以て近代の辯證學者等がさかしくも拮造せる附會なりと考ふるは愚な

り。元來神子受肉説は基督教そのものと同様に古き歴史を有す。但し十八世紀の頃人は否定的の批判にのみ腐心し何等肯定的の系統思想を建設することなかりしが故此教義は歴史上一時堙滅の状態に埋もれ居たれど、哲學の盛なりし時代は何れの時代に於ても基督教哲學者等が宣傳せし所、建設的思想の復興と共に此教義も亦復興するを常とせりき。

或人の曰ふが如く天啓は思辨上の價值なし、哲學は天啓を天啓として考察するを得ず、と説くは餘りに哲學の範圍を限定するものなり。それ哲學は知識の統體を對象となす。即ちプラトリーの語を籍りて曰は、有ゆる時空と有ゆる存在とを冥想するものなり。如何なる種類の事實にせよ此を無視する哲學は自滅に至る外なし。而して天啓ありとせばそは新事實殊に大なる新事實を人類の知識に照介したるものなり。知識の領土に入り來れるものは必然的に哲學の範圍に屬せざるを得ず。故に新事實を無視して哲學系統を樹つる者は新事實を閉却するのみならず暗々裡に此を虚偽として拒斥するものなり。此に反し神子受肉説を一度受け入れて哲學系統を作るときは上述の程度と方法とを以てせざるべから

ず。即ち此を實踐生活の中心となすのみならず思辨の中心とせざるべからず。行爲の羅針盤となすのみならず猶又思想の燈火とせざるべからず。されど或人は曰ふ。奇蹟を驅除したる神子受肉説を考へ得ざるか。此くの如き見界は奇蹟的神子受肉説とは全然異なる世界觀を構成すべきも而も等しく世界の中心思想となり得るに非ずやと。

疑もなく一定の制限裡に於て此種の神子受肉説を作り得べし。されど神子受肉説を信する所以は考へ得るが故に非ず、事實なりしが故なり。神子受肉が起りしとの證明はやがてそが特定事情の下に起りしとの證明たり。然らば先づ一定證明法より神子受肉の一般的概念を得たる後自己の想像を以て此に著色し之を自己流に詮表するは不合理に非ずや。神子受肉を事實と信するならば此事實に伴隨する奇蹟をも信せざるべからず。神子受肉説に對する態度は此外にあるなし。世界觀の燈火たり得るものも此外になきなり。

以上の思想に干連し順序上避くべからざる問題あり。何故に奇蹟は現代に起らざるか、キリスト若し第一世紀に實在せる如く現代に實在するならば何故に古

の如き結果を伴はざるか、吾人が検証の標準とすべきは現代の事實のみ、然らば現代に奇蹟なきは過去に奇蹟なかりし證據にはあらざるかと。此問題は幾度となく發たれたる疑惑にして多數の人は實際此れがために悩まざるゝと多し。されど基督のなせる奇蹟を信するは必ずしも基督教が奇蹟的宗教なりとの意にはあらず。否な事實は此と正反對なり。奇蹟は無比の人格の無比の顯現なり。奇蹟は人の豫期心を迎ふるものにあらずと雖も一度其記録を讀むものはそれが如何によく基督の生涯と調和せしかを知る。彼は超人たりと主張し、其主張の事實なるを知らむと欲せば先づわがいふ所を聴け、注意を緊張し豫期心を昂進し新紀元の曙光を深く腦裡に印銘せざるものはわが曰ふ所を解する能はずと説けり。彼の時代は奇蹟を信じ易き時代なりき。聽衆は奇蹟を以て説教の當然なる手段、避くべからざる方法なりとまで思ひ居たりき。而して基督の生涯の特徴として最も根本的なるは彼れが絶対無制限恒久的の權威を有する點にありき。此權威は之を明示せざるべからず。然らずは新紀元の開始を時代の人に知らしむるを得ざりき。さらば彼が奇蹟を行へるは極めて至當のことに非ずや。

故に以上の見地より見れば基督の奇蹟を行へるは最も自然なることとなる。されど同時に吾人は彼が奇蹟力を使用するとき如何に經濟的に此を使用せるかを忘るべからず。彼は自己の缺乏を補はむがために此を用ひたることなかりき。自然の定則を嚴格に遵奉しそれがため苦難をさへ受けたりき。彼は仇敵を破らむがために奇蹟を行ふことをせず、弟子に警めて奇蹟の畢竟附加物なるを悟らせぬ。又彼は奇蹟と日常の常軌とを連絡せしめ決して奇蹟の故に此を破壊することなからしめぬ。例へば「ゆきて汝を祭司に見せよ」「ゆきてシロアムの池に身を洗へ」「餘りの屑を拾ひ集めよ」「彼は食ふべきものを彼女に與へよと命せり」「釋きて彼を行かしめよ」等の左べての場合に於ては奇蹟を行ふがために知的混亂を起すことを恐れ此れが豫防をなせる底意歴然として疑ふべからず。彼は明らかに律法を破棄し得たりしにも拘らず敢て之を廢せず却りて之を完成し一層強固なるものとしたり。そは彼の教訓の全體を通ずる根調なりき。蓋し彼が教訓上最も苦辛せるは一切自然の定則中に神の意志あり信仰により隨處に神の意志を發見し得るを悟らせしむる點にありき。百合の衣し、鴉の育み、雀の隕つる、

日光の照り雨の注ぐ等凡べての森羅萬象は神の意志なり。亦た疾病も刑罰の手段にして審判の結果災禍も罪の報にして何れも神の意志なり。故に基督教徒の生涯は宿命論者の態度を以て事變の秩序に接せず信仰を以て一切を見るべし。人類に共通なる常道を拋棄せむと勵めず見えざる神を認めて終末まで耐え忍ぶべし。誠に肉眼を以つて見得ざる靈的意義を世界に讀破するは基督教徒たるの左券なり。故に福音書書簡文の等しく意を強むる點は肉眼によりて歩まず信仰によりて歩むべしといふにあり。而して此信仰を可能ならしむるためには奇蹟に憑ることを許さず、奇蹟は消滅せざるべからず。然れども奇蹟の消滅するや旭日東天に上りて其散布せる赫奕たる光線により群小の曉星が消えゆくもの、如く、一時的特發的異例の中に含まれし眞理が日常普通の眞理として基督教徒に受け入れられたるが故ならざるべからず。即ち神の攝理は隨處に顯れ物質を利用して精神の目的に資せしむとの信仰が明らかになりたるなり。昔の如く自然に對するに有ゆる感情を壓殺して窮屈なる態度を取り世界を冷酷殘忍なるものと思ふの弊は一掃せられたり。もしかくの如くは奇蹟が未だ曾てあらざりし昔

に退化せるなり。然らず。奇蹟は新紀元を開けり新光明を與へて事變を解釋せしめぬ。宇宙に於ける神の攝理は之れがために明かになりぬ。「萬物は共に働きてよきを行ひ人をして神を愛せしむ」と是れ奇蹟によりて把住したる基督教徒の意識なり。奇蹟の効果は此眞理を永久に不變に彼等の精神に鏤刻したるなり。故に奇蹟の途絶せるは奇蹟の行はれたると同様に必要なりき。吾人は日常の生活に於て奇蹟に遭はむとは豫期せず。但だ奇蹟は宇宙を照らすの光明たり。その光輝によりて吾人は今日にも猶餘澤を受けつゝあり。吾人は單に受働的の斷念によりて自然と交らず。能働的の信仰によりて此に對す。吾人は自然の機にによりて天啓を認むるのみならず特別な偶然の經驗に於ても天職と使命とを悟得す。但し此種の信仰は實驗室又は法廷に於て立證し得べき性質のものにあらず。否な公衆の面前に於て宣言し得ざる程に特殊的内密的のものなり。而も各時代の基督教徒が常に親める靈的經驗たるや疑を容れず。彼等は外界事變が時として自己の必要に適當なるが如き關係に配列せられ自然界の課程が少くも時々人類の利益のために變更せられたりとの確信を抱けり。如是の信仰は彼等の

生涯に多大の影響を與へたと同時に如何なる批評的攻撃を以てするも此を動揺し得ざりき。只たそれは理論として公衆の前に提出するを得ず。故に或人は「されど何處に其影を留むるや」との語を引用して此を譏ると雖も畢竟事實の前に何の力が之れ有らむ。理論の形式に翻譯し得ずと雖も萬國萬人に通じて經驗せられし事實なり。感情昂進の結果にあらず。蒙昧無知なるもの、迷信にもあらず。知者も實行家も思想家も事務も均しく經驗せる事實なり。有ゆる時代有ゆる國土有ゆる階級の基督教徒は皆物質的精神的媒介を通じて個別的の人格的真理と面々相接觸せるを檢證せり。祈禱の應答として生涯の危急時に外界の事變によりて覺醒せられ指導せられたるは恰も言語により手によりて導かれたるが如く感せり。當時は自然界の偶然現象に過ぎざりしと思ひしも回顧するに及んでそが神の攝理天の使命なるを認め得たりき。

「神のわがために心を勞し給ふはわれに明かなる證あり、其證われには確かなれど、されど

他し人には如何あらむ、

われは飛塵のさゝやかなる中に

攝理の證を無限無量に認む、

此クツスマスの前夜に

神親らの御手、彩の虹を織りなし

天の眞理をわが胸に滑り墮としぬ、

こをわれは確かに信ずれど

世の人の前には告げ得ず。

神は身を屈めてわが靈を癒やし

恰も般雷の聲の中にわが名を呼び給ひぬ。

(他し人は只其音を聞き

只其燭を見しのみならめど)

そは只だわれのみぞ知る、

只だ只だわれのみぞ知る。」

かくの如き特殊的攝理を信するは奇蹟を信すると同一事に非らずと雖も其根底に横はる世界觀に至りては兩者軌一なり。此世界觀の根底は個々の歴史と個別的運命を有する各人の精神は神の人格に對するインテレストの對象たり物質的の自然界は此を正解すれば如是の神のインテレストを傳達すべきものと見るにあり。此思想は基督以前に於ても屢説かれたる所なりと雖もそがキリストによりて鮮明にして且究竟的なる聲明を得たるは争ふべからず。世界を觀すること兒の父の家に對するが如く常に安心を以て故郷にあるの思をなすべしとはキリストの初めて道破せる真理なり。物理学すら此教訓に負ふ所多きは古の人も曰へることなり。何となれば自然に對する親近の情を輸入したるが故なり。されど惜しいかな人は屢此を忘れて大なる謬見に陥ること多し。奇蹟を行へるも歸する所此真理を深く印銘せしむる手段なりき。奇蹟の主意は宇宙が神の所屬なるを感覺に訴へて證明せむとするにありき。キリストの世界觀の信頼すべきを悟らせ攝理と親近の感起さしめむとの底意に出でしなりき。而して自然と親近の感が物理学の進歩を促せしとせばそは系統上キリストの世界觀に負ふ所尠から

ざるなり。約言すればキリストの奇蹟を行へる所以は其内部の真理を傳へむとするにありき。此内部の真理を傳ふる手段として時代精神に一致せむがためキリストは奇蹟を行へるなり。されど今日は外部の奇蹟によらず内部の實驗によりて其真理を日々に檢證し得るが故に吾人の信仰は愈強固となり得るなり。

第六章 神子受肉説と聖典

物質界の外觀が人類に深甚なる宗教的感化力を與ふるは既に吾人の論じたる所なり。されど物質の宗教に對する關係は此に止まらず、猶第二義の意義をなす。そは物質に及ぼす人心の反應より生ずるものにして第一義のそれに比して遜色なき價值有り。例せば生々たる姿、馥郁たる香、鮮麗なる色彩を恣にして野に咲き出でし花は書籍の頁中に挿入せられたる乾枯らびし花に比すれば遙かに美なり。且野の花は人々をして「涙に餘る千々の思」を逼催するものなれど書籍裡の花が其所有者をして過去の愛情を聯想せしめ綱繆纏綿たる情緒を煥發せしむるの魔力を有せず。故に宇宙の美と不可思議とは人類なべてに宗教的の印象

を興ふるものなりと共に特殊の物質は特殊の人に特殊の精神的意義を傳ふ。此れ物質が宗教に及ぼす第一義及び第二義の關係なり。之を歴史に徴するに人類進化の初期に顯れたる宗教に於ては寧ろ第二義のそれを以て顯著なりとなす。古宗教の神話は吾人の第一義のそれに比すべく儀式若くは拜式は第二義のそれに比すべし。而して儀式若くは拜式の甚しく重視せられたるは事實にして或人をしてそれが神話以前に發生せしものにあらずやを疑はしめぬ。兎に角自然教訓の第一義即ち自然の外觀が人心に覺醒する精神的意義を具體化せるものは神話にして特種の場處、現象、事物に多少獨斷的精神的意義を附著し第二義の聯想を保存せむとの企圖より拜式なるもの起れり。

故に拜式は最廣義に於て無限の種類ある儀式及び事物を包含し其威嚴と價値の程度も隨て一樣なる能はず。例せば初代宗教の中には無意義なる拜物教あり。動物を聖物視し祖先又は神として之を拜し、嚴肅なる饗宴を張り、同族相集り肉、生血、又は神の形表を共餐して活ける親交を持續せり、此種の會食より犠牲なるもの、發生せるは疑を容れず。又諸種の理由より一定の場處に對し精神的

畏敬を拂ふの習慣起りぬ。又誕生元服結婚死等の生涯の一定時期を宗教上の潔齋をなすによりて聖別する儀式も起りぬ。如是の習慣は文明開化の時代に進むで醇化せられ高舉せられたりと雖も原理は變らず。粗笨なる偶像は精巧なる彫像に、聖別せられし森林洞窟は輪輿たる殿堂に、同族の會食は文雅なる技工歌謠を伴ふの聖餐式に代り、加ふるに複雑なる儀式を用ひ禮式儀容の莊大なる犠牲を捧ぐるに至れるのみ。印度支那波斯埃及の宗教に就きて見るも文化の發達は決して宗教上の物質的方面を輕減せるものに非ず。但だ象徴と象徴の本體、外部の動作と内部の動機との區別が明瞭になれるのみ。而して此區別の最も明瞭になれるは希臘の哲學者と希伯來の預言者とにありとす。然も理想派の大家たるプラトーンすら靈的修養の物質に所依する所如何に多きかを閑却することなかりき。又かの個人の本務を最も強く説ける預言者エゼキールすら神と人の直接靈交を唱導せるに拘らず、精巧なる儀式と殿堂の象徴主義を棄つることなかりき。要するに基督以前の宗教史に於ては如何なる方面の靈的生活も物質上の形式と無關係なるものはあらざりき。

但し此關係は純然なる迷信に基くものと嘲けられ、萬物を活物と思惟し個々物々何れも靈魂を有すと信じたる原始的野蠻思想に起源を發すと様に解せらる。されど此は進化の原理を曲解せるものなり、發達せる課程を最初現出の狀態に墮落せしめむとするものなり。されど進化の原則として信すべきものは下級の形式は暗黙の裡に高級の形式を包藏し、隨て最初に吾人が考へたるよりも以上の含蓄を有すとの事なり。故に原始人の本能は原始人の説明以上の眞理を含みたりき、彼等の洞察は彼等の解釋に勝れりき。此眞理は直ちに以て目下の問題に適用するを得べし。人は進歩的なるに其進歩の主要要素は宗教なり、宗教の主要要素として不合理なるものは一もあるなし。然るに物靈關係の第二義なるものが宗教上不可缺要素なるは何人も疑ひ得ざる所なり。何となれば吾人の靈を知るや物質の媒介なき能はず、常に吾人は兩者の結合せる狀態を知るのみ。故に原始人は殆んど二者の區別を識別し得ざりき。是に於てか彼等は自ら諸神諸靈と同一世界に生息し諸神諸靈は種々の方法により彼等と關係を結ぶものなりと思ひぬ。されば諸神諸靈の活動舞臺を一定局所に特定せるは自然の理なり。

例へば彼を戰栗せしめたる深林、彼等に畏敬の念を起させし山嶺、彼の生命を維きたる穀物飲料、彼等の友を即死せしめたる電光等は即ち神靈の宿る場處なりと思はれぬ。而してこは空想の戯にもあらず、不條理なる觀念聯合にもあらず。神の存在と動作とを理解する一定階段上缺くべからざる心理作用なり。かく神靈を一定局處に監禁する思想は文明の進歩に隨て途絶し、象徴的表彰の行るゝに至りたる後も原理は變らず、誠に今日と雖も拜物教が其昔バルテオンのアテイチに向ひて揚げたる呼聲と毫も變らざるなり。かくて宗教に於ては如何に物靈二者の離るべからざる關係にあるかを知らむ。

されど神の人に對する關係は宗教の一面にして人の神に對する關係はその反面なり。而して人の神に對する關係も亦物質上の動作に其基點を發す。古代人種の實踐宗教は只だ同族の會食、規定の拜式に遊ぶ祭物の供養、冠婚葬等の儀式、局地聖別の外はあらざりき。此くの如きは靈的行爲とは思はれず、また事實上大部分まで靈的行爲にはあらざりき。プラトーンも曰へる如く一切の外部的動作は非哲學的俗習なればなり。されど物質は靈的生命を知らしむるの媒介なりき。

物質の作用によりて意志の反應は覺醒せられ宗教は具體化せられたるなり。如何程不明瞭に認識せられ居りしにも拘らず彼等の日常生活は結局靈的にして將來大に發展し得べき可能性を有したりき。而して靈的生命を保存し得たるは物質的の動作に依れり。又此等の動作は卓越せる頭腦の人をして一層高級なる思想と行爲とに到達せしむべき踏石となれり。故に宗教上の信仰及び實踐を物質と聯結せしむるを以て迷信なりと不合理なりと様に説くものは大なる誤謬なり。靈を解するに物質を通じてする外に道もなき世界にありては此聯結は心理上の必然に基くものなり。元より物質の背景にある靈的宗教の墮落せる場合に於ては幾多の迷信を俱發すべし。而もこは兎にも角にも宗教の進歩を可能ならしむる唯一の方法なり、唯一の自然法なり。加ふるに吾人は過去の一事例を掲げ來りて何處に迷信が生じ何處に進歩が阻害せられたるかを指點する能はざるなり。何となれば今日吾人は遠き昔の知識道德と同一平面上に立ちて精確なる推理をなし得ざるが故なり。

一例を挙げればベテルに於てヤコブが天國を夢み石に油を注ぎたる場合の如し。

石に油を注ぐことは一時全世界に行はれたる習慣にして今日と雖も其紀念物は何れの國にも存せり。但し此習慣は後年純然たる迷信に墮落しぬ。然りと雖もヤコブの場合に於ては宗教心深き一人格をして深き感動を觸發せしめたる靈的危機と密切の關係あり。吾人をして此種の習慣の下に如何に多量なる意義を藏するかを悟らしむ。誠に舊約聖書には此に類する例多し。近代人類學者の説によるに割禮、逾越に血を流す例、替罪羊を放つ習慣の如きは地上何れの場處にも行はれし祭典にして、知的には極めて素朴的思想より發生し來れるものなるを知る。然りと雖も舊約聖書に現れたる此等の祭典は明々地に深遠なる靈的意義を藏し眞正の宗教進歩に多大の貢獻を與へたるものなり。此くの如きは元より最顯著なる事例なりと雖も此れに類する實例は何れの地にも發見し得べし。今日博物館に葬られて考古學者の興味を惹くに過ぎざる多數の紀念物は曾ては靈の象徴たりしもの多し。何人かの靈生に起りし悲劇と不離の關係をなし宗教上の希望恐怖其他有ゆる情緒興奮の具象たりしもの多し。

由來有形物に附著せる靈的意義は主觀的且多少專斷的の觀念聯合に基くものと

一五〇
考へらる。然れども主観と客観とは言語上之を分離し得べきも事實上分離するに難きは既に曰へるが如し。かの實在といふも人格若くは諸人格に恒常的の關係あるものと定義するを以て最も妥當なる解釋といふべきならば吾人が隨處に潜在すと信する神を特殊の人が特殊の場處にて特別に明らかに認めたりとせば、その人にその場處にて神は實際顯れたるものに非ずして何ぞや。かの人の全生涯を此事實によりて一變せしむるが如き善果を齎らせしとせば如何なる意義に於てその際の神の現在を實ならずと曰ひ得べき。元より神にして宇宙の隨處に遍滿するものに非るならば事態は一變すべし。然れども神は無所不在なるが故に一切空間一切時間のうちにあり。故に特殊場所特殊時間に於て神を認むるは空想に非ず、事實なり。神は彼地彼時自己を顯し自己を認識せしむるの原因となり得たるなり。人或は神の普遍的内住と神の特殊的顯現とを以て不兩立なりとなす者あり。されど兩者は決して矛盾するものにあらず、却りて一は他の自然且つ必然なる豫想なり。誠に神は一切空間に在すが故に何れの場處にも顯れ給ふを得べし。然るに人は一切空間に遍滿するを得ず特定時空裡に制限せ

らるるが故に人の神に對する關係は只だ特定條件の下に實現せられ得べきのみ。曰く、

「地は天に蔽はれ、

藪といふ藪に神の焔の燃えぬはあらず、

されど神を見る人のみぞ靴をば脱げ、

他し人は藪の繞り憩ひて黒莓を摘み喰ふ間に、

いつとは知らず天の姿を汚して、

生來の面は日にけに黒すむ。」

若し世の宗教にして真理を藏するならば、若し神の人に對する關係が何等かの形式に於て存在せしとせば、精神は必然的に物質を藉りて自家表彰の器となさるべからず。而してこは神子受肉の教義の辨證論として新たなる根底を與ふるものなり。蓋し精神が自家表彰の具として最も完全なるは人體なり。神若し人との交通を望み給ふならば當然最完全の機關を通じて交通し給ふならむ。故に此見地より見るも神子受肉は前立的蓋然性を有す。而して既に論じたる如く

一度此蓋然性を容せばキリストの生涯こそこの蓋然性を完成せしめたるものなるを知らむ。

然らばキリストの肉的生命は神の人に對する關係と人の神に對する關係とを眼に見手に觸れ得る形式に於て詮表したるものなり。此二重の關係を物質的媒介によりて實現せむとする欲望は人類本能の要求にして文化の何れの階段に於ても認め得べき所遂にキリストの降臨によりて批准せられたるなり。此れと同時に物質は未だ曾て有せざりし靈の内住と表彰力とを得て其位地著しく高擧せられぬ。第一にキリストの生命は人體に新たなる光明を與へたるものなり。血と肉との人體はプラト―すら靈の獄屋と稱へたるものなるに、キリストによりて靈の機關として完全なるものとなり靈の親しき協力者となりぬ。何となればキリストの肉體はキリストが人類と交通する具たりしのみならず其出現する處には到る處恩恵を與へ其觸るゝ所疾病を癒し其涙は同情を語り其言語其視線は愛、警告、義憤の象徴たりしが故なり。されどキリストの肉體の必要は猶此に止まらざりき、キリストの生涯と事業とはその肉體と分離し難きものなりき。彼の誘惑は

肉體に克つことゝ分離し難く、疲勞の肉體に鞭ちて東走西奔するに非ずば善事をなし難かりき、また苦難を預見して而も此に面迫し、疼痛を忍びて慈愛の語を垂れ、最後に十字架上の死にさへ遭ひぬ。是等肉體上の動作はキリストの品性を顯すものなりしと共に品性そのものゝ一部なりき。彼の品性を塑像形成せしものゝ中には確かに肉體の努力緊張ありき。故に肉體が肉的生命の器として内部生命の發育を補佐する機能は蓋し尠きに非ず。かくの如く肉體は聖き人格の進歩發達を阻害するものに非ず、却つて其缺くべからざる要素たるなり。

第二に考ふべきは自然及び外界に對するキリストの態度なり。キリスト曰く神は世界に遍滿し天は其寶座にして地はその脚臺なりと。又曰く天の父の許なくば一羽の雀も地に隕ることなしと。是は神の慈愛と庇護とを自然裡に認め得べしとの意に外ならず。又曰く「天空の鳥を見よ……………爾曹の天の父は之を養ひ給へり」「野の百合は如何にして長つかを思へ」「神は野の草を如此裝はせ給へばまして爾曹をや」「神は善者にも惡者にも日を照らし義者にも不義者にも雨を降らす」。かくの如く物質界を瞥見するとき自ら吾人の心に流れ來る自然宗教

の感はキリストの教訓の出発点にして根底なりき。これ物質の宗教に於ける第一義の關係なれど、第二義の關係即ち有形物に靈的意義を投入することも亦キリストの忽にせざりし處なり。鹽、光、莠、芥子、酵母、貴き眞珠、羊欄、葡萄園、收穫、夕陽、又東に西に閃く電光等を捉へてキリストは常に此を靈性修養の話題となし給ひぬ。是等日常の現象もキリストの唇頭より傳へらるゝや靈界の消息を傳へ天上の芳香を放つものとなりき。凡べての物質現象は深遠なる意義を有し靈界の象徴とならざるものはなきを明示せられぬ。蓋し萬物は創造主より出でたるものゝ一精神の顯現様狀なるが故に宇宙てふ大規模の向上的階梯は一段毎に創造の課程を反覆するもの、下級なるものは高級なるものゝ雛形となり、其意義は最高級のものに達して完成せらるゝものなればなり。「一疋の蠅すらケラピムの雛形たるを失はず」。綠草の衣し鴉の育くむは人類が衣食する雛形なり。キリストの弟子は地の鹽、世の光、收穫に働く者、人を漁る者なり。何れも平面は異れりと雖も其官能は全然同一なり。最後にキリストは自ら眞の葡萄樹、眞の糧、眞の世の光なりと曰へり。而して葡萄樹、糧、世の光に似たりと

は曰はず。言はキリスト自ら此等のものゝ意義を完成する絶対眞相なりとの意なり、此等は自己の領土に應じて部分的破片的の意義を傳ふるに反しキリスト自らは無上完全の眞相なりとの意なり、キリストは靈の生命、世の光りなりと同時に、一切物質に營養を與へ光輝を送る眞個の源泉なりとの意なり。かくの如く主は象徴的言語を用ひたりと雖も象徴的行爲を用ふることの多かりしも亦此れに劣らず。主は洗禮を受け齋を注がれ又手を伸べて癩病人を癒し吐息してエツパタ「啓けよ」と曰ひ、唾して粘土を解き替者の眼に塗り、身を屈めて地にも書き、眼を擧げて天を仰ぎ、細き繩をもて鞭を作り、弟子等の足を洗ひ、弟子等に息を吹き入れ、兩手を扛げて祝福し給へり。又十字架上の死は永遠に至るまでの活畫にして其深遠なる意義は此畫を仰望する人をして直接に肉眼を通じて悟得するを得しめ如何なる有様に於て主が死に遭ひ給へるかを強く印象せしむ。最後に主は聖典を設定し給へり。聖典は最單純最普遍的最象徴的の宗教儀式にして聖洗式と聖餐式とより成る。聖洗式と聖餐式とは全世界に通じ至宗教に共通なる慣例なり。キリストは此二聖典を復興し高擧して最純

最高形式と醇化し以て聖典と自己とを不離の結合體となし給ひぬ。茲に至りて物質は靈の資料たりとの法則は其究極の批准を得たるものといふべし。物質が靈の資料となり宗教的意義と含蓄し進歩發達の利器となり迷信と退歩との媒介者たらざるは如何なる條件によりて然るか。此れが解結は主キリストの生涯を觀察するに如かず。キリストの生涯は常に靈を物質に隷屬せしめざるを以て則となせり。肉體を靈の奴隸とせざるこれ彼の生涯に一貫して變らざる主義なりき。「人はパンのみにて生くるものに非ず」「われを遣し給へるもの、旨を行ふこれわが糧なり」。こは明らかに肉體を靈の具となすの原則に非ずや。此原則に反し肉慾を目的となし肉は只だ器具たるに過ぎざるを忘れなば肉體は靈の機關たる能はず却りて靈を監禁する獄屋となり靈の墳墓となり了らむ。否な遂にかゝる人は靈の特長たる自己決定力を失ひ外部の規定するがまゝとなり唯物論者の信するが如き機械的自動機（機械人）と墮落し終らむ。

キリストの用ひ給へる教訓上の比喻に於ても然り。其文字に拘泥し此に超越せずんば見れど悟らず聞けど解せず只だ殺す儀文の如きものとならむ。比喻の中

靈の含蓄なきものはあらず。靈の意義を採らずば比喻は不可解なり。キリストは自ら善牧者なりといひて善牧者に似たりと曰はず。言はキリストこそ善牧者の真相にして世の牧者はキリストの假象に過ぎず。されば彼等はキリストの前に立つとき無價値のものとして消え失せむとの意なり。又野は熟きて收穫を待つ句を讀むとき吾人は眞の野、眞の收穫を思はざるべからず。爾曹は地の鹽世の光なりと曰ふときも然り。キリストは地の鹽の如しとは曰はず世の光りの如しとは曰はざりき。儀式に就きても同様なり。「安息日は人のために設けられ人は安息日のために造られず」「活かすものは靈なり肉は益なし」「わが爾曹に語れる語は靈なり生命なり」と。

此くの如く有史以前よりの人類一般の思想たりし物靈結合の宗教原理はキリストの實行摸範及教訓によりて確乎不拔の批准を得たり。而して物質を靈に隷屬せしむることのみが此結合を正當ならしむる唯一條件なるを教へられぬ。

此條件に従ひて初めて二者の官能は誤りなく遂行せらるゝものなるを教へられぬ。吾人は此教訓が基督教の歴史に如何なる影響を與へたるかを尋ねむと欲す。

第一に肉體に對する態度の變化是れなり。基督教以前にありて肉體は理論上輕侮せられ實踐上放縱放恣のまゝに置かれ甚しきは靈性の仇敵とまで考へられぬ。基督教は此態度を一變したり。彼は偽哲學者の輕侮心を拂拭し肉體は靈の殿なりと宣言して此に無比の威嚴ある地位を與へぬ。又一方には同一理由によりて肉體に對する相當の尊敬心を鼓吹し節制純潔端嚴の徳を獎勵し放縱不羈の生活を蔑みせり。かくの如く基督教は人格の他の諸要素を統一せる如く靈肉を統一して基督教以後の道德思想に一大變化を與へぬ。肉體は不自然なる獨立を拋棄して本然の作用を遂行するの器となりぬ。肉體既に柔順の態度に歸りたれば靈は自由を恢復し肉體を圓滿完全に使役し得るに至りぬ。元より靈肉の理想的調和に到達せむかために奮闘努力の時期を經過せざるべからず。而して努力は時として極端に趨りて所謂禁欲主義の弊に陥らざるを得ず。然れど若干少數者が極端なる禁欲主義に陥りたりとて直ちに基督教一般の善目的を疑ふは非なり。基督教の主旨は靈肉の調和にあり、兩者の關係を昔日の正當なる状態に歸し、肉體をして神聖犯し難き靈の衣として靈に仕へしめむとの外にあらず。故に初代

基督教徒は肉體の舉動動作を慎み端嚴、靜肅、及び恰好よき姿勢、身振、清明たる音聲、清洒たる服裝を尊べり。即ち靈性の眼に映つる外形として品格好き儀容を貴べり。また此思想が復活の希望によりて高められ、死屍を取り扱ふに畏敬温情の念を増したるは今更ら附言する要なし。かくの如く基督教によりて肉體は人格中の地位を高め最奧自我と密切なる關係を保ち、道德宗教一切の方面に於て靈と相混滑融和する状態にあるものなるを明らかにせられぬ。

次に聖洗式聖餐式の起源をなせる聖典組織に就きて考へむ。是等は發生の當時に於ては今日の如く精巧なるものにあらざりき。猶後代の爭論を引き起せし如き定義と細別とは初代教會になかりし所なり。然りと雖も此二聖典中の物質的要素と靈的要素との間の密著なる關係は初代基督教徒の意識中にも猶分明なりき。初代の師父等が聖洗式を論ずるに當りては必ずその水に論及するを忘れざりき。或は「道と結合せられたる水」といひ、或はクレメントの如く「祝福せられし水の聖典」といひ。又タータリアンの信仰に従へば此水には固有の天使あることペテライダの水に於けるが如しと説かる、タータリアンの聖洗式論は主とし

一六〇

て水に就きて絮説せるため「余は聖洗式の主旨を説くよりも寧ろ水の讚美に全力を捧げたるに非ずやと恐る」と言へる程なり。オリヂンは一度水を象徴と呼びたることあれど彼に於てもそが象徴以上たりしは明白なり、靈物によりて滲透變質せられたる象徴なるが故に既に一個の聖物たるを失はざりしなり。聖餐に於ても同様なり。イグナシウスは「われ等の教主イエスキリストの肉」と呼べり。殉教者ヂヤスタンは「こは尋常の糧と飲料にはあらず……受肉せなるイエスの肉と血なり」と。イレニウス曰く「既に尋常の糧にはあらず。地上天上の二物より成る聖餐なり」と。タータリアン曰く「若し杯より又は糧の中少量にても落下することあるときのわれ等の心痛は如何ばかりぞや」と。元より以上の引照は初代教會の教義を精密に代表するものにはあらず。然りと雖も聖餐の物質的要素を聖化せられたるものと考ふる思想が如何に早くより教會内部に現れたるかを示すに足る。聖典に對する思想は肉體に對する思想とよく調和するもの、水葡萄酒パン等の物質は靈の祝福を傳達する運搬器として嚴かなる地位に高擧せられたるなり。同時に忘るべからざることには此等の物質にして靈と連絡

するに非んば全然無價値無意義ならむとの思想の聲明極言せられたることなり。されど此聖典は基督教の獨創にはあらず。そが基督教以前に長き歴史を有したるは他の諸儀式と異らず。其起源を溯れば原始人の間にすら行はれたる儀式なり。元より太古に於ては極めて簡單なる形式の中に行はれしと雖も時代の推移と共に順次祭典風の調を帯び來り、いつしか猶太希臘羅馬の拜式と結び付き、特定の作法態度法衣聖誦什器、行列宗教的音樂香聖油燈火等を伴ふに至りぬ。現代の思想を以てすれば此等隨伴物の加はれるは寧ろ退歩墮落と目すべく基督教の靈的宗教より猶太教の物質主義に復歸せるものと考へらる。元より一切宗教は通俗化すると共に墮落し易きが故に基督教の聖典が一般に採用せらるゝに至りて多少退歩せる點もあらむ。されど何れの宗教と雖も物質方面を備へざるべからざるは必然の理なり。かの物質方面は宗教の體とも稱すべきものにして宗教の發表顯現上缺くべからざる機關なり。此を以て原始時代より物質方面を伴はざる宗教は一もなかりき。古來幾多の宗教起り幾多の宗教滅びたれど一として此の共通の嗣業、此儀式上の遺風を傳へざるものはなかりき。よし何程靈的に如何程

改善的に如何程高踏的の宗教なりしとするも太古以來の遺物たる此形式を用ひざるものはなかりき。故に全世界全人類全階級に傳播せる基督教が此一般法則の除外例たらざりしは元より當然のことなり。加ふるに神子受肉の教義は物靈統合の原理に究極の批准と辯護とを供給したるものにして靈的真理は物質的形式を以て體現せざるべからずとの理を極點まで承認したるものなり。若し宗教が靈以外の何物をも採用せずして成立することが可能ならば、若し基督教が此る宗教なりしとせば、後年に至りて聖典組織を入れたるは元より墮落なり。然れども神子受肉の教義を根本とする宗教は靈のみを以て足れりとするものにあらず。基督教は最初の出發點より聖典を用ひて發生し來れる上にその本質上根本的に心髓に徹底する迄聖典主義の宗教なり。何となれば神子受肉の教義そのものが既に聖典にして諸聖典の心髓なり總括なればなり。神學者輩が聖洗式聖餐式を以て神子受肉の教義の外延に過ぎずといへるは修辭上の比喩にあらずして文字通り精確なる真理なり。見えざる靈の網に包圍せらるゝ此等の聖典は肉體の聖化を以て人格の不可缺少要素なるを教ゆる手段なり保證なり。而して是は又神子

受肉の教義が教ゆる所の外ならず。既に聖典が一度制定せらるゝや歴史的進化の法則に従ひ既成の諸儀式と聯結變更せらるゝや勢の然らしむる所、是等の聖典は既成の諸儀式を破壊せむがために生れたるものにあらず是を完成せむがために現れたるなり。かくの如く聖典組織の發生は歴史上の必然に基くものなるに時として宗教的唯物主義に墮せしことあるは否むべからず。而も道肉體となれると同時に開始せられたる、物質界を神の御手に恢復せむとの大事業上必須の條件たりしは争ふべからず。

次ぎに議論上の順序として説くべきは基督教が藝術に與へたる影響なり。藝術と宗教との關係は有史以前に始る。曰く。

「無學なる畫家はアイシス（希臘の農業及び美術の女神）に育まれざるべからず」と。

教會が猶洞窟中にありし當時既に藝術は基督教の内部に侵入し來れり。されど教會と藝術とが公然提携するに至るまでには激烈なる争論なきを得ざりき。聖像破壊者の一派は危険を豫想して大なる反抗を試みたりき。清教徒にも劣るま

じき彼等の謹嚴なる態度は吾人の尊敬を禁じ得ざる所なれども事態の性質上彼等は失敗に終るべき運命を有せり。吾人が先きに物質に就きて論せし所はそのまゝ以て藝術論に適用するを得べし。神子受肉の教義は藝術の發達を以て物質界教劑の一部にして物質を靈の使役に回復する事業の必要なる條件と觀す。故に基督教の大なる美術品は凡べて物質美を靈の使用に隸屬せしむるを以て特質とせざるはなし。元より基督教の藝術一切が大作なりとは曰はず。宗教衰頹し趣味墮落せる時代に於ては血塗りの十字架、殉教の寫術的畫像を出せることもありき。此の如きは基督教の眞精神を距ること遠しと共に非藝術的の恐ろしき作物たるを免れず。又藝術の大作品が凡べて基督教の製作なりとは曰はず。近代語を藉りて曰へば藝術は藝術のために存在し、色彩形式印象等を以て目的とするに反し、これ等を唯だ手段とのみに觀るに非ずんばそれは基督教的の藝術と稱するを得ざるなり。されど神子受肉の教義が藝術に新生命を吹き入れ人類の情操及び思想に新たなる力を與へたる一事に至りては遂に蔽はむとして蔽ふべからず。第一に掲ぐべき例證はゴシック式の大伽藍なり。

「永劫に聳ゆる巨厦、神の樹てたる靈の教會の型……………」
 飛法の散る處、愚人の跳るが如き泡の消ゆる處、浪の隨を跨ぐ處、
 畏敬の念に打たれたる知慧の花環は耻らひに頭を垂る。」
 靈の限りなき向上により一階一階とせり上ぐる間に石も頑陋の本性を失ふが如し。

「活ける技術により本能は心情を醒まし意志を覺まし赫奕の梯子に絶りて上なる世界に翔りゆくなり。」
 ゴシック式の建築に於て靈が物質を屈從せしむる作用は此種の作用中最も顯著なる例なるべし。何となれば此際屈從せしめらるゝ物質は最も頑強なる性質のものなればなり。されど基督教の繪畫を例とするも原理は變らず、只だ繪畫に於ては一層精巧なる藝術を見るのみ。シマビユウ、ギオットー及び彼の門下生は刷毛と筆とを捧げて基督教に仕へ、繪畫技術の地位を高め此に威嚴を加へたるものなり。加之彼等は藝術中に新意義を發見し、靈性最奥の秘義を可感的具象中に投入し靈性表彰の新方面を世に照介せり。

「此上に何を望むか」との希臘藝術の叫びに
古の畫家は答へて曰く「今は自己を知るべき時なり、
人を人として畫かば、結果は問はず、
希望新たに起りて擦り傷の間より輝き、
恐怖新たに起りて内なる汚穢と破綻とを大にし、
見えざるものを光明の中に齧らさば、
見ゆるものを犬に投げ與ふるも、
亦可ならむのみ。」

音楽に於ても同様なり。否な音楽は基督教に特別の關係ある藝術なり。これが準備となれる太古の歴史は問はずグレゴリー時代よりハンデル、バッハの時代に至るまでの音楽の顯しき發展は全然新機軸を出せり。而して此時代の音楽は基督教の禮拜より發生し基督教に靈化せられ基督教の藝術家によりて改善せられ基督教の使用に供せられぬ、かくて音楽は藝術中最も完全に物質を靈に隸屬せしめらるものとなりぬ。蓋し音響が不可見の氣層中に游泳し行くや殆んど物

質と考へらるゝを得ず、又其の吾人に及ぼす反應の不可見的なるはそれが物質機械より出でしものなるを忘れしむ。斯くの如く非物質的にして浮動的なる空氣の振動が音楽家の妙手に捉へられ彼の魔力によりて變質せらるゝや、かの物質的制限は此の際全々破碎せられたるが如く思はる。靈の躍動する所何處にも自由な音楽は追従し得るなり。何の歡喜か斯くの如く恍惚、何の悲哀か斯くの如く深酷、何の猛動かかくの如く悍悍、何の情欲かかくの如く強烈、何の思、何の情か、此くの如く切實なる。あゝ音楽のみよく此をなしうるなり。音楽は生命一切の活動を傳播し戰慄と鳴動の間に此を開展し此を翻譯す。物質は此に至つて活動の極點に達せるなり。物質は遂に音楽の制限を越へて靈界に遊ぶを得ざるなり。ヘーゲルガ物質は音楽に於て時空を超越すと云へるは此の意味なり。

「憐れ主よ、
語ははなたるれば消へて跡なし。
深き哉悔恨の呻吟、
鋭きかな其の悲鳴、

されども又消えて跡なし、
我が靈叫びて悲しき悲しき我が悶へかなといふ
而して言葉の力は其處につきたり
されどペートーベン此所に来り
力なき幽囚の身の言葉を抜け
此を新にし此を自由にし此に活力を興ふ、
此所に言葉は能力ある舌の上に移しうえられ
自由の翅にのりて全心全靈を注ぎ
哀なる全寶を傾けつくす、
音楽の技術ギョウによりて悔恨も熱情も
永遠に生き永遠に燃えて
自在自由に馳せめぐる。
辨れ主よ、

諸種の藝術は發達するに従ひて獨立し古の如き基督教の禮拜との關係は途絶

せられ基督教の信仰によりて抜けらるゝことなし。もし藝術にして俗化すと稱し得べくば斯くの如き状態は正に俗化したるものなるべし。されど藝術は其の本質上遂に神聖なるべきものなり。元來藝術は聖所に生れ神聖なる目的のために用ひられたるものなり。今日吾人の有する藝術にして基督教に起原を發せざるものはあらず。只だ今日の道德が信徒未信徒の何れにも行はれ又屢俗間より發生せるものなりと様に論せらるゝことありと雖も由來道德は基督教より生れ基督教徒の聖生涯によりて發育せられ基督教徒の感化力によりて強固になれるなり。藝術と基督教との關係も亦かくの如し。
かくの如く神子イブ受肉イブの教義に立てる宗教は一方に於ては肉體の地位を高め一方に於ては聖典及び藝術によりて物質に新なる意義を加へ限りなく其の威嚴を増しぬ。そは此の物質界を刷新して神の王國の領土となし聖徒の生息するに足るべき地たらしめんが爲めなり。

故に聖典及び藝術が宗教に與ふる効果は外界自然の外觀が宗教に及ぼす感化と同一原理に基く。換言すれば物質界に於ける宗教的感化力を有意的意識的に集

中局中するものに他ならず。恰かも熱、光、電氣等の自然力を故ら局中して吾人の實用に供するが如し。

従つて藝術及び聖典の靈的感化力は其の實在性に於て自然の感化力と異らず。即ち何れも客觀的實在性を有す、たゞ前者は後者に人爲的集中作用を加へたるのみ。既に云へる如く自然の宗教的感化力は遍在せる神の自現によるものにして決して吾人の主觀的情緒に基づくものにあらず。而して遍在せる神を一層明瞭に吾人が意識せんとする方法はインスピレーションを受けたる天才の藝術上の作品によるか又は一層嚴かなる手段により基督の親しく制定したる聖典組織を以てすべし。カーライルは藝術を以て時間を通じて現はれたる無窮の存在者と云ひ、ニーマンは音樂を以て愛造物たる音響の媒介によりて傳達せらるゝ無窮永遠者の調和なりと稱せり。又ブラウニングは

「一切の法則を造り其の背後に存在せる全能の意志！

其の意志の閃火は見よ靈樂の中に宿れり」と。

かくの如き文字は單に修辭上の空言にあらず。そが眞面目なる人々が共通なる

確信を現はすものなるは斷々乎として疑ふべからず、科學は物質界の法則を創造せず、只だ此を發見するものに過ぎざるが如く、藝術は靈界の眞理を創造するものにあらずして只だ此を顯明するものに他ならず。宇宙には靈力ありて吾人の智能を啓發し、吾人の心情に點火し、吾人の意志を刺撃す。而して藝術上の天才は此の靈力を傳達する器物の一つなり。

藝術に就きて云へる所は聖典にも適用し得べき眞理なり。而して聖典に於ける物靈二者の相關作用に關しては古來諸派の神學者間に幾多の爭論起りしと雖も吾人は此れが明瞭なる定義を下し得ずと考ふ、否な定義するの必要なしと考ふるものなり。何となれば吾人の人格中に於て物靈二者の如何なる關係によりて結合せらるゝか又二者の究竟性は如何なるものなるかを全々知らざればなり。而してツウイングリーの説を一方の極端となし、トレント會議の決議を反對の極端となし、その中間に介在する無數の神學説は凡て此の問題を爭點とせざるものなし。然りと雖も此の問題の解決如何に關せず何等かの方法により基督自らと吾人とを結合交通せしむる手段として基督自ら聖典を撰定し制定し給へる事

實は疑ふによしなし。若し聖典にして吾人の專斷によりて選擇せられたるものならんには此を象徴に過ぎずと稱するも或は可ならん。されど歴史の證明するが如く決してそれは專斷的の發明によるものにあらず其の背後には人類發生以來の古き歴史を有し全世界に普遍なる習慣として廣く行はれ其の起原を溯れば遠く有史以前の時代に到る。斯くの如く原始時代より行はれし儀式が何故に價値あり何故に實在性を有するかと云ふに、神は全世界に遍滿し何處にも現在するが故に、又如何なる時にも在さざる時なきが故に、特種の場所特種の時間に於て神を發見し得べしとの根本原理に基づくとせば、基督教の聖典は最高度に於て實在性を有するものならざるべからず。加之基督教の聖典は神自らの命令によりて制定せられたるもの吾人の人格が神を要求する場合に於ては隨時隨所に人格的應答を與へらるべしとの神自らの約束によりて成立し、更に進んでは神の定め給へる特種の時間と特種の場所に於て神自ら進んで吾人に來格し給はんと約束によりて固うせられたるものなり。此を以て吾人基督教徒の立場より見れば聖典は物質界と無上實在即ち人格神との結合を解するの唯一方法なり。又一方

に於ては聖典の形式が洗身と食事にあるを以て最も簡單なる肉體の要求に應ずる事を表はし吾人をして肉體も亦全人格中の不離の要素なるを悟らしむ。眞に肉體の使命は「肉となれる道」と結合するにあるなり。

第七章 神子受肉説と三位一體説

前章に於て論せる所は神子受肉説の辯證論にあらず。この目的を以て筆をおこせしならんには一層精密なる議論に立ち入りて研究せざるべかりしならん。されど吾人の主意とする所は神子受肉説そのもの、辯論にあらずしてその一面の眞理を辯護し且つ聲明せんとするに外ならざりき、即ち神子受肉説と自然哲學との關係、(換言すれば自然界に於ける神の内住に對する吾人の信仰との關係)を明にせんとするにありき。而して宗教上の教義を哲學と關係せしめて論ずる時には常にそが單に哲學的、即ち思辨的の議論、智的の説明法、非實質的の空中樓閣と思はれ易き危險に陥る。殊に近代に於ては二重の危險あり。何となれば近時基督教を攻撃する人々の間に行はるゝ普通の思想は神子受肉説を以て三位

一體論との關係上信條の辯護の爲めに捻出せられたる形而上學の空論に過ぎずとなせばなり。是を以て吾人の採るべき安全法は神子受肉説及び三位一體論の實踐方面を指摘し且つ其の起原も全然實踐的なりしを明るするにあり。是は一面に於て吾人の既に論せし所の議論に堅固なる根據を與ふると同時に一方に於ては論者の攻撃を破る所以なるべし。

ポアティアの聖ヒラリー曰く「爾等行きて萬國民にはバプテスマを施し之を父と子と聖靈の名に入れて弟子とせよ」と命せし神の語を聞かば忠信ある人々は直ちに満足すべし、されど悲しいかな吾等は異端論者の反對説により爲すべからざる事を爲し、昇り得ざる高嶺に昇らむと企て、云ふべからざる事を云ひ、爲すべからざる事を爲すの止むなきに至りぬ。吾等が父を拜み、子を敬ひ、聖靈に充たさるるを得るは唯だ信仰に據るの外道なきにも係はらず、止むなくも吾等は力なき人間の言を借りて人間の言の云ひ得ざる事をも云ひ顯はさんと企つ。而してこの不良なる手段は不良なる仇人の反對論によりて一層不良なる結果を惹き起さざるを得ず。斯くて無言の宗教的冥想に委ぬべき事柄を今や言語の中

に暴露して、危険の襲來に委せざるべからざるに至りぬ』

以上の引證は聖ヒラリーが三位一體論より抜粹せるものにして基督教會の神學書の最も古きものの中にあり。而してこは信條の定義に對する師父等の態度を最もよく代表せるものなり、彼等は煩瑣學徒の異りて全然定義と辯論とを好まざりき、固より彼等と雖も時々其必要を認めざりしにあらざりしと雖も之を認めざるを得ざるに至りし所以の理由を歎けり。否宛も彼等は斯る場合に於ては聖處を蹂躪せられ敬虔の目的物を穢され世界の奥義を蔑みせられたるかの如く感じたり。

故に茲に注意すべき事は聖ヒラリーも師父等も後のオウガスチンと均しく三位一體論の根據を事實の上に置き教會の洗禮式語の上に置きたる事なり。抑も洗禮の式語は始めより傳説上の解釋を伴ひしと雖も形而上學の議論を加へざりしは明なり。固より是の式語は歴史の推移に伴れて其意義甚しき變化を受けたるものなれば早晚何等かの説明を伴はざるべからざりき。されど説明なるものは如何なる階段に進むと雖も猶ほ個々人に自由解釋の餘地を残すものなるが故に